

ホテは。ツチコエテなり。一本にしかあり。通假の説あり。○藉此成驕。本に藉を籍に誤る。今正せり。さて此句の上に。蒼生などの二字を脱ししなるへし。文義を按るに。○能官の訓。官召の義なり。後に京官の除目をしかいへれど。此はさる差別のあるにあらず。たゞ官を授くるまでなり。

秋九月。任那使人奏云。毛野臣遂於久斯牟羅。起造舍宅。淹留二歲。一本云。二歲者。遠去來歲數也。懶聽政焉。爰以日本人。與任那人。頻以兒息。評訟難決。元無能判。毛野臣樂置誓湯。曰。實者不爛。虛者必爛。是以投湯爛死者衆。又殺吉備韓子那多里斯布利。凡日本人。娶蕃女。恆惱人民。終無和解。於是天皇聞其行狀。遣人徵入。而不肯來。願以河内母樹馬飼首御狩。奉詣於京。而奏曰。臣未成勅旨。還入京鄉。勞往虛歸。慚惡安措。伏願陛下待成國命。入朝謝罪。奉使之後。更自謨曰。其調吉士亦是皇華之使。若先吾取歸。依實奏聞。吾之罪過必應重矣。乃遣調吉士。率衆守伊斯枳牟羅城。於是阿利斯等。知其細碎。爲事不務。

所期。頻勸歸朝。尙不聽還。由是悉知行迹。心生讎背。乃遣久禮斯己母。使于新羅。請兵。奴須久利。使于百濟。請兵。毛野臣聞百濟兵來。迎討背評。背評地名。亦熊備己富里。傷死者半。百濟則捉奴須久利。桎械枷鎖。而共新羅圍城。責駟阿利斯等。曰。可出毛野臣。毛野臣嬰城自固。勢不可擒。於是二國圖度便地。淹留茲晦。築城而還。號曰久禮牟羅城。還時觸路拔騰利枳牟羅。布那牟羅。牟雌枳牟羅。阿夫羅。久知波多枳五城。

任那使人。本に人字なし。今北野本に據て補ふ。○久斯牟羅は。上に任那久斯牟羅とあり。○淹留二歲は。二十三年二十四年なり。○注に三歲者。遠去來歲數也。の違を。本に速に作る。秘閣本考本に依る。此注は後人の加筆なり。○懶聽政。本に政を改に誤れり。今秘閣本考本に據る。懶の訓ヨソホシスは。他所にする義なるへし。字鏡集に徐ヨソヨソ。性ヨソノフなどあり。ホシは詳ならず。其形を云語か。○兒息評訟とは。日本人の種族と。任那人の種族との評訟なり。○誓湯は。所謂盟神探湯なり。これ決め難きことのある時。神に誓ひて爲すわさなれど。此を濫に用る事のあしきなり。○無能判は。判決する才能なきものなりとの意なり。○吉備韓子は。吉備人の韓婦に合て。生める子なるか故に。しか云るなり。

注に凡日本の凡。本に大に作る。考本に凡とあるに據る。○遣人。本遣を違に作る。今考本集解に據る。○願以。本願を領に作る。今北野本中臣本集解に據る。○河内母樹馬飼首御狩。毛野臣の倅人なり。上に出。河内母樹の事。神武紀に云り。○京郷。秘閣本伴校本に京を帝とあり。其方宜し。○勞往虛歸は。赴任の時盛に人に勞<sup>イサ</sup>られて往しに。何の功もなく虚く歸ることの意なり。○慚惡。北野本中臣本慚を慚に作る。水戸本云。惡疑當作<sup>イサ</sup>慚とあり。訓オモナイコトは無<sup>ナキ</sup>面目<sup>ナリ</sup>なり。○調吉士。調は氏。吉士は姓なり。欽明紀に調吉士伊企健と云人あり。こゝは名を缺たるなり。さて調氏は。姓氏錄左京百濟に。調連。水海連同祖。百濟國努理使主之後也。譽田天皇御世歸化。孫阿久太。男彌和。次賀夜。次麻利彌和。憶計天皇御世。蠶織獻<sup>ニ</sup>絶絹之様。仍賜<sup>ニ</sup>調首姓。河内百濟に。水海連。百濟國人努理使主之後也。調曰佐同上。とあり。調吉士も此同族なり。持統紀に調忌寸老人と云も見えたり。さて此人は。上に遣<sup>レ</sup>人徵入とある即是なり。○取歸。考本に取字なし。○伊斯枳牟羅。詳ならず。○所期は。和解の事を期<sup>ヲ</sup>をるを云。○背評。詳ならず。熊川の地なるへし。亦名熊備己富里とあるもよしあり。通證に。今氏姓有<sup>ニ</sup>背評<sup>ニ</sup>訓同と云り。評は郡なり。皇國にても此字を郡に用し事。續紀一文武天皇四年六月。薩摩衣<sup>ヲ</sup>評<sup>ヲ</sup>督<sup>ヲ</sup>。衣君。助督衣君互自美とあり。考證云。案韓方言。謂<sup>レ</sup>郡爲<sup>レ</sup>評。梁書新羅傳。俗其邑在<sup>レ</sup>内曰<sup>ニ</sup>啄評<sup>ニ</sup>。繼體紀背評。又天平寶字八年七月紀。有<sup>ニ</sup>氷高評<sup>ニ</sup>。蓋此間因用<sup>レ</sup>之。評督亦見<sup>ニ</sup>神護景雲元年三月紀。及下野國那須國造碑。皇太神宮儀式帳。又案。儀式帳云。難波朝廷天下立<sup>レ</sup>評時云々。この立<sup>レ</sup>評と云ふ事は孝德紀に云へし。○注熊備己富里。

訓知かたし。秘閣本北野本考本及釋紀に。熊を能に作る。里下秘閣本北野本中臣本也字あり。○捉。北野本に投に作るは誤なり。續紀二十一天平寶字元年六月詔に。高御座<sup>ヲ</sup>次乎<sup>ヲ</sup>。加蘇毘<sup>ヲ</sup>奪<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>盜<sup>レ</sup>止爲<sup>レ</sup>而とあり。解云。加蘇毘は掠<sup>ル</sup>と同言なり。繼體紀に捉<sup>ル</sup>とあるも同言と聞ゆ。但しかれば人を捕をいへるなれど。とる意は一なり。又持統紀に偽<sup>ル</sup>兵とあるは。いかなる言かいたまた考へすとあり。但しかスキの假名誤なるへし。○柵械枷鎖。倭名抄柵和名天加之。械阿之加之。唐令云。盤枷。久比加之。私記云。鑑賀奈都賀利とあり。○責嗣。秘閣本京極本中臣本北野本に嗣を屬に作れり。百濟の。任那の使を捉へ。又其王を屬りしは。突然毛野臣の軍に要撃せられたるを以。任那王毛野臣に通して。己を欺きたりとの疑に出たるものなるへし。○便地。本便を使に作る。今秘閣本考本集解に據る。○淹留<sup>レ</sup>弦晦。通證に言<sup>レ</sup>涉<sup>レ</sup>月也とあり。弦は半月にて。四日五日の月を云。晦は月隱なれば。一月に盈ぬとは讀り。○久禮牟羅。不詳。○觸路。沿道なり。訓未詳。○騰利枳牟羅以下五城の地。詳ならず。いつれも任那の地なるへし。冬十月。調吉士至<sup>リ</sup>自<sup>レ</sup>任那<sup>ニ</sup>奏言。毛野臣爲<sup>レ</sup>人傲<sup>レ</sup>恨<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>閑<sup>ニ</sup>治體<sup>ニ</sup>。竟無<sup>ニ</sup>和<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>。擾<sup>レ</sup>亂<sup>レ</sup>加羅。又倂<sup>レ</sup>儻<sup>レ</sup>任意<sup>ニ</sup>。而忍<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>防患<sup>ニ</sup>。故遣<sup>ニ</sup>目頼子<sup>ニ</sup>徵召<sup>ニ</sup>。是歲<sup>ニ</sup>毛野臣被<sup>レ</sup>召<sup>ニ</sup>。到<sup>ニ</sup>于對馬<sup>ニ</sup>。逢<sup>レ</sup>疾而死<sup>ニ</sup>。送葬<sup>ニ</sup>。尋<sup>レ</sup>河而入<sup>ニ</sup>近江<sup>ニ</sup>。其妻歌曰。比羅<sup>ヲ</sup>寄<sup>レ</sup>馱<sup>レ</sup>喻<sup>ニ</sup>。輔<sup>レ</sup>曳<sup>レ</sup>輔<sup>レ</sup>枳<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>朋<sup>レ</sup>樓<sup>ニ</sup>。阿<sup>レ</sup>符<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>野<sup>ニ</sup>。愷<sup>レ</sup>那<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>倭<sup>レ</sup>俱<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>伊<sup>ニ</sup>。輔<sup>レ</sup>曳<sup>レ</sup>府<sup>レ</sup>枳<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>。

朋樓。目頼子初到任那時。在彼郷家等贈歌曰。柯羅屢爾鳴。以柯爾輔居等所。梅豆羅古枳駄樓。武哥左屢樓。以祇能和駄利鳴。梅豆羅古枳駄樓。

傲俚。訓神武紀に出。假字典胡登切。後漢書董卓自假用。字書に假同。很戻也。不聽從也。とあり。されど很は胡懇切なれば字異なり。○個儻。訓釋に多加保爾とある詳ならず。高ふる義にはあるへし。假名本にはかたほにとよめり。さらば物語文などにある詞なり。真帆に對したる語にて。片帆の義なり。河海抄にも。此文をかた保の注に引たれば。音訓なるへし。個儻は大志の事なれども。こゝにてはよからぬ方に高ふりて。氣かさの事に云るなり。○忍不防患。本に忍を思に作る。今は考本小寺本に據る。殘忍なる義なり。○目頼子。名義未詳。愛ら子の義か。次に守部説あり。○尋河。釋紀に尋河。私記曰。師說鬼道河也とあり。されどこれは淀河の岸にて。河内の枚方あたりの事にて。いまた宇治まで至れるにはあらし。宇治川より近江に浜りては。至るへからねはなり。地勢を以て知るへし。なほ次に云。○其妻歌曰。守部云。此歌はいまた近江に入さるほどに詠るなり。其は旅にて死したる故に。本郷に入を送葬とは云るにて。山城國淀川を浜りゆくほど。其妻近江より迎に出たるに。河内國枚方あたりにて。例の喪葬の樂の音を聞て。悲しみてよめる歌なりと云り。○比羅哥駄噓。從枚方なり。枚方は淀川の沿岸にある小邑なり。河内志。茨田郡村里枚方。關梁枚方驛。枚方橋。古蹟枚方故城。な

とあり。○輔曳輔能朋樓。笛吹上なり。舟中の音樂なり。守部云。この句いと感あり。近江妻は。たと病の事のみを聞て。速行て逢見むと。急き此處まで迎に出たるに。喪船の樂を聞て。いたく驚きたるなり。こゝはいまた旅路にて。送葬にはあらされど。うせし人のために。樂しつゝ淀川を浜れるにそありける。かゝるあはれを思ひやれる等。と云れたる。さることなり。○阿符美能野。近江之哉なり。野は助辭にて。與といふに同じ。之哉と云へる例は。萬葉。石見乃也。高角山之。淡海之哉。八橋之小竹乎。古今集にもあり。○愷那能倭俱吾伊。毛野之若子いなり。さて若子は通稱。妻より夫を指て云る。上に影媛か志毘能和俱其とよみしか如し。伊は強めて云助辭におけり。續紀十神龜六年八月詔に。京職大夫從三位藤原朝臣麻呂等伊云々とある處の解云。伊は多く人名の下に附ていふ助辭なり。繼體紀歌に。愷那能倭俱吾伊。十二詔に百濟王敬福伊。十九詔に奈良麻呂古麻呂等伊など。なほ諸の詔に殊に多し。萬葉四に木乃關守伊。九に菟原壯士伊。十二に家有妹伊など見え。又用言の下にも。十三詔に治賜伊自。また祖乃心。成伊自。四十五詔に此乎持伊自。稱乎致之。捨伊自。誘乎招都。萬葉三に玉緒乃不絶射妹跡。七に花待伊間爾。十九に不亂伊間爾などあり。そもく此助辭を置たる所は。賀といひても。波といひても。會といひてもよろしからざる處にて。まつ余といふに近けれども。余にてもなほ穩ならず。必伊といふへき所のあるなり。其味は例どもを考へわたして知るへしと云れたり。○輔曳府能朋樓。二句を再び返せるは。是悲しきことの限りなる故なり。毛野之若子か笛吹と云にはあらず。

四句にて切て。歎きを含めてさくへし。さて一首の意は守部云。わか夫の君か歸るとききて。うれしさに待かねて。難波まで迎に出たるに。思ひよらす。はや枚方に。喪船の笛吹のほるこそ悲しけれ。毛野若子伊。あなこひしやと。いふかひもなく笛吹のほるよとなりと云へり。○在彼郷家等贈歌曰。本に郷を卿に誤る。釋紀に依る。贈を本に賜に作る。今北野本中臣本考本。及釋紀等に據る。在彼郷家とは。毛野臣に従ひて任那に行し。此間の軍卒等なり。贈とは壹岐渡へ贈り來りしなり。○柯羅屢備鳴。韓國をなり。守部云。韓國をはの意なり。○以柯備輔居等所。如何言事そなり。輔は以輔を略り。等云を等布と云か如し。此句の意は。萬十五新羅御使人に。牟可之欲里。伊比那流許等乃。加良久爾能。可良久毛己許爾。和可禮須留可聞。とよめる如く。伽羅國をいかに云事そ。辛き國と云にはあらざるか。其をいかに思ひてかの意なり。○梅豆羅古枳駄樓。目頼子來なり。守部云。此名紀に未詳と記せるをおもへは。此時希見しき意に取てよめるを。語傳へて本名は失たるにやと云り。通證云。此以目頼子。寄希見之。義一。雖云辛國。而若斯希見人來也。云り。久老も。から國といへば。其海つ路も辛かるへき。めつらしき人も來れり。名をいひよせたるなりと云り。○武智左屢樓。守部云。向所離なり。向ひに遙に遠く放れるを云と云り。○以祇能和駄利鳴。壹岐渡をなり。守部云。壹岐は任那に向ひ離れるなるへし。渡りは其國へ渡る場を云。萬葉に對馬渡とよめるか如し。此國に風待などしてありし間。任那より便のついでに。いひ贈れるなるへし。○梅豆羅古枳駄樓。一首の意は。から國をいかに云こと。其名に負て辛き國といふにはあらざるか。それをいかに思ひてか。めつらしく目頼子來ぬるはと云意なり。解には。このわ

たりをややく起來りしは。から國の名には背けり。と云意なりと云り。

二十五年 辛亥

二十五年春二月。天皇病甚。丁未。天皇崩于磐余玉穗宮。時年八十。或本云。天皇二十八年歲次甲寅崩。而此云二十五年歲次辛亥崩者。取百濟本記爲文。其文云。大歲辛亥二月師進至子安羅。營乞毛城。是月高麗弑其王安。又聞。日本天皇及太子皇子俱崩薨。由レ此而言。辛亥之歲。當二十五年。矣。後勘。按者知レ之也。

二月。こゝに辛丑朔是月の五字あるへし。安閑紀にあり。○丁未。七日なり。○玉穗宮。本に玉を土に誤る。今正せり。○崩。記には丁未年四月九日崩とあり。丁未年は二十一年なれば。四年差へり。又月も日も差へり。○年八十二。記には肆拾參歳とあり。按に武烈天皇八年に。天皇御年五十七歳に坐せは。今年八十二歳なり。按に天皇の御壽を。記には四十三歳とせるによれば。安閑天皇の御壽。本紀に七十なる時は。其降誕は父帝の降誕に先たつこと二十三年。宣化帝の時。臨にも合はす。となる。本文に従ひて。御壽を八十二とすれば。安閑天皇は天皇の十七歳の時の御子にしてよく叶へり。○庚子。五日なり。○藍野陵。諸陵式云。三島藍野陵。磐余玉穗宮御宇繼體天皇。在攝津國島上郡。兆域東西三町。南北二町。守戸五烟。記には三島之藍とあり。和名抄攝津國島下郡安威阿郷。神名帳に同郡阿爲神社。雄略紀に三島郡藍原などある地なり。今も同郡に安威村ありて。安威山安威川などもあり。記傳云。式なる島上は。島下を寫誤れるか。但安威は。上下兩郡の堺

に甚近ければ。此御陵の地は。古は上郡なりしにや。今は下郡なりと云り。前皇廟陵記に。今在上郡島下郡界大田村。俗云池上亦茶白山と云。攝津志にも。在島下郡大田村。土人曰池上陵と云り。記傳云。大田村は安威村と隣へり。或説に島下郡十日市村の西方に。懸塚と云あり。灰塚とも云。これ藍野陵なりと云るは誤なるへし。十日市村は。大田村より西なり。又山城名跡志に。蘇我郡内里村の山に王塚と云あり。相傳へて繼體天皇の陵と云は不審。此帝の陵は。攝津國にあるなりと。さて天皇崩御の後。越前國足羽郡に祀られ玉ふこと。皇胤紹運録に。越前國足羽明神是也とあり。足羽神社是なり。さて又皇后の御陵は。諸陵式衾田墓。手白香皇女。大和國山邊郡朝和村大字中山に在り○注或本云。天皇二十八年歲次甲寅崩云々。大日本史云。本書注一本曰云々。古事記云。丁未歲四月九日崩。年四十三歲。與本書不レ合。其餘諸書皆以爲二十五年辛亥崩。今按安閑帝元年太歲甲寅。而繼體帝崩在辛亥。則壬子癸丑二年空位。然據本書安閑帝即位。是日天皇崩之文。不レ應レ有空位。本書注一本。二十八年甲寅崩之說近レ是。但二月無丁未。且安閑帝二月即位。而正月遷都。事理不レ通。然今無レ所考正と云り。そもく此御世と次の御世の間に。空位のありしこと。古くは天書に。二十六

年空位。二十七年空位とあり。後の物ながら源平盛衰記に。帝位空しき例。繼體天皇二十五年辛亥崩す。安閑天皇元年甲寅即位。二年空しとあり。記傳云。右の細注を思ふに。一説には二十八年甲寅崩しを。二十五年崩とは。元百濟本記に依て定められたりと聞えたり。抑此御世などは。やう近きことなれば。崩のことなどは詳にて。左右に異説はあるまじき物なるに。如此論ありて。異國の書に依て定められたるはいかにそや。一本に此細注なきは。かゝる事をいかうと思ひて。後人の加へたる物として。除き捨たるなるへけれとも。後に加へたるものとは見えざるなり。さて若二十五年辛亥に崩したらんには。壬子癸丑二年。御位を空しくしたるは何の由とかせむ。其所由を記されさることいかう。此を以て思へば。二十八年崩とせる方正じきか。若然らば其年を。即安閑天皇の元年とし置きたるなり。若又二十五年崩しならば。安閑天皇論なく御位に即坐へきを。大后の御腹の欽明天皇に譲り玉ひ。欽明天皇も互に譲り玉ひて。二年か間。御位空かりしか。其交譲給ひし事の。傳に漏たるにやあらん。欽明紀初に。安閑天皇の皇后に譲玉へる事のあるも。なほ其なごりにやありけん云れたり。武郷按に。天皇の崩御は。なほ本文の如く二十五年辛亥と定むへし。さて安閑天皇の元年は甲寅にて。其間壬子及癸丑の空位とすへし。さて其空位ありしは。記傳にも云れたる如く。太子皇子。互に御位を遜讓し玉ひしによりてなりけり。しか遜讓し玉ひし其原因は。或人云。もと皇國にては。嫡子を重しとし。庶子を輕しとすることにて。其極庶子あれとも嫡子なきを。子無しと云に至る。天皇元年紀に。大連雲。息は嫡子なき意にして。庶子の二皇子は。既に即位前に御降誕ありしこと既に云り。また天皇元年に。大伴大連の奏請に。非ニ維城之固。無ニ以鎮ニ其乾坤。非ニ掖庭之親。無ニ以繼ニ其趺躄とあり。これらを以て嫡子を重みし玉ひし事をしるへし。故以。神武天皇以降此時に至るまで。未だ庶子の嫡子を超えて。即位せる例はあらざるなり。庶子にて皇位を繼玉ひしは。清寧天皇のみなり。これ雄略天皇に嫡子なかりしが故なり。庶子の嫡子を超えて。即位せし例あらず。依りて按するに。勾大兄皇子は。既に皇太子の位にませと。嫡子たる欽明を超えて。即位

するを憚りて。互に位を譲り玉ふこと二年。勾大兄遂に即位し玉ふ。此遜位によりて。壬子癸丑二年の空位を生せしなり。宣化崩後に。山田皇后安閑皇后と欽明と。互に位を遜り玉ひしことも。欽明紀に見えたり。されどこの事は。記紀に明記せず。其傳の洩れたるものなるへし。されば繼體の崩御は二十五年にあり。空位二年は。安閑欽明二帝の遜位にありとすへし。さて又繼體の崩御に臨みて。太子に禪位ありしとの誤傳あり。されど禪位の事。神武以降皇極持統に至るまで。國史に記載せるものなし。上代には禪位あることなし。さて禪位は不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止ることありての上なるへけれど。後世の事は例すへからず。上代にては男帝の禪位あるへきさまならず。皇極持統二帝は。女帝の御上にて。男帝の御例にはなしかたし。女帝はもとより。一時の權議にて位に即玉ふなれば。然るへき御嗣の出來るを。待玉ふ御間の事なれば。遂には遜位あるへきは本よりなり。男帝にて讓位の始は。聖武天皇を以權與とすへし。此天皇はひたふるに佛道に溺玉へれば。かゝる御事をも始玉へるなれど。繼體帝の御時など。何の由もなく。さる御例を始玉ふへきにあらず。これを以ても其誤傳なることは明かなり。右の如く定めて。立かへり又云ふへし。原注に。或本云。天皇二十八年歲次甲寅崩。而此云二十五年歲次辛亥崩者。取<sub>二</sub>百濟本記<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>文。とある注文をわきまふへし。さるは此天皇の崩御は二十五年なれど。二年の空位ありしより。二十八年崩御と云る傳も世には有しなり。然るに今定めて二十五年と爲たるは。もとよりさる正しき本文ありしによりてなりけり。さるは其原書は既に亡せて。百濟本記のみ世に残りしかは。後人か此本文を。百濟本記

に依て。記せるものとおもひしなり。故取<sub>二</sub>百濟本記<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>文云々なども。注文に記ししなり。百濟本記はもとより外國の記なり。外國の書を取て。皇國の史を書玉ふへき道理なし。且此御世の頃は。記傳にも云れたる如く。やゝ近きことなれば。崩のことなどは。記せる書もあまたありぬへく。異國の書に依て。定め玉ふへきよしなきをや。二十八年崩とあるこそ。かへりて後に空位をあやしみて。つくり出し書と見えたり。されは今定めて二十五年となすへし○師進至于安羅。これは本紀の前文に。百濟新羅の二國か伽羅を攻めて。毛野臣と戦ける時に。二國圖<sub>二</sub>度便地。淹留弦晦。築<sub>レ</sub>城而還。號曰<sub>二</sub>久禮牟羅城。還時觸<sub>レ</sub>路拔<sub>二</sub>騰利枳牟羅云々五城<sub>一</sub>とある。これは去年の九月の事なるかことし。三月又百濟の師。安羅に至りて。再戦ひしものなるへし○乞<sub>二</sub>毛城<sub>一</sub>。本に毛を亡に作るは誤なり。今秘閣本考本通證集解等に據る。釋私記に。毛音德。集韻音磔とあり○弑其王安。中臣本弑を殺とあり。王安は高麗王名安なり。東國通鑑に。梁中大通三年。高句麗安藏王十三年五月。高句麗王興安薨。號<sub>二</sub>安藏王<sub>一</sub>とある是なり。此王は高句麗第二十二世の主なり。此天皇十三この年に當れり○太子皇子俱崩薨。本に薨を葬とあり。今秘閣本伴部本に據る。されど天皇の崩は。さもある事なれども。太子皇子の薨し給ひしこと此方になし。いかに聞ひかめたる事にか。熱按に。これは異國にて。此方の事を聞ひかめて。かくは語り傳へしものと見えたり。二年の空位を空しくし玉ひたりと訛傳して。かゝる事をも載しものと見えたり。されどかゝる非傳によりて。空位ありしことは。たしかに知られさて此或本の九十六字を。集解に私記摺入なりとして。或以爲本注非。凡撰<sub>レ</sub>紀時。有<sub>二</sub>異同之

説。則討論從實。豈復表其所出。而如後世注家。耶。是無稽之說也。蓋此私記不出延喜以下也。と云  
るは却て非なり。記傳に云れたる説に従ふへし。

日本書紀卷第十七終

秘閣本終字なし

日本書紀通釋卷之四十八

飯田武郷謹撰

日本書紀卷第十八

勾大兄廣國押武金日天皇

安閑天皇

武小廣國押盾天皇

宣化天皇

勾大兄廣國押武金日天皇

安閑天皇

集解に廣國上勾大兄三字を補たり。本文に有に據れるなり。今も其に據て補へり。荀子疆國篇曰。恬然  
如無治者。楊倞曰。恬然安閒貌。

勾大兄廣國押武金日天皇。男大迹天皇長子也。母曰日子媛。是天皇爲  
人。墻字巖峻。不可得窺。桓桓寬大。有二人君之量。二十五年春二月辛

安閑天皇  
紀

丑朔丁未。男大迹<sup>オホヒナ</sup>天皇立<sup>オホヒナ</sup>大兄<sup>オホヒナ</sup>爲<sup>オホヒナ</sup>天皇。即日男大迹<sup>オホヒナ</sup>天皇崩<sup>オホヒナ</sup>。是月以<sup>オホヒナ</sup>大伴金村大連。物部麿鹿火大連爲<sup>オホヒナ</sup>大連。並如<sup>オホヒナ</sup>故。

勾大兄廣國押武金日天皇。御名義既に云へり。○喉峻。本に喉を凝に作る。中臣本に喉岐に作る。考本に巖峻とあり。文選三國名臣序贊に牆宇高巖。晋書に風操喉峻。易注巖巖整貌とあれば。巖峻とあるを宜しかるべき。今考本に従ふ。牆宇。論語注に若<sup>ニ</sup>牆宇高。不可<sup>レ</sup>窺<sup>ニ</sup>見其内<sup>一</sup>也とあり。○桓々は。尙書注に威武貌とあり。○立大兄爲天皇。此を御讓位の始と謂へしと。通證に云れたる。後の例を以て見ればさも云へけれど。上代の意にあらず。さるは上古には。天皇崩し玉へは。太子直に即位し玉ひし事。後世の如くならず。この文も男大迹天皇崩。即日立<sup>ニ</sup>大兄<sup>一</sup>爲<sup>ニ</sup>天皇<sup>一</sup>と有へき文の。聊か反さまになれるまてなり。そもく讓位と云ことのは。皇極天皇に其端を開き。其後持統天皇太上皇の例を始玉へるは。みな女主に坐々しか故なり。○この事。然るに聖武天皇以後。讓位のこと終に定例となりぬ。蓋皇極持統二天皇は。女帝攝政の御心より起りつるものなれば。固よりしかあるへき理なれども。聖武天皇男帝として。讓位の例を創め玉へるは。全く佛法を信じ玉ひし餘に出たる御わさにて。上代の義にそむけり。この天皇何の謂も坐々ぬに。いかてか讓位し給ふべき。且讓位して其日に崩し玉ふなと。後世權臣の強迫に據れるか如き例と。一つに見るべき當時のさまにもあらぬをや。かへすくも

あるまじき論なりかし。○天皇踐祚の御年。大日本史云。時年六十八。注云。據<sup>ニ</sup>水鏡愚管抄歷代皇紀。及本書崩年七十之文<sup>一</sup>とあり。○以大伴金村大連。本に金村二字なし。今考本集解に據る。大連下中臣本爲<sup>ニ</sup>大連<sup>一</sup>の三字あり。○並如故。大日本史。按本書元年。載<sup>ニ</sup>物部大連尾與事<sup>一</sup>。欽明紀亦曰。物部尾與爲<sup>ニ</sup>大連<sup>一</sup>如<sup>レ</sup>故。據<sup>レ</sup>此則尾與爲<sup>ニ</sup>大連<sup>一</sup>。蓋<sup>ニ</sup>此時<sup>一</sup>公卿補任曰。尾與初任年月未<sup>レ</sup>詳とあり。

元年春正月。遷<sup>ス</sup>都<sup>ヲ</sup>于大倭國<sup>ノ</sup>勾<sup>ノ</sup>金橋<sup>ニ</sup>。因爲<sup>ニ</sup>宮號<sup>一</sup>。

元年甲寅

大倭國勾金橋。記云。坐<sup>ニ</sup>勾之金箸宮<sup>一</sup>治<sup>ニ</sup>天下<sup>一</sup>也。記傳云。勾は大和國<sup>ニ</sup>。此地名此處彼處にあり。廣瀨郡なるべきか。崇峻卷に廣瀨勾原と見え。和名抄に廣瀨郡に下句と云郷あり。是志母都麻賀理と訓へし。句は勾の正字にて。説文に曲也と云り。然るを麻賀理には。勾とのみ書ならへる故に。句とは別なるか如く思ふべし。凡て口を省きてムと書例。圖説など常の事にて。多くあり。さて伊邪河宮條に。當麻<sup>ニ</sup>勾<sup>一</sup>とあるは。此の勾と同地か別か。詳ならず。但此宮は帝王編年記には。大和國高市郡とあり。○神明鏡と云書にも。高市郡勾金橋宮と記したり。此高市郡にありと云は。懿德天皇のむ。大和志に此金箸宮を。在高市郡<sup>ニ</sup>。曲川村<sup>一</sup>と云。曲川村舊名曲金と云り。此曲川村は輕と放りて遠くして。廣瀨郡の界に近ければ。若此宮其地ならば。かの崇峻卷なる勾原。和名抄の下句など。一地にて。古は廣瀨郡なりしか。後に高市郡には屬るにや。なほよく考ふべし。何れならむ定めかたしと云れたれど。なほ三才圖會地部。在<sup>ニ</sup>勾川村八木之西半里<sup>一</sup>。舊都趾要覽云。高市郡金橋村大字曲<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>字大宮坪とあれば。高市郡の方なるへし。さて又記傳に。此天皇の御名。書紀に勾大兄皇子とあれば。本より此地に住居坐りしなり。金箸宮。箸は橋の意か。はた箸に由ありて名けられたるか知かたし。さて此を書紀には。因爲<sup>ニ</sup>宮號<sup>一</sup>と。本よりの地名の如く記されたれども。此宮を



贊稱たる名の如くにも聞わたり。續紀十八に。勾金時宮とあるは。梅を時と誤れるなり。例なき記さざり。と云り。例なき記さざり。と云り。例なき記さざり。と云り。

三月癸未朔戊子。有司爲フカサセト天皇。納ノク采億計天皇女春日山田皇女。爲シテ皇后。

更名。山田赤見皇女。別立ニ三妃立ニ許勢男大臣女紗手媛。紗手媛弟香香有媛。物部

木蓮子木蓮子。此云伊拖寐。大連女宅媛。

戊子。六日なり。納采云々爲皇后。山田皇女の御事は。既に繼體紀七年に見え。八年の處には太子妃

云々とある物を。此に納采と記されたるは。前後違へるか。こゝは立正妃春日山田皇女。爲皇

后。とあるへき格なり。集解に。按。春日皇女。在繼體天皇七年。此以納采初婚之禮。爲文。水戸本及舊事紀に。爲

皇后の上立字あり。○山田赤見皇女。赤見地名に依れる御名か詳ならず。倭名抄美濃國大野郡明見

郷あり。○別立三妃の下に。本書立字あり。衍なるへし。集解には削たり。○紗手媛。名義未詳。もしく

は地名か。さて此下に紗手媛三字あるを。類史一本には關れたり。されど諸本に盡く有り。なきは誤

なり。○香々有媛。香々有はカ、リと訓へし。これも名義詳ならず。○物部木蓮子。天孫本紀に。物部木蓮

子連公。饒速命の十二世孫也。布都久留大連之子とあり。さて注に。木蓮子此云伊拖寐とあり。木蓮子は。倭名抄

木蓮子。崔禹食經云。木蓮子以太比。本草云。折傷木。箋注云。本草和名。心方。並引崔禹食經。載之。按本草拾遺云。薛荔實。似。薛荔。中有。細子。一年一熟。一名木蓮。打破有白汁。停久如。漆。本草圖經。結石條云。薛荔與此極相類。但坐實處大如。梅狀。木蓮。更大如。結石。其實若。薛荔。李時珍曰。木蓮。結石。樹木垣地而生。四時不凋。厚葉堅強。大如。子結石。不。花而實。實大如。孟。微似。蓮蓬。

而將長。正如。無花果之生者。六七月實。內空而紅。八月後。滿腹細子。大如。神。子。一子一。其味。其酸。其。鳥。充。以太比。爲。九。とあり。さて折傷木は。千金翼方證類本草等にも載せ。本草和名にも載せられた。木蓮子とは異物にて。順朝臣のこゝに載せたるも。新撰字鏡にも。折傷木伊太比一云木蓮子とあるは。みな誤なること。箋注に委く弁へられたり。或人云。イタビとよむへし。これは犬タブとも。キマンヂウとも云ものなり。類史。平城天皇延暦二十五年。停諸國雜費。腹赤魚。木蓮子等。と云ふ事もみえたり。この物に據て負たる名なるへし。大連は此氏にて云る稱なり。大臣大連の事にはあらず。

夏四月癸丑朔。内膳卿膳臣大麻呂。奉勅遣使。求珠伊甚。伊甚國造等。詣京。遲晚。踰時不進。膳臣大麻呂大怒。收縛國造等。推問所由。國造稚子直等恐懼。逃匿後宮內寢。春日皇后不知直入。驚駭而顛。慚愧無已。稚子直等兼坐闕入。罪當科重。謹專爲皇后。獻伊甚屯倉。請贖闕入之罪。因定伊甚屯倉。今分爲郡。屬上總國。

内膳卿。職員令に。内膳司。奉膳二人。掌下總。知御膳。進食先嘗事とある。この奉膳と云るか。即ち卿の事なり。そもく膳の事は。景行紀に既に云るか如く。天子の御膳を司る職なり。其は姓氏錄左京皇

別に。高橋朝臣云々。大稻與命之後也。景行天皇巡狩東國。供獻大蛤。于時天皇喜其奇美。賜姓膳臣。天淳中原瀛真人天皇。諡天武十二年。改膳臣。賜高橋朝臣。とあるか如く。はじめ膳臣なるか。後に高橋朝臣の姓になれるなり。さてまた安曇氏も膳の事を掌れり。このことは既に神代紀に云り。續紀神護景雲二年。勅准令。以高橋安曇二氏。任内膳司者。爲奉膳。其以佗氏任之者。宜名爲正。式部式凡内膳司長官。除高橋安曇二氏以外爲正とあり。とあるか如く。奉膳と云るは。此二氏に付たる。古き名なるへけれども。この御世の頃には。未ださる稱はなかりしものと見えて。こゝに卿と云り。卿は後の八省の長官の稱なれども。此頃はなへての司の長官にも。此字を用ひしものか。また後より回らして書るものか。未詳ならず。かゝる例。令制以前には數多見えたり。さてまた令には。大膳。内膳。主膳等の差別あれども。當時未ださるわさありしにはあらざるへし。故訓にはそれらを思ひて。單に内膳を。カシハテノツカサとは訓じものと見えたり。後の制によらば。内をウチと訓へ。○求珠。珠は眞珠なるへし。善き珠持る事を聞食して。求めさせ玉ふなるへし。大膳の大に對すへければなり。○求珠。珠は眞珠なるへし。善き珠持る事を聞食して。求めさせ玉ふなるへし。○伊甚國造。伊其は倭名抄に。上總國夷瀆郡伊志美是なり。なほ次に云。この國造は。記に天菩比命之子。建比良鳥命。伊自牟國造之祖也。國造本紀に。伊甚國造。志賀高穴穗朝御世。安房國造祖。伊許保止命孫。伊己侶止直。定賜國造とあり。安房國造は。阿波國造。天穗日命八世孫。彌都侶伎命孫。大伴直大瀧。定賜國造とありて。此國造も。同祖より出たることは定かなれど。伊許保止命も。伊己侶止直も。此他のものに見えず。○關入罪。漢書成帝紀に。走入橫城門。關入尙方掖門。注無符籍。妄入宮曰

關○今分爲郡屬上總國。房總志料に。埴生郡一宮村の南。繩田。椎木。中原。泉等の邑。古の夷瀆郡なりと云り。重胤云。伊其は本出雲國の地名より出たるなるへし。出雲風土記。出雲郡伊自美社。式伊其神社に作れり。證とすへきかと云り。

五月。百濟遣下部脩德嫡孫。上部都德己州己婁等。來貢常調。別上表。秋七月辛巳朔。詔曰。皇后雖體同天子。而内外之名殊隔。亦可以充屯倉之地。式樹椒庭。後代遺迹。迺差勅使。簡擇良田。勅使奉勅。宣於大河内直味張更名。曰。今汝宜奉進膏腴雌雉田。味張忽然恠惜。欺誑勅使曰。此田者天旱難溉。水潦易浸。費功極多。收穫甚少。勅使依言。服命無隱。

下部脩德。隋書百濟傳に。官有二十六品。長曰左平。次大率。次恩率。次德率。次扞率。次奈率。次將德服。紫帶。次施德皂帶。次固德赤帶。次季德青帶。次對德以下皆黃帶。とあり。脩德は將德七品なるへし。通證に充たり。○上部都德は。右の固德九品なるへし。通證に。都德を將德に充たるは。次序たかへり。誤りなるへし。都德は或人對德ならんと云り。十一品なり。○己州己婁。本に己を巳に作るは誤なり。今釋紀に據る。○秋七月辛巳朔。この干支はよく當れど。此事こゝにあ

りては下文と合はす。なほ次に云へし○體同天子。集解に。同體原倒誤寫。後漢書皇后紀論曰。后正三位宮闈。同體天王と云り。されど本のまゝにてもあしからず○内外之名殊隔。考云。内外云々とは。椒房は内なれば。表向とは隔ありて。人も御名を知らぬ事あり。屯倉を置玉は。後代まで御名傳はらむとなりと云り○式樹椒庭。文選注に椒庭取<sub>ニ</sub>其芳香<sub>一</sub>とあり。皇后官の事なり。樹とは椒庭に屯倉の地を樹置く事なり○簡擇。本に簡を簡に作る。今改め正せり○大河内直。神代紀に大を凡に作れり○注里梭。北野本中臣本考本に。里を黒に作れり○汝宜。本に宜を宜に作る。今北野本中臣本考本に據る○奉進膏腴雌雉田。本に腴を腹に作る。今改め正せり。雌雉田は。集解に河内國地名と云れたるは。さる言なるへし。其名義は詳ならず。然るに集解に。檢河内志。石川郡村里有<sub>ニ</sub>喜志<sub>一</sub>。又逢川郡村里有<sub>ニ</sub>岸田堂<sub>一</sub>。又佛利長樂寺在<sub>ニ</sub>岸田堂村<sub>一</sub>。一名岸田寺と云れたるは。本の訓に據られたるにておほつかなし。こゝは雌雉田を。記傳にメキ、シタと訓まれたるに據へし。雌雉とあるを。單にキシと讀へからず。また記傳云。此は真田を擇ひて。後宮に充る屯家の地と爲玉はむ爲に。味張か領地の内を擇りて。獻れと宣へるなりと云れたるは。雌雉田を膏腴の田の事と見られたるへけれど。さては味張か言に。此田者云々と云。○水潦易浸。本の訓に。水を下の句に付たるは誤なり。さてイサラミツは。皇極紀に潦水をもしか訓り。六帖に。我門のいさら小川の増水の。ましてそ思ふ君ひとりをは。和訓栞に。淺ら水の義なるへしと云り。按に潦は。倭名抄に爾八太豆美とありて。急に出る水を云なれば。淺ら水にては叶はす。六帖なるいさら小川の義にはあるへからず。假名本には。いさほみつと訓めれど。それも誤と見えたり。さらは此の訓には叶かたくやあらん。記傳にこれを。ナカメニハと訓れたり。是は水潦の字をはなれて。よまれたるなれど。しか讀たらんには。こゝに叶ふへし。浸をコミと訓めるは。應神紀に滂字をもよめり。今

もしか云へれば。これは叶へり。假名本にはヒヨリと訓り。それもよろし。○服命無隱。この下に本の三丁左五行大伴大連奉勅宣曰。率土之下云々より。勿預郡司四丁右と云までの文あり。此に入るへし。なほこの事は次に云へし。こゝは必錯簡あるへし。

冬十月庚戌朔甲子。天皇勅大伴大連金村曰。朕納<sub>ニ</sub>四妻<sub>一</sub>。至今無嗣。萬歲之後。朕名絕矣。大伴伯父。今作<sub>ニ</sub>何計<sub>一</sub>。每念於茲。憂慮何已。大伴大連金村奏曰。亦臣所憂也。夫我國家之王。天下者。不論有嗣無嗣。要須因<sub>ニ</sub>物爲<sub>一</sub>名。請爲皇后次妃。建立屯倉之地。使留<sub>ニ</sub>後代<sub>一</sub>。令顯前迹。詔曰可矣。宜早安置。大伴大連金村奏稱。宜以小墾田屯倉。與<sub>ニ</sub>每國田部<sub>一</sub>。給<sub>ニ</sub>貲紗手媛<sub>一</sub>。以<sub>ニ</sub>櫻井屯倉<sub>一</sub>。與<sub>ニ</sub>每國田部<sub>一</sub>。給<sub>ニ</sub>貲宅媛<sub>一</sub>。以示<sub>ニ</sub>於後<sub>一</sub>。式觀<sub>ニ</sub>乎昔<sub>一</sub>。詔曰。依<sub>ニ</sub>奏施行<sub>一</sub>。

甲子は十五日なり○大伴伯父。集解。按尊而稱<sub>ニ</sub>伯父<sub>一</sub>と云り。記崇神段に。大毘古命をさして天皇の伯

父と詔ひしことあり。これはまことの御伯父にあたり坐せとも。しか詔ひし意は。伯父はもと小父にて。父の齡なる人を崇め親しみて云稱なれば。なほまことの御伯父を。指玉ふ方にはあらて。こゝに大伴伯父と詔ひし意と一なるへし。要須因物爲名。これ所謂御名代の義なり。○小墾田屯倉。小墾田は高市郡なり。此地の事。記の小治田宮の下なる記傳云。此地穴穗宮段に出。又書紀安閑卷に小墾田屯倉。欽明卷に蘇我稻目大臣之小墾田家などみゆ。さて推古卷に。泊瀬部天皇五年十一月云々。冬十二月皇后即天皇位於豐浦宮。十一年冬十月。遷小墾田宮とみゆ。又皇極卷元年十二月。天皇遷移於小墾田宮。孝德卷に小墾田宮云々。齊明卷に元年冬十月。於小墾田造起宮闕云々。天武卷に小墾田兵庫。續紀二十三に幸小治田宮。また小治田岡本宮。二十六に到大和國高市小治田宮。萬葉十一。小墾田之。坂田乃橋之。靈異記に其雷落處者。今呼雷岡。田宮者。在古京小治田宮。小治田は即飛鳥と同地にて。飛鳥を此御世のころ。武郡云。推古の御世なり。小治田と云しなるへし。其故は右に引る續紀に。小治田岡本とあるは。即飛鳥の岡本宮と聞え。靈異記に雷岡とあるは。即今も雷土村と云て。飛鳥の神奈備山と云處なり。又萬葉に小墾田乃坂田橋とあると。用明紀推古紀に。南淵坂田寺とあると同地にて。今飛鳥の東南の方近く。南淵村坂田村などあり。これらを思ふに。飛鳥の地を廣く小治田と云しなるへし。此小治田宮を。大和志に在豐浦村と云り。豐浦村も近き地にはあれども。此天皇初に坐し豐浦宮を。彼宮のあたりにそあるへき。小治田宮は。今の雷土村。飛鳥村。岡村。坂田村などのあたりの地の内にそありけん。また或説に。十市郡の大淵村。其地なりと云るは違へり。と云れたるにて詳かなり。なほ播磨風土記に小治田。河原天皇之世云々と云事あり。これも飛鳥河原とも云れば。又一證とすへし。○田部の事は。既に景行紀に云り。さて田部を給ふは。國々にある田部の内を取て。今賜ふ屯倉に屬て玉ふを云。其屯倉の御田を佃らしめむかためなりと記傳に云り。○櫻井。河内國河内郡櫻井これなり。○茅淳山。本に茅を菜に誤れり。今正せり。茅淳既に出。山は茅淳にある地名か。神武紀に茅淳山城あり。又茅淳山井ともあり。○每郡鑿丁。本に鑿を鑿に作る。今集解に依て改む。通證に此謂耕作之男丁也とあり。記傳云。鑿丁は公の御田を耕るに役はる丁を云。其は田事のいそかしき時は。田部の外に加へ役ふと見えたりと云り。重胤云。鑿丁は田令に謂ゆる。官田の役丁に。耕種を成す爲に充使ふ雜徭を云なりと云り。

閏十二月己卯朔壬午。行幸於三島。大伴大連金村從焉。天皇使大伴大連。問良田於縣主飯粒。縣主飯粒慶悅無限。謹敬盡誠。仍奉獻上御野。下御野。上桑原。下桑原。并竹村之地。凡合肆拾町。大伴大連奉勅宣曰。率土之上莫匪王。封普天之下莫匪王。域故先天皇建顯號。垂鴻名。廣大配乎乾坤。光華象乎日月。長駕遠撫。橫逸乎都外。瑩鏡

區域。充塞乎無垠。上冠九垓。旁濟八表。制禮以告成功。作樂以彰治定。福應允臻。祥慶符合於往歲矣。今汝味張。率土幽微。百姓。忽爾奉惜王地。輕背使乎宣旨。味張自今以後。勿預郡司。

閔。北野本潤に作る。類史諸本に此字無きは誤なり○壬午。四日なり○三島。攝津志に島上島下豊島。以上三郡。古渾曰三島。とあり○縣主飯粒。三島縣主なり。姓氏錄右京神別。三島宿禰。神魂命十六世孫。建日穗命之後也。稱德紀。神護景雲三年。攝津島上郡人。正六位上三島縣主廣調等。賜姓宿禰。光仁紀。寶龜元年。三島縣主宗麻呂賜宿禰。とあり。村上帝時。本族攝津島上郡大少領に任する者あり。朝野群載にみえたり。其後裔大炊頭三島宿禰久頼。子あり久任と云。紀朝臣長谷雄五世孫頼任に養はれて。河内阿波等守になれること。紀氏系圖に見えたり。續後紀。遣唐造舶次官三島公島繼と云人あり。何れの族にか詳ならず。飯粒は字の如き義なるへし。攝津國攝津郡也。飯粒より出たる名なること。風土記に見えたり。○飯粒慶悅。この上に文の脱落等ありしにもやあらん。慶悅せし謂れあるへし○上御野下御野。倭名抄攝津國西成郡三野あり○上桑原下桑原。内山真龍云。攝津國豊島郡に桑津郷あり。恐らくは此なりと云り。いかゝあらん。集解に播磨國揖保郡桑原を引られたれ。國異なればいかゝなり。和名抄大和國葛上郡桑原郷。志に同吉野郡村名上桑原下桑原あり。もしくは是か○竹村。訓竹生の義なり。下文に三島竹村屯倉とあり○凡合。本に凡を元に作

る。今集解に據る○大伴大連。以下の文は。上文の服命無隱の下に必ず入へし。しからずては更に聞えかたき事多かり。後に伊勢貞丈か。此本紀錯簡考といふものを見しに。同氏も既にしか云れき○率土之上。普天之下。本に上下を互に誤れり。今考本に據る。集解にも改めたり。毛詩に溥天之下。莫非王土。率土之濱。莫非王臣。とあり。聊か文字を替たるまでなれば。本の如くては。義理叶はされはなり○故先天皇。本に先を元に作りて。モトヨリと訓たれ誤なり。今北野本中臣本考本本書旁書に據る○旁濟八表。原濟字脱したり。今中臣本北野本に據る。但し北野本には。邊に作れり。濟字の誤寫なること著明し。集解にも既に。藝文類聚に引る善政碑といふものに據て補へり。考本には本のまゝにて。旁上に下字あり。それもあしからねど。なほ右等の本によるへし○允臻。本に臻を致に作る。今集解に改めたるに據る○今汝味張云々。此にて上の七月の事につづきなる事明らけし。今本のまゝにては。文意きこえかたし○郡司の名目。はじめて見えたれ。こゝは後の孝徳紀以下郡司の事にはあらず。栗田寛もこの郡司と云は。國造の事を云しにや。當時郡司と云稱无れはなりと云れたり。

於是縣主飯粒。喜懼交懷。廼以其子鳥樹。送大連爲僮豎焉。於是大河内直味張。恐畏永悔。伏地汗流。啓大連曰。愚蒙百姓。罪當萬死。伏願每郡以饘丁。春時五百丁。秋時五百丁。奉獻天皇。子孫不絕。藉此

祈<sup>イシチ</sup>生<sup>シテ</sup>永<sup>ム</sup>爲<sup>ス</sup>鑿<sup>アト</sup>戒<sup>ト</sup>。別<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>狹井田六町<sup>ヲ</sup>。賂<sup>ニ</sup>大伴大連<sup>ニ</sup>。蓋<sup>シ</sup>三島竹村屯倉者<sup>ヲ</sup>。以<sup>テ</sup>河内縣部曲<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>田部<sup>ノ</sup>之元<sup>ト</sup>。於是乎起<sup>ス</sup>。

於是縣主飯粒云々。此以下二十三字は。此に在てはいかゞなるやうなれども。故伊勢貞丈は。此文を上凡さ合註拾明の下に移したり。れとよく思ふに。味張か宣旨に背きて。郡司を廢せられしことを聞て懼れ。己か良田を奉獻りし事の。天皇の御旨に叶へる事を喜ひて。喜懼交<sup>レ</sup>懷<sup>シ</sup>なるへし。さてそ其歎を大連に送りて。心を表せしなるへし。然か見る時は。この文こゝに在て。さらに妨げなかるへし。さて其事ともを聞て。ますく味張か後悔せしさまに記されたるなるへければ。なほ本のまゝに此に在てよろしかるへし○送大連。本に送を獻に作り。今北野本に據る○僮豎。本に豎を豎とあるは誤なり。今改め正せり。訓シトへは。皇極紀に僮從をシトリへとよめれば。後執部の義なり。シトリを。後には倭名抄郷名に従省之志無と訓り。言意は。主の後に從ひて仕ふる義なり。漢書注に僮者婢妾之通稱。説文に豎童僕未<sup>レ</sup>冠<sup>ト</sup>なり○永悔。本に永を求に作る。今考本集解に據る○汗流。本に汗を汗に誤る。今正せり○每郡鑿丁春時五百丁云々。五百丁は五百人なり。集解に。按假令河内國今十四郡。每一郡充<sup>ニ</sup>五百丁<sup>ト</sup>。合七千丁。通<sup>ニ</sup>春秋<sup>ト</sup>萬四千丁。以給<sup>ニ</sup>田作<sup>ト</sup>爲<sup>レ</sup>購<sup>ト</sup>とあり。されどこゝはたゞ大凡に云るものにて。さる細かき事はしらるへきにあらず○狹井田。此地詳ならず。集解にこれを大和國城上郡狹井の地として。大河内直所<sup>レ</sup>領也と

あれど。これはなほ河内なるへし○三島竹村屯倉云々とは。古より三島の竹村屯倉の御田を佃るには。河内縣の百姓を以。田部として役ふ。これかの味張か。鑿丁を獻り初しより起れる事と云なり。河内縣の部曲は。味張か領れりしところなり。部曲は孝徳紀に部曲之民とあり。カキは垣に同じ。我が所有の限<sup>カキ</sup>内の民の意なり。こゝにウチャッコと訓も。内奴にて意は同じ。氏奴と。釋紀に云るは誤なり。されど云ひもてゆけば。氏も内の義なれば意は通へり。○爲<sup>ニ</sup>田部<sup>ト</sup>之元<sup>ト</sup>とは。竹村の田部と爲るの元なり。舊讀は誤なり。

是月。廬城部連<sup>イホキ</sup>杵苕<sup>シ</sup>喻<sup>コ</sup>女幡媛<sup>メカ</sup>。偷<sup>ヌスミ</sup>取<sup>テ</sup>物部大連尾輿<sup>ツコシカ</sup>瓊瑠<sup>シヒメ</sup>。獻<sup>ス</sup>春日皇后<sup>ニ</sup>。事至<sup>テ</sup>發覺<sup>ス</sup>。杵苕<sup>シ</sup>喻<sup>コ</sup>以<sup>テ</sup>女幡媛<sup>ヲ</sup>。獻<sup>ス</sup>采女<sup>ニ</sup>。是春日部<sup>ニ</sup>。并<sup>テ</sup>獻<sup>ス</sup>安藝國過<sup>リ</sup>戸廬城部屯倉<sup>ヲ</sup>。以<sup>テ</sup>贖<sup>ス</sup>女罪<sup>ト</sup>。

廬城部連。類史に廬を廬に作れり。紀中にかく通はし云る。外にもあり。誤にはあらず。さて此氏の事雄略紀に出○杵苕<sup>シ</sup>喻<sup>コ</sup>。名義詳ならず○物部大連尾輿。天孫本紀に。十三世孫<sup>饒連日命</sup>物部尾輿連公。荒山大連之子。荒山大連は。目大連之子なり。此連公。磯城島金刺宮御宇天皇御世爲<sup>ニ</sup>大連<sup>ト</sup>。奉<sup>レ</sup>齋<sup>ニ</sup>神宮<sup>ト</sup>。かくあれども。此に既に大連とあれば。此御世に既になり。弓削連祖<sup>倭古連女子</sup>門佐姫。次加波流姫爲<sup>レ</sup>妻。兄生<sup>ニ</sup>四兒<sup>ト</sup>。弟生<sup>ニ</sup>三兒<sup>ト</sup>とあり。守屋大連公も此人の子なり○瓊瑠は。頸玉なり。瓊瑠の字は。類書要に。婦人首飾部。瓊瑠以<sup>レ</sup>珠爲<sup>レ</sup>之とあり。記傳云。これに因れば。當時頸玉に貴き品有つと見えたりと云り○采女丁。孝徳紀に。采女從<sup>ニ</sup>丁<sup>ト</sup>一人。從<sup>ニ</sup>女<sup>ト</sup>二人。賦役令に采女女丁とあり。采女

の召仕ふ女なり。なほ孝徳紀に云へし○春日部采女。繼體紀に。此皇后に匝布屯倉を賜へる事見わたり。されは其屯倉より出たる。采女の丁となれるなるへし。春日も匝布も一ツなるべし。下に火國春日部屯倉。阿波國春日部屯倉もあり。されとそれらにはあらし○安藝國過戸。廬城部屯倉。過戸はアマムルへと訓へし。舊訓は誤なり。又思ふに。コシと云も。餘りて員外に超過たる義か。されとを誤るるへし。此は一郡に過れる民戸の事にて。倭名抄に諸國に餘戸とある。みなこのよしなり。さて安藝國なる廬城部も。この廬城部連か領り居れる地なるを以て名けしなるへし。

物部大連尾輿。恐事由己。不得自安。乃獻十市部。伊勢國來狹々。登伊來狹狹登伊。二邑名也。贄土師部。筑紫國膽狹山部也。武藏國造笠原直使主。與同族小杵。相爭國造使主小杵。皆名也。經年難決也。小杵性阻有逆。心高無順。密就求援於上毛野君小熊。而謀殺使主。使主覺之走出。詣京言狀。朝廷臨斷。以使主爲國造。而誅小杵。國造使主。悚憲交懷。不能默已。謹爲國家奉置橫淳。橘花。多氷。倉樸。四處屯倉。是年也太歲甲寅。

十市部は。大和國十市郡にて。此大連の領れる地なり。先祖十市根大連か。石上神寶を治りて。十市

根と云る名を負へるも。此氏のもごとより領れる地なるか故なり。さて此上に脱字あるかご云る説もあれども。倭國なるは。おほかた國名を云はさる例なれば。なほ本のまゝにてよろし○來狹狹登伊贄土師部。雄略紀に。土師連吾筥。進攝津國來狹々村。伊勢國藤形私民部。名曰贄土師部。とあり。之に據れは。來狹々は攝津國なるを。こゝに伊勢と爲しは誤なるべし。通證に。或伊勢國亦有同名。贄と云へれど。いかもあらん。登伊未だ詳ならず。さて右に見えたる如く。來狹々の贄土師部は。既く朝廷に進れるを。其後また物部氏の賜はりて。領り居れりしなるへし。なほ雄略紀見合すへし○筑紫國膽狹山部。倭名抄に豊前國京都郡諫山あり。續紀十三。豊前下毛部疑少領。无位勇山伎美廣あり。其處の部なり。膽狹の山部と云にはあらす。○笠原直。倭名抄武藏國埼玉郡笠原あり。此氏武藏國造の支別の姓なるへけれど。ものに見えず。さて此時未だ國造にてありしにはあらず。其姓につきて云るまでなり○小杵。名義詳ならず○性阻。本にイハメウテは未詳。誤あるへし。假名本に。いはめしてと訓らば。此の訓ハマイテにはあらざるか。物語文に。ツハクシ。フハツキなどあり。險阻の字義にも叶へるか如し。○横淳。倭名抄武藏國横見郡これなるへし○橘花。又同國橘樹郡太知波奈○多氷。通證に疑多麼郡とあり。さも有へし。據て按に。氷は末の誤ならむも知かたし。集解に。此を久良郡大井なりとて引れたるは。甚しき非なり○倉樸。通證に疑久良郡。東鑑作海月郡とあり。久良は和名抄に久良岐とあれば。こゝも樸は樹のあやまりにはあらしか○太歲甲寅。年代紀を考るに。梁武帝中大通六年に當れり。

二年春正月戊申朔壬子。詔曰。間者連年登穀。接境無虞。元元蒼生樂於稼穡。業業黔首免於飢饉。仁風暢乎宇宙。美聲塞乎乾坤。内外清通。國家殷富。朕甚欣焉。可大酺五日。爲天下之歡。夏四月丁丑朔。置勾舍人部。勾鞞部。五月丙午朔甲寅。置筑紫穗波屯倉。鎌屯倉。豐國。藤原屯倉。桑原屯倉。肝等屯倉。取音大拔屯倉。我鹿屯倉。我鹿。此云阿柯。火國春日部屯倉。播磨國越部屯倉。牛鹿屯倉。備後國後城屯倉。多禰屯倉。來履屯倉。葉稚屯倉。河音屯倉。阿波國膽殖屯倉。膽年部屯倉。阿波國春日部屯倉。紀國經湍屯倉。經湍。此云備世。河邊屯倉。丹波國蘇斯岐屯倉。音取近江國葦浦屯倉。尾張國間敷屯倉。入鹿屯倉。上毛野國綠野屯倉。駿河國稚贄屯倉。

壬子。五日なり。○間者。類史に間を向とあり。○飢饉。新撰字鏡儀伊比爾字々。○大酺。清寧紀にも見えたり。五日の間。上より酒を賜はりしこと見えたり。○勾舍人部。勾鞞部。天皇の御名代なり。○甲寅。

九日なり。○筑紫穗波屯倉。倭名抄筑前國穗波郡穗波布奈美。○鎌。同抄筑前國嘉麻郡加萬。○豐國藤原。大日本史に藤とあり。北野本に勝に作る。通證に藤當作湊と云り。さもあるへし。さて此地未詳。豐後國に國崎郡あり。國崎郡は海に三四里指出たる地にて。土人は御崎と云りと云り。さらは其處か。○桑原。未詳。大隅國の郡名。また集解に。按筑後國上妻郡有桑原。豐筑接境蓋此とあり。○肝等。未詳。原注取音讀三字。北野本肝等の下にあり。集解に三字私記攙入と云り。肝等は或人肝著か。大隅國部名キモツキとある。其處かと云れど。音讀とあるに叶はず。○大拔。未詳。○我鹿。未詳。○火國春日部。肥前後國に所見なし。詳ならず。○播磨國越部。倭名抄播磨國揖保郡越部古之倍。播磨風土記越部里。舊名皇子代里。所以號皇子代者。勾宮天皇之世。寵人但馬君小津蒙寵。賜姓爲皇子代君。而造三宅於此村。令仕奉之。故曰子代村。至上野大夫。結二十戶之時。改號越部。一云。自但馬國三宅。越來。故號越部村とあり。延喜式。播磨國驛馬越部云々。各五疋。俊成卿女越部禪尼。父の處分に據て。播磨國越部庄を領せり。其庄今十四村と成り。禪尼宅趾一保村に在りと通證に云り。○牛鹿屯倉。記に。孝靈天皇々子。日子窟間命。針間牛鹿臣之祖。姓氏錄右京皇別。字自可臣。孝靈天皇々子。彥狹島命之後也とあり。又舊事紀にも見たり。○備後國後城。小寺清之か老牛餘喘と云書に。此の備後國は。備中國を誤れるなり。備後は國造本紀に。吉備穴國。吉備品治國と云れは。此に備後と阿娜とを重ね云へきにあらす。後城屯倉は。備中國後月郡高屋村後月谷に在りと云り。或人按に。此郡は國の西極に在は。上代は備後に屬けんと云り。記傳にも。此地の事として云れけるは。後城後月共に後字を書る。



は。本はシリフキと唱けん。七、字を書るも。○多福。又云。後月郡種村にありと云り。集解に。備後國鞆田郡有部福蓋此とあり。信しかたし。或人。天武紀に見えたる。薩摩國多福島なるへしと云るは。いかになり。○來履。又云。同郡出部村九履に在りと云り。集解に。按安藝國賀茂郡有香津。藝備接境蓋此。とあるは非なり。○葉稚。又云。同國小田郡大江村に在り。今波良加と云と云り○河音。又云。後月郡江原村にあり。今加夫登と云と云り○婀娜國膽殖。又云。備後國安那郡なり。和名抄に夜須奈と訓るは。音を訓に替て。後に唱たるなり。此郡は右の後月郡小田郡に接せる地なるか故に。膽殖屯倉は。小田郡大江村に伊夜と云有る。是なるへしと云り。この婀娜國を。薩摩國阿多郡なりとして。吾田國なりと云は。古き誤なりとも非なるよし。右の小寺氏か。此の文を引て辨へ云れたるか如し。此あやまりは。既く記傳にも云れたることあり。既に神代紀に引り。見合すべし。○膽年部。又云。玉垣宮段に。次伊登志和氣王者。因無子而。爲三子代。定伊登部とある。是なるか。武藏云。記傳云。伊登志部を定とありて。國々にもより伊登志部ありり。此は小田郡出部村の事なれども。各境を接する地なり。此小田郡に今も三宅の姓多しと云り。なほ同書に此次に云れけるは。古の婀娜國を。吾田郡と一に爲まじきなり。靈異記。備後國の事を云るに。鞆田郡屋穴國郷。穴君弟公也と有れば。古に穴國と云しは。今の安那郡より。鞆田郡までに係れるにこそと云り○阿波國春日部。詳ならず○紀伊國經湍。これも詳ならず○注經湍此云俯世。本に湍字を脱し。世を突に誤れり。今北野本に據て補ひ且つ訂せり。集解に。靈井本に據て突を先に作れり。されと先字は假字に用ひし例なし。○河邊。未詳ならず○丹波國蘇斯岐。これも詳ならず。集解に疑丹波郡周積と云り。信かたし。さて注に屯倉下に。皆取音の二字は攙入なり。北野本には旁書とせり。削るへし○近江國葦浦。栗田郡志。栗太郡葦

浦郷。葦浦村。葦浦は上古より葦浦の名あり。他の郷に隸すへき故なし云々。今地勢を以按に。野洲郡の三宅村。此時の屯倉の跡なるへしと云。又永祿の比。あしきみの郷と呼しにや。觀音寺所藏文書曰。あしきみの郷欠所方。并給人はつれの事云々。信長花押とあり。集解に。按通證曰。在神崎郡。然按國經。無所見と云り。これはたしかならず。○尾張國間敷。集解に。按尾張國內神名帳曰。海部郡從三位馬島天神。在松葉莊間島村。蓋敷島相誤とあり。これもよく考へし○入鹿。又云。松平秀雲曰。入鹿。丹羽郡蟲鹿莊。寛永中從入鹿村。以築大塘。貯水。概中。連百數里。殆如大湖。水滿則涵天沃日。其間有二十三扉。製造甚奇。俗稱入鹿池。古入鹿邑即此とあり○上毛野國綠野。倭名抄上野國綠野郡美止乃。同國多胡碑云。辨官符。上野國片岡郡。綠野郡。甘良郡。并三郡内三百戸。郡成給羊。成多胡郡。和銅四年三月九日甲寅宣云々とあり○駿河國稚贄。詳ならず。さて集解云。按筑紫至駿河國二十三國。列國無次。有錯亂と云り。

秋八月乙亥朔。詔置國國犬養部。九月甲辰朔丙午。詔櫻井田部連。縣犬養連。難波吉士等。主掌屯倉之稅。丙辰。別勅大連曰。宜放牛於難波大隅島。與媛島松原。冀垂名於後。集解に。蓋爲屯倉。畜犬以防偷盜。とあるは信かたし。此御時より。某犬養と云るは定まれるなるへし○丙午。三日なり○櫻井田部連。既に出○縣犬養連。姓氏錄左京神別。縣犬養宿

禰。神魂命八世孫。阿居太都命之後也とあり。天武紀十三年十二月。縣犬養連賜姓曰宿禰。これより宿禰を賜はれり。續紀に大宿禰姓も見えたり。聖武帝御世。皇后の生母。内命婦縣犬養宿禰三千代言。縣犬養連五百依。安麻呂。小山守。大麻呂等。俱是一祖。子孫骨肉孔親。請得沐之恩。同賜宿禰之許之。廢帝御世。内舍人縣犬養宿禰内麻呂等十五人。賜姓大宿禰。稱德帝御世。神護景雲二年。内麻呂。及姉女等。讒を以て罪を得て。姓を貶して犬部と爲さる。光仁帝御世實德二年に。罪を雪きて皆本姓に復しき。一條帝御世。右衛門大志縣犬養爲政と云人。西宮記權記等に見えたり。此は姓を省きしものならん。又單に犬養と云るもあり。姓氏錄に攝津國神別。犬養。神魂命十九世田根連之後也とあり。同族と見えたり。孝德帝御世に犬養五十君あり。後連姓を賜はれり。日本書紀に。諸梁京人大養宿禰真老あり。此氏にも宿禰なるかありしにこそ。河内縣郡人犬養廣麻呂。文武紀に見えたり。一條帝御世。大膳屬大飼忠時。權記に見えたり。難波吉士。雄略紀に出つ。○屯倉之稅。稅タチカラとも。大チカラともよめり。御藏入の米の事なり。さて縣犬養は。天皇の御縣の稅租を主掌るを以て。縣とは云るものと見えたり。されは此氏は。屯倉の田部を主るに依れるなるへし。○丙辰は十三日なり。○勅大連曰。本に日を云に作れり。今考本に從る。集解にも例に據て改めたり。○難波大隅島。攝津志に。西成郡大隅宮在。西大道村とあり。大隅宮は應神紀に出。媛島松原。記傳云。媛島は攝津國西成郡にあり。難波の古き國を見るに。媛島は。九條島の南に並ひたる島にて。今世に勸助島と云處のあり。神島村は。下中島と云處の内にて。大坂の西北方なり。彼古國の地とは合はず。なほよく尋ねて定むへし。とあり。或人云。西成郡は郡階村あり。媛島は其西北に當れり。記大雀命段に。天皇爲將。豐樂。幸行日女島之時。鴈生卵。續紀靈龜二

年。令攝津國。罷大隅媛島二牧。聽百姓佃食之。なごあり。萬葉二。媛島松原見。媛子屍。悲歎作歌に。妹之名者。千代爾將流。媛島之。子松之末爾。羅生萬代爾。なほ垂仁紀に見えたり。○冀垂名於後。この島に牛を放ちて牧はしめ玉ふも。御名代の御心なり。然るに集解に。此に尙書なる放牛於桃林之野の文を引れたるは。いとまさらはし。其とは意の異なるものをや。萬葉集なる歌は。此御世の故事を下して中臣本北野本に後の下世字あり。

冬十二月癸酉朔己丑。天皇崩于勾金橋宮。時年七十。是月葬天皇于河内舊市高屋丘陵。以皇后春日山田皇女。及天皇妹神前皇女。合葬于是陵。

己丑。十七日なり。記には乙卯年三月十二日崩とあり。月日合はず。○時年七十。記には御年を記さず。○舊市高屋丘陵。記には河内之古市高屋村とあり。倭名抄河内國古市郡。不詳とあり。古市郷もあり。今も高屋村は記傳に。神名帳に古市郡高屋神社あり。此地なり。今も古市に近く。隣て高屋村あり。萬葉九に衣手も。同名地あれば。何れならん。辨へかたし。諸陵式に。古市高屋丘陵。勾金橋宮御宇安閑天皇。在河内國古市郡。兆域東西一町。南北一町五段。陵戸一烟。守戸二烟とあり。大和志に。古市高屋丘陵。古市郡高屋墓。俱在古市郡高屋村。萬春日山田皇女。今稱。八幡山。隣。安閑帝陵。と云りとあり。扶桑略記に。此御陵を高三丈方二町とあり。○神前皇女。この皇女を

合葬したる由詳ならず。集解に蓋爲二帝妃一歎と云り○合葬。右の大和志に。墓今稱三入幡山。隣三安閑帝陵とあるを以見れば。合葬とあるは同地に葬れる由にや。此墓も諸陵式に見わたり。さて前皇廟陵記に。此御陵を。或曰今高屋村。城山是也。明應中畠山尙慶築レ城。或曰近年土民發レ陵。得レ古代器等と云り。この築城の事。足利季世記云。河内の國守護は畠山植長也。父尙慶十八才にて。入道してト山と云。高屋の城を取立て子息にゆつり。紀州廣と云處へ隱居しける。此高屋の城。昔安閑天皇の御廟なり。要害善ければとて。城に築立てられけれども。本城には恐れて。畠山殿にも二の丸に住けりに見わたり。

武小廣國押盾天皇 宣化天皇

漢書蓋寬饒傳曰。奉レ法宣レ化。憂レ勞天下。

宣化天皇 紀

武小廣國押盾天皇。男大迹天皇第二子也。勾大兄廣國押武金日天皇之同母弟也。二年十二月。勾大兄廣國押武金日天皇崩無嗣。群臣奏上。劔鏡於武小廣國押盾尊。使即天皇之位焉。是天皇爲人器宇清通。神

襟朗邁。不以才地矜人爲王。君子所服。

武小廣國。御名義既に云り○二年。考本に此下冬字あり○使即天皇之位。大日本史云。時年六十九。據水鏡愚管抄及本書崩年七十二之文とあり。神皇正統記には。明年の即位とあり○不以才地矜人爲王。王をオホキミノオモヘリと訓へし。本はモを脱せるなり。王思なり。王ぶりしたまはぬなり。源氏にむはさみす。通證に此王を。舊事紀古本作諸王當從とあるは非なり。かくては字句も衍れり。又按此王は士字の誤にはあらざるか。さらば不以才地矜人。句爲士君子所服と讀へきにや。かゝる文例もあることなり。欽明紀爲天皇所必獲。續紀十四に爲堀里之所歎とある文章となるなり。なほ考へし。

元年丙辰

元年春正月。遷都于檜隈廬入野。因爲宮號也。二月壬申朔。以大伴金村大連爲大連。物部鹿鹿火大連爲大連。並如故。又以蘇我稻目宿禰爲大臣。阿倍火麻呂臣爲大夫。

遷都于檜隈廬入野。記云。坐檜桐之廬入野宮とあり。檜隈は。和名抄に大和高市郡檜前郷。比乃諸陵式にも。檜隈諸陵並在高市郡と見ゆ。今も檜隈村あり。雄略紀に檜隈民使。また檜隈野。欽明紀に檜隈邑。天武紀に檜隈寺などあり。さて記傳云。此天皇欽明紀細注に。檜隈高田天皇とあれば。是皇子の時の御名と聞ゆれば。本より檜隈に住居坐りしなり。高田は。葛下郡の今の高田か。其は何處にもあり。と云れたり。廬入野は阿波國風土

記に。檜前伊富利野宮とあり。入は里の假名なること知られたり。里を省きても云しこと。慶雲四年威奈大村と云人の墓誌に。檜前五百野宮とあり。さて此天皇を通過に。三代實錄曰。吉野宮御宇宣化天皇。と注されたるは誤なり。其は記傳云。三代實錄十二に。私檢古記。檜隈盧入野宮云々。此を印本には。古字を吉に誤り。記より下五字を脱して。吉野宮とあり。今は古本を以て引り。世に吉野の藏王權現と云神を。安閑天皇なりと云説のあるは。此三代實錄本の誤に依り。又宣化を安閑と誤れるには非るか。と云れたるにて知へし。さて大和志に。高市郡盧入野宮。古蹟在檜隈村とあり。舊都趾要覽云。檜隈盧入野宮之御趾。高市郡白樫村大字五條野これ御所野の轉訛なるへし。の南方字宮山原古の檜隈の地に控す。これ皇居の御趾なるへしと云へり。○物部鹿火大連爲大連。爲大連三字。北野本に無し。されどそれは脱たるなり。さて此下に。大日本史に。物部尾與亦爲大連如故。説見安閑紀とあり。こゝにあるへきなり。○蘇我稻目宿禰。蘇我は上に出。稻目宿禰は。姓氏錄田中朝臣條に。武内宿禰五世孫稻目宿禰之後也。又岸田朝臣條と見え。又櫻井朝臣條に。蘇我石川宿禰四世孫。稻目大臣之後也と見え。又新口朝臣條公卿補任に。蘇我稻目宿禰。滿知宿禰之曾孫。韓子之孫。高麗之子也と見えたり。滿知宿禰。履中紀に見ゆ。石川宿禰の子なり。韓子宿禰。韓子宿禰の子なり。さて欽明紀三十一年に薨とみゆ。稻目名義未詳ならず。通過に。萬葉集なる稻目明去。來理と云歌を引れたれとも非なり。○阿倍火麻呂。本旁書北野本假名本等に。火を大に作る。集解には大に改めて。さて傍注及公卿補任。改呂と云人もあれば。本の○大夫。此官は甚疑はし。大連大臣の外に此官あること。此より外に前後更に所見

なし。この時かゝる職名を置れたるなるへけれど。いかなる事を掌りしものにかと。つらく考ふるに。後に天智天皇十年に。左右大臣の外に。以蘇我果安臣。巨勢人臣。紀大人臣。爲御史大夫。御史。之大納言乎。と云事見えたり。この御史大夫を。所に據ては大納言ともあり。されは大納言の始なり。此に據て按るに。此の大夫も。後の御史大夫の事かとおもはる。但し此の訓に。マツリコトマチキミと附てあるを見れば。上古の前つ公のやうにも在れど。上古の前つ公。即執政の大臣なり。此時の大臣大連か。即上古の前公なれば。別にマヘツキミの稱あるへくもあらず。されはこの大夫は。御史大夫の事とおもはれたり。恐くは御史二字などの脱たるものならむも知へからず。兎に角に疑はし。さて御史大夫即大納言にて。大臣の次に必有る官なれば。これも古きことと見ゆれば。姑く是を御史大夫の事と見てありぬへきか。さて大納言は大寶令に。大納言四人。掌參議庶事。敷奏宣旨。侍從獻替とある。これ其職掌にて。其義解に。納言王者喉舌之官也。言納下言於上。宣上言於下也とも。與右大臣。共參議天下之庶事。若右大臣以上无者。即大納言得專行云々ともありて。大臣に繼ては。いと重き官なり。されは此時の大夫。即御史大夫にて。所謂後の大納言に當れりとおほゆ。職原抄の唐名に。御史とあるは。彈正のことなり。其は又後の事にて。古に在ては大納言なり。なほよく考ふへし。通過にも。この大夫を。猶天智紀所謂御史大夫之任也。とまで云れたり。

三月壬寅朔。有司請立皇后。己酉詔曰。立前正妃億計。天皇女橘仲皇

女。爲皇后。是生一男二女。長曰石姬皇女。次曰小石姬皇女。次曰倉稚綾姫皇女。次曰上殖葉皇子。亦名椀子。是丹比公。偉那公。凡二姓之先也。前庶妃大河内稚子媛。生一男。是曰火焰皇子。是椎田君之先也。

己酉は八日なり。○立前正妃云々。前正妃これまてかゝる例なし。信友云。正妃の上に前字あるは。此時既に薨し給ひて。世には坐まさぬを。今新に皇后に立つへき妃もあらされは。皇后の號を前妃に贈り玉へるものか。壬寅朔有司請立皇后とあるに。速にも勅語なくて。己酉八日に至てこの詔の出たるは。帝も思ひわつらひ玉ひて。漸く八日に至て。かくは思ひ定め玉へるものなるへし。次文に前庶妃とあるも。即位よりはさきに亡せ玉ひたるなるへしと云れたり。いかゞあらん。なほよく考へし。○橘仲皇女。仁賢紀には仲字なし。記に橘之中比賣命とあり。此事既に云り。○石姫皇女。記傳云。此御名御姉妹共に。同く負賜へるは。石に由縁ありしにや。此皇女欽明天皇の太后に坐り。諸段式に磯長原葛石姫皇女。在河内國石川郡。敏達天皇陵内。守戸三烟。とあり。さて記に。此皇女の御名の注に。訓石如石とあるは。伊志と訓へき由なり。此は心得ぬ注。常には伊志と訓さむ。記中には伊波と云にのみ用ゐて。伊志と訓處はをさく无きうへに。仁德天皇の太后石之比賣命の御名の。伊波なるにも紛ふか故に。此注あるなりと云り。なほ記傳に委し。○小石姫皇女。記傳云。姊王之御名の石を承て。小石と申すなり。

廣國と。小國と。此皇女も欽明天皇の妃に坐りとあり。集解に。按欽明天皇二年。紀。前日影皇女。者。蓋此一名欽。帝王御名の例の如し。○倉稚綾姫皇女。記に倉之若江王とあり。男王なり。舊事紀には倉字なし。記傳云。倉は今大和國添上郡に。倉庄。村と云あり。其なるへし。和名抄に大和國廣瀬郡上倉郷。下倉郷。蘇我倉山田石川麻呂などの倉も。同地なるへし。若江は河内國若江郡か。地名の二重なるは。いかゞなる如くなれども。初に若江に居坐て。若江王と申せるか。後に倉と云處に坐るか如き故に。初よりの御名とつらねて。さて此王。記にては男王なるを。次注に男とあるを以て知へし。彼三字。眞福寺本には二とあり。若男二と書申せるなり。さて此王。記にては男王なるを。次注に男とあるを以て知へし。彼三字。眞福寺本には二とあり。若男二と書紀には皇女とあり。此事論あり。師木島宮段に云へしと云り。此説欽明紀の。下に出すへし。稚綾は。若江と通ひて地名なるへし。さて此皇女も。欽明の妃と坐り。此事もそこ。○上殖葉皇子。記には上字なく。御母も異にて。又娶川内之若子此賣。生御子火穗王。次惠波王とあり。記傳云。御名義未考得す。書紀に上殖葉皇子。姓氏録にも賀美惠波王とあり。若くは地名にて。上は下惠波に對へる名にや。○亦名椀子。集解に原係大書。據例改とあり。椀子は麻呂子と云に同じかるへし。此皇子は。あるか中の御兄に坐なるへし。椀子皇子墓。攝津豐能郡池田町字五三堂に於て。一の古墳を發掘したる。該古墳の蓋石を取除きしに。中は深さ四尺。長さ四間。幅三尺許にして。周圍は厚さ二寸内外の割石を以疊み。底には熟土に朱を混じたるものを。一面に敷布しあり。其下より青玉(色カ)の玉壺一個。青色の管玉三個。素燒の壺一個。青銅の鏡一面。及刀劍の折れ數個を發掘したりと云。據此墳墓は。種々取調の上。宣化天皇の皇子椀子皇子の御墓ならんとの事にて。大坂府より宮内省へ具申する筈なりと。明治三十年十二月十一日讀賣新聞に云り。よく闡正すへし。○丹比公。記にも惠波王者。韋那君。多治比君之祖也とあり。記傳云。三代實錄十二に。丹墀真人貞峰等。上表曰云々。宣和天皇々子。加美惠波皇子。生三十市王。十市王生多治比古王。此王生産之夕。忽多治比花飛。浮湯沐釜。以斯冥感。名多治比古王。成長之後。固執謙退。奏請求姓。因賜姓多治比公。便以名

爲レ姓。存ニ其舊意ニ云々ごあり。此文のうち和字は。化を後に誤れるなるへし。さて此多治比花の故事を。書紀に反。正天皇の御事に記されたるは。傳への紛れの誤なること。傳三十五に云るか如し。氏人は。

天武卷に丹比公麻呂見え。同卷十三年冬十月。丹比公賜レ姓曰眞人。伊呂波字類抄に。持統朝。賜眞人とあるは誤。また同卷持統卷に。丹比眞人鳥見えたり。持統四年に。此人右大臣とせらる。續紀二に。大寶元年七月。左大臣正二位多治比眞人嶋雲云々。大臣宣化天皇之玄孫。多治比古王之子也とあり。姓氏錄に。多治眞人。宣化天皇々子。賀美惠波王之後也。續後紀に。天長十年。改多治比眞人氏。賜姓丹堀眞人。一姓も地名も。字を略て丹比とも。多治とも書ならへれば。此丹堀もたゞ字を改められたるのみにて。三代實錄。丹堀眞人貞峯上表に。云語は舊のまゝに多治比か。然れども改て賜姓とあるは。語をもたんと改玉へるにや。

此間の文。以上に引り。以レ名爲レ姓。存ニ其舊意ニ云々。左大臣志摩眞人。是貞峯之高祖父也。天平六年。遣唐使多治比眞人廣成入唐之日。改作丹堀。復命之後。猶用舊姓。傳來百年。無レ心變改。天長九年。多治比眞人貞成等。奏請改多治比三字。爲丹堀兩字云々。豈偏賞入唐之新文。說所生舊字乎。伏願以古多治字。換今丹堀姓。但縁煩文。請省比字。雖除一字。稱謂不變。然則存先祖之感生。貽孫謀於不朽。拜表以聞。詔許之。ごあり。大日本史に。按改多治比爲多治。助於此時。而姓氏錄。已書多治。豈後來所改書乎。さて此氏人にては。崇徳帝御世。河内權大掾多治比眞人久永あり。長秋記に見えたり。上に云る廣成八世孫武信。陽成帝御世。武藏に謫せらる。孫峯時竟に其地を家とす。支葉繁衍して。號して爲丹黨。即武藏七黨の一なり。武藏七黨系圖。源平盛衰記に見えたりと。氏族志に云り。なほ其族の氏名を擧げたり。○偉那公。記傳云。和名抄に攝洞國河邊郡爲奈郷。續後紀十四にも。河邊郡爲奈野。三代實錄二にも如此あり。此野歌多し。神名帳爲那郡比古神社は。豐島郡に入れり。氏人は。孝徳卷に猪名公高見。天武卷に韋那公磐嶽など見ゆ。同卷十三年冬十月。猪名公賜姓曰眞人。凡て眞人戸は。天武天皇の御世に定められたる。八色姓の

中の第一にして。其時初めて。此戸を賜へる十三氏。皆繼體天皇より以來の。近き御世々の皇胤なり。姓氏錄に載れるも皆然り。其中に若沼毛二俣王の後のあるも。繼體天皇の御族なるへし。姓氏錄には。爲奈眞人。宣化天皇々子火焰王之後也。また攝津國皇別。爲奈眞人。宣化皇子火焰王之後也と見ゆ。三代實錄三十八にも。火焰親王。是川原公爲奈眞人等之祖とあるなどは。記紀の傳と。御兄弟の間差へりと云り。右に出たる外にも。此氏人にては。文武帝御世に威奈眞人大村あり。紫冠鏡の子。少納言越後城司等の官となれること。大村墓誌に見えたり○大河内稚子媛。記には娶川内之若子比賣。生御子火穗王。次惠波王。記傳云。川内は書紀には大河内とあれば姓氏か。されど戸もなく。父兄などの名も見えされは。國名なるへし。河内國。古は大和。河内とも云り。玉穗宮殿に。阿倍之波延比賣などもある類なり。若子の名義。ことなることなしと云り○火焰皇子。記に火穗王とあり。記傳云。本能富と云は。即火之穗の意にて。即俗に火焰と云是なり。如何なる由にて。此御名は負玉ひけむ。詳ならず。さて三代實錄二十二に第二皇子とあり。攝津河邊郡火關降神祠。在東桑津村。或曰火焰王祠。また同郡火焰皇子墓。在東桑津村。と云り○椎田君。記に志比陀君に作れり。記傳云。志比陀君。地名なり。攝津國河邊郡に在へし。其由は次に云む。今彼郡に椎田村と云あり。此氏此より他に見あたらす。姓氏錄にも載らす。姓氏錄に。攝津國皇別。川原公。爲奈眞人同祖。火焰親王之後也。天智天皇御世。依居賜川原公姓と見ゆ。河邊郡に。今も河原村あり。三代實錄七に。攝津國河邊郡人。九世川原公清永。十一世爲奈眞人管雄等五人之戸。並國課役。清永等宣化天皇々子。火焰之後云々。又三十八に免。攝津國河邊郡人。九世河原公福良。川原公福繼。有馬郡人。川原公千孫。河邊郡人。十世川原公夏吉。川原公有利等五月課役。宣化天皇第二皇子火焰親王。是川原公。爲奈眞人等之祖云々とあり。さて記傳には。椎田君他に見あたらすとあれど。後紀に。火燭皇子傳那祖とあるは。右にも云る如く。異なる傳なれども。上項葉皇子を。椎田君祖と爲たるは。誤なる傳なり。

夏五月辛丑朔。詔曰。食者天。

本也。黃金萬貫。

不可療飢。白玉千

箱。何能救。冷。夫筑紫國者。遐邇之所朝屆。去來之所關門。是以海表之

國。候海水以來。賓望天雲而奉貢。自胎中之帝。泊于朕身。收藏穀

稼。蓄積儲糧。造設凶年。厚饗良客。安國之方。更無過此。故朕遣阿

蘇仍君。加運河內國茨田郡屯倉之穀。蘇我大臣稻目宿禰。宜遣

尾張連。運尾張國屯倉之穀。物部大連鹿鹿火。宜遣新家連。運新家屯

倉之穀。阿倍臣。宜遣伊賀臣。運伊賀國屯倉之穀。脩造官家。那津之口。

又其筑紫肥豐二國屯倉。散在縣隔。運輸遙阻。儻如須要。難以備

卒。亦宜課諸郡分移。聚建那津之口。以備非常。永為民命。早下郡

縣。令知朕心。秋七月。物部鹿鹿火大連薨。是年也太歲丙辰。

詔曰。類聚國史に。國に於てに收入れたり○黃金萬貫。史正義に。漢制一金直千貫などあれども。こゝはさる義まで預るへきにあらす○白玉千箱。通證に。雅清歌。戀わひて落る泪の玉ならば。千箱の數

に過やしなまじ。延喜内藏寮式。白玉一千九。志摩國所奉進。大神宮式。白玉一兩三分。盛白宮二合。長曆官符。白玉捌拾壹丸。重一兩三分。今按眞珠也。とあり○冷をコイと訓めるを。假名本にはコ、ヒと訓り。ヒはイの誤。今こどゆる義なりと谷川氏云り。コイと云も古き訓なるへし○筑紫國。通證に。此專指太宰府。又見天武紀上と云り。されどこれを。太宰府の始と爲へき明文なし。なほ府は此より後。崇峻推古兩朝の頃にあるへしと云る。蒲生君平の説あり。推古十七年の下に云へし○關門。倭名抄居處部に。關。日本紀私記曰。關門也。世岐度。在レ境所。以察レ出禦。入也とあり○候海水云々。候訓サモラヒテは眞守なり。萬葉七に。大御舟。竟而佐守布。高島之。三尾勝野之。奈伎左思所思。又大海。候水門。事有。從何方君。吾率。陵とあり。式祈年祭祝詞に。青海原者。棹杪不。干。舟。船能至。留。極。大海爾舟滿都々。氣氏云々○望天雲云々。又云。青雲能。靄。極。白雲能。墜坐向伏限。萬葉八。青浪爾。望者多要奴云々○設凶年は。義倉の設なり。賦役令三代格等に。義倉の事詳なり○阿蘇仍君は。詳ならず。記に神八井耳命。阿蘇君等之祖とあれば。阿蘇君のことなるか。さらば仍は衍か。傍に乃と訓を施したるか。まさか。れて本文とはなれるにもあるへし。また類史及び本書の旁注に。阿須仍とあれど。阿須は誤なるへし。また舊旁訓に。サアメノと私記の訓を付したるも心得かたし。集解に。按仍訓。茂。未詳。蓋阿蘇君名。また或阿蘇仍君。諸王名。など注せしも強言なり。假名本には。あそどのきみと。訓れど。これも誤あるへし。さて注に未詳とあるは。後人の攙入なるへし○尾張國屯倉は未詳。和名抄同國中島郡。海部郡等に。三宅郷あり。同國風土記に。愛

智郡三宅寺。又三宅連麻佐など云人みゆと。ある人いへり。さて蘇我大臣に。由縁ある地なるへき事。次の新家屯倉。伊賀國屯倉にて知らるれども。ものに見えたることなし。なほよく考へし○新家連。新家訂正本に。惠一作。新の訓は。和名抄讚岐國阿野郡鄉名爾比乃美とあり。此氏は天孫本紀に。饒速日命十一世孫。物部鬼二字。百樹云。汗麻竺志連公。新家連等祖とあり。姓氏錄河内未定に。新家首。汗麻惠足尼命之後者不見。新麻尼足尼命之誤とあり。今按に鬼は覺なるへし。氏は。延暦儀式帳に。孝德帝御世に。度會郡督領新家連阿久多。大神宮雜事記に。聖武帝御世に。度會郡少領新家連人丸。また三條帝御世に。新家望尋。亦本郡大領たること見えたり。其族に又宿禰姓あり。後三條帝御世に。檢非違使新家宿禰成弘と云ふ人。光明寺所藏古券に見えたり。神郡のこを掌るるなりけり。また六條帝御世に。大神宮權主典。新家宿禰兼季。兵範記にみゆ。また順德帝御世に。新家宿禰真景も。檢非違使たりし事。これも光明寺古券にみゆ。又公姓あり。三代實錄に。清和帝御世に。伊賀節婦新家公福刀自あり。これも此族なるへし○新家屯家之穀。按に右の新家連の出所は。倭名抄河内國志紀郡新家方廢村存。今屬丹比郡とありて。河内より出たる氏なり。さて此の新家屯家は。集解に。按前後皆被國名。而此單稱。新家一者。恐脫。河内國三字とあれど。重胤説に。前後に尾張國と。伊賀國との間に被載たれば。伊勢國なる新家なりけり。上代本記。豐受大神御遷幸の處に。次山邊行宮御一宿とある下に。今號壹志郡新家村是也と見ゆ。式に同郡物部神社ある。即新家村に坐と云り。皇太神宮儀式帳に。度會乃山田原立屯倉互。新家連阿久多督領。磯連牟良助督仕奉とあるは。孝德天皇御世に。其新家屯倉を。度

會郡に移されたるよしなり。是亦新家は物部氏に由有る證にして。伊勢なるそ本なりける。と云れたるに依て。此の新家屯倉は。伊勢國なる屯倉とすへし○阿倍臣は。大夫阿倍火麻呂なり○伊賀臣。阿倍臣同祖。孝元紀にみゆ。伊賀國屯倉は。此氏にて掌り居りしなり○脩造官家。本に官を宮に作る。今北野本中臣本考本に據る。屯倉と同訓にて義も同じ。これを集解に。按鎮西官家。即後太宰府と云へり。この事下に云へし○那津之口。倭名抄筑前國那珂郡とある此地なり。齊明紀七年に。至三于那大津。居三于磐瀨行宮。天皇改此名曰長津。また伊吉連博德書に。同天皇之世云々。以己未年八月十一日。發自筑紫大津之浦なども見たり。青柳氏云。那津は那珂郡博多の古名なり。宣化天皇紀。齊明天皇紀などに。那津と見わたる比まては。今の三宅村より。仲村あたりをいふと聞たり。三宅村は。今の博多より三里はかり南にあり。三宅より仲村まで又一里もあるへし。博多よりのほれば。三宅は那珂河の三里はかりあり。右にあり。仲村はひたりの方にある。此邊の入海。漸あせて。舶泊の遠くなるにつけて。那津の人家をも。又北方にうつして。終には今の博多の津にいたれりといへり。博多は。怡土郡より七里許東にあれど。舊地は山より三里許南にありとすれば。こゝに東南と云るにあへりと云り。神功紀にも此地既に出て。そこにも云り○縣隔。北野本中臣本考本に。縣を懸に作る。縣は懸の本字なり○儻如須要。儻如をモシと訓む事。安閑紀。要須因。物爲。名。故違紀。要須彌蒙黎氏云々。欽明紀。要須道。孝德紀。要須臣。持統紀。要須。須等とあれど。須要とあるはこゝのみ。訓は假名本に。もちろむとせはと訓るに従ふ○大連。繼體紀元年に爲三連一如故とあれば。



それより前に既に既く大連になれりしにこそ。公卿補任に。在官三十年と記せしは。元年を初任として數へたるなり。○太歳丙辰。年代紀を考るに。梁武帝大同二年にあたり。

二年丁巳

二年冬十月壬辰朔。天皇以新羅寇於任那。詔大伴金村大連。遣其子磐與狹手彦。以助任那。是時磐留筑紫。執其國政。以備三韓。狹手彦往鎮任那。加救百濟。

磐與狹手彦。磐の事佗に見えず。狹手彦は。姓氏錄左京神別。大伴連。道臣命十世孫。佐豆彦之後也。あり。三代實錄貞觀三年。左京人散位外從五位下。伴大田宿禰常雄。賜伴宿禰姓。常雄款偶。謹稽家牒。伴大田宿禰同祖。金村大連公第三男。狹手彦之後也。なり。此人の事は。欽明天皇二十三年の紀に見えたり。○助任那。毛野臣か和解を誤りて歸りしより。新羅百濟の兵勢益強く。かの百濟本記に見えたる如く。繼體帝二十五年には。百濟の師進みて安羅に至。乞毛城を營みなど。いたく任那に逼りしか。今般は其を救助けしめ玉へるなり。かつ彼の勢。不意に皇國に押渡らむも圖難きにつきては。磐をは筑紫にとめて。三韓に備へしめたりしなり。此を以て思ふに。那津に官家を脩造し玉ひしも。其等かためにて。後の太宰府の基本とも云へし。○狹手彦往鎮任那。肥前風土記。松浦郡鏡渡。北。昔者

檜隈廬入野宮御宇。武小廣國押楯天皇之世。遣大伴狹手彦連。鎮任那之國。兼救百濟之國。奉命到來。至於此村。即鳩篠原村。弟日姫子成婚。容貌美麗。特絶人間。分別之日。取鏡與婦。婦含悲啼渡粟川。所與之鏡。緒絕沈川。因名鏡渡。稻振峯。の條に。此時の事を載せり。其文に大伴狹手彦連。發船渡任那之時。弟日姫子。登此用。稻振招。因名。稻振。然弟日姫子。與狹手彦連。相分。經五日之後。有入人每夜來。與婦共寢。至曉早歸。容止形貌。似狹手彦。婦抱其怪。不得忍。竊用積麻。繫其人。隨麻尋往。到此峯頭之沼邊。有。蛇。身人而沈沼底。頭蛇而臥。忽化人。即謂云。志努波羅能。意登比賣能古袁。佐比登由母。爲禰互牟志太夜。伊幣備久太佐牟。于時弟日姫子之從女。走告親族。親族發衆。昇而看之。蛇與弟日姫子。並亡不存。於。其見其沼底。但有二人屍。各謂弟日女子之骨。即就此峯南。造墓治置。其墓見在。あり。仙覺か萬葉抄に。引證せる風土記には。松浦縣。縣東三十里。有。被。捕。一。被。捕。此云。比禮府。最頂有沼。計可。半町。俗傳云。昔者。情前天皇之世。遣大伴狹手彦。鎮任那國。于時奉命。經過此處。於是。篠原村。實。實。也。有。娘。子。名曰。乙等。比賣。容貌端正。孤爲。國色。妙手比古。便。成。婦。離別之日。乙等。比賣。登。此。峯。舉。被。招。因。以。爲。名。と。あり。また。萬葉五に。天平二年。筑前國司山上憶良か。詠。領巾。應。嶺。歌。一首。を。載。せて。其。文。に。大。伴。佐。提。比。古。郎。子。特。被。朝。命。奉。使。瀕。國。賊。言。歸。稍。赴。蒼。波。妾。也。松。浦。嗟。此。別。易。歎。彼。會。難。即。登。高。山。之。嶺。遙。望。離。去。之。船。悵。然。斷。肝。黯。然。銷。魂。遂。脫。領。巾。應。之。傍。者。莫。不。流。涕。因。號。此。山。曰。領。巾。應。之。嶺。乃。作。歌。曰。得。保。都。必。等。麻。通。良。佐。用。比。米。都。麻。胡。姬。爾。比。例。布。利。之。用。利。於。返。流。夜。麻。能。奈。此。外。にも。後。人。追。加。の。み。な。此。時。の。事。に。て。い。と。名。高。き。物。語。な。り。但。し。風。土。記。と。萬。葉。と。は。女。の。名。異。な。り。二。様。に。

○日本書紀通釋卷之四十八

語傳へしものと見たり。これらを見れば。狭手彦も暫く筑紫に留りて。韓國のやうを窺ひつゝ。警と議りて。二つにわかれて。かくは任那國に赴きしにこそ。

四年己未

四年春二月乙酉朔甲午。天皇崩于檜隈。廬入野宮。時年七十三。冬十一月庚戌朔丙寅。葬天皇于大倭國身狹桃花鳥坂上陵。以皇后橘皇女及其孺子合葬于是陵。

皇后崩年。傳記無載。孺子者。蓋未成人而薨歟。

二月。大日本史云。本云。欽明紀爲十月事。未知孰是。とあり。○甲午。十日なり。○時年七十三。記には御年を記さず。記傳云。此天皇御年を記さざるは。いかなる由にか。又此段には。此に例の細注もなきは。後に文の脱たることあるにやと云へり。○丙寅。十七日なり。○身狹桃花鳥坂上陵。記には御陵をも記さず。諸陵式に。身狹桃花鳥坂上陵。檜隈廬入野宮御宇宣化天皇。在大和國高市郡。兆域東西二町。南北二町。守戸五畑とあり。身狹は欽明卷に。遣蘇我大臣稻目宿禰等於倭國高市郡。置韓人大身狹屯倉。天武卷に牟狹社。神名帳に高市郡牟佐坐神社など見ゆ。今世に三瀬と云處なり。三瀬は即牟佐を説ける名なり。り云へり。右は此御陵のあた。桃花鳥坂は。神武卷に築坂邑とある處なり。垂仁卷に。葬倭彦命于身狹桃花鳥坂とあり。大和志に。身狹桃花鳥坂上陵。在高市郡鳥屋村西南。東有小陵。俗呼俱知山。以皇后

橘皇女及其孺子合葬于此。周廻有池。廣三百三十畝。域外有小家五と云へり。前皇廣陵記に云々。或云鳥屋村と云り。或人云。鳥屋村にあり。御陵の廻りは池にて。中に御陵はありて。西方に御陵へ上る道一筋ありと云り。今思ふに。綏靖天皇の御陵の。桃花鳥坂と云は。其地の狀を以て分てる名にて。此桃花鳥坂と同地なるへきか。桃花田丘陵。桃花鳥坂陵。又彼倭彦命の御墓など。彼此とあれば。よくせずは紛ひぬへし。已にまた此あたりを行て見されは。と記傳に云れたり。この事既に綏靖紀に云おけり。立かへいかにとも云かたし。なほよく尋ね考ふへきことなり。と記傳に云れたり。この事既に綏靖紀に云おけり。立かへりてよく考合すへし。○孺子。詳ならず。此天皇の皇子等。前にあれども。いつれも御裔あれば。それらのうちにてはまします。此は皇后の生玉へるなどにて。既に薨じたまへるを。遺詔ありて。後に此陵に合葬し玉へるなるへし。

日本書紀卷第十八終

北野本中臣本終字なし

# 日本書紀通釋卷之四十九

飯田武郷謹撰

## 日本書紀卷第十九

### 天國排開廣庭天皇

欽明天皇

尙書堯典曰。放勳欽明。文思安安。孔安國曰。欽敬也。

欽明天皇紀

天國排開廣庭天皇。男大迹天皇嫡子也。母曰手白香皇后。天皇愛之。常置左右。天皇幼時夢。有人云。天皇寵愛秦大津父者。及壯大。必有天下。寤驚。遣使普求。得自山背國紀伊郡深草里。姓字果如所夢。於是忻喜。遍身歎未曾夢。乃告之曰。汝有何事。答云。無也。但臣向伊勢。商價來還。山逢一狼相鬪。汚血。乃下馬洗漱。口手祈請曰。汝是貴神。而樂龜行。儻逢獵士。見禽尤速。乃抑止相鬪。拭洗血。

毛遂遺放之。俱令全命。天皇曰。必此報也。乃令近侍。優寵日新。大。致饒富。及至踐祚。拜大藏省。

嫡子。通證云。安閑紀曰。長子。此曰嫡子。蓋嫡庶之分也。○秦大津父。秦氏。雄略紀既出。大津父。名義美稱。なるへし。○寤驚。本に寤を寐に作る。今考本及舊事紀に據る。○紀伊郡深草里。倭名抄山城國紀伊郡深草。山城志云。紀伊郡深草。屬邑六。稻荷齋深草管内とあり。さて秦氏の此里に由縁あることは。神名式紀伊郡稻荷神社ありて。山城風土記に。稱伊奈利者。秦中家忌寸等遠祖。伊侶具秦公。積稻梁。有富祐。乃用餅爲的者。化。成白鳥。飛翔居山峯。遂爲社名とあり。○神記に。稻荷秦氏之祖神也。されは。大津父も此一族なりけらし。○忻喜。本に忻を所に作る。今活字本中臣本舊事紀等に據る。○歎未曾夢。通證に。未曾下疑脫。有字とあり。按に敏達紀に。馬子宿禰受而歎悅。嘆未曾有。頂禮三尼云々とあるに依らば。こゝも夢字は有の誤にて。歎未曾有とありしなるへし。さて訓の意にもたかはす。○商價。商價交易の事。はじめたものに見えたり。阿幾と云言意は未詳ならず。通證に引る新井氏曰。古者秋布穀既成。而後通商賈之道。故稱秋物也。とあれと信かたし。○狼。雄略紀に出。○貴神。大蛇を可畏之神と云る事。神代紀に見え。虎を威神と云ること。下文六年の下に見えたり。此類なり。○大藏省。この事は清寧紀に既に云。さてこの省は。後なる合制の八省とは。本より同じからず。八省の事は學總たふ大紀に云へし。

藏の官人と爲し玉へるなり。故下には大藏掾ともあり。然るに集解に。按元年紀。以大藏掾爲條件造。さて泰氏の大藏をすること。雄略紀また古語拾遺に見えられたれば。其由縁を以て任玉へるなり。舊事紀に。この官字なる令制をおもひて。何となく書換たるものなり。本のまゝにてあるへし。

四年冬十月。武小廣國押盾天皇崩。皇子天國排開廣庭天皇。令群臣曰。余幼年淺識。未閑政事。山田皇后明閑。百揆請就而決。山田皇后怖謝曰。妾蒙恩寵。山海詎同。萬機之難。婦女安預。今皇子者。敬老慈少。禮下賢者。日中不食。以待士。加以幼而穎脫。早擅嘉聲。性。是寬和。務存矜宥。請諸臣等。早令臨登位。光臨天下。

冬十月。宣化紀に二月崩とあり。幼年淺識。皇年代略記一代要記に。今年御年三十一とあるに依れば。幼年にはましまさず。いかくなるやうなれども。故に御心幼稚きさまに宜へるにやあらむ。また異なる傳にもやあらん。詳に知かたし。なほ次に云。山田皇后は。仁賢皇女にして。安閑皇后にます。百揆。本に揆を捺に誤る。今正せり。○山海詎同。本に詎を誰に作る。今中臣本及釋紀に據る。考本及假名本には雖に作る。誤なるへし。通説に當り。○矜宥。本に矜を矜に誤る。今正せり。○令登位光臨天下。

本に令の下に臨字あるは衍なり。今中臣本に據て刪る。集解にも。秘閣本光を先に作れり。

冬十二月庚辰朔甲申。天國排開廣庭皇子。即天皇位。時年若干。尊皇后曰。皇太后。大伴金村大連。物部尾與大連。爲大連。及蘇我稻目宿禰大臣。爲大臣。並如故。

十二月の上に。冬字あるは衍なり。今集解に據て削れり。○甲申は五日なり。○時年若干。本書旁書に。四字一本注とあり。後人の摺入なるへし。集解にも削れり。○尾與大連爲大連。この事上に云り。さて此下に及字あるは衍なるへし。○蘇我稻目宿禰爲大臣。舊事紀には。蘇我稻目宿禰の事なくて。物部目連公爲大臣とあるは誤なり。大日本史云。公卿補任曰。物部目雄略帝十三年以後。不見事蹟。薨年未詳。據此蓋舊事紀。誤以稻目爲物部目也と云り。

元年春正月庚戌朔甲子。有司請立皇后。詔曰。立正妃武小廣國押盾天皇女石姬。爲皇后。是生一男一女。長曰。箭田珠勝大兄皇子。仲曰。譯語田淳中倉太珠敷尊。少曰。笠縫皇女。更名狹田毛皇女。

甲子。十五日なり。○箭田珠勝大兄皇子。記には八田王とあり。和名抄に大和國添下郡矢田郷。神名類に矢田坐云云神社もあり。萬葉十に八。珠勝。義詳ならず。たゞ何となき御美稱か。記傳云。此勝はカチと訓へきか。又麻佐と訓へ田の野とよめるも此地なり。此皇子。此御世十三年に薨したまへり。○譯語田淳中倉太珠敷尊。譯語田は宮地の名なり。下に記には他田と書り。記傳云。書紀に譯語と書れたる意なり。

他田と書り。記傳云。書紀に譯語と書れたる意なり。推古紀に通事ともあり。又欲明紀。姓氏錄。和名抄。筑前縣名などに。曰佐とあるは假字なり。但此も韓國より書る字なるへし。さて此曰字を。日字と書るは寫誤なり。さて袁佐と云は。或人韓語なりと云る。然もあるへし。又他と書は。此も韓國よりのことか。將皇國にての事にて。腰を前。腹を後と書類にや。其意知かたし。他國の語を通はす由かとも思へど。然にはあらず。國有土郡郷名にも。他田と云ありて。乎佐多とありと云り。淳中倉。記に沼名倉と書り。記傳云。沼名之事は。中卷神沼河耳命の下に云り。稱名なる由は詳ならず。倉は谷の意か。沼名河とも。又天武天皇の大御名。淳名原とも申すを思へは。河とも原とも云へきか。又神功卷に。大津淳名倉之長峽とある。倉も谷を云かと思はるればなり。されど稱名となるへき由は詳ならず。太玉敷は御稱名なり。大御兄王の玉勝と並。と云り。○笠縫皇女。記に笠縫王とあり。崇神紀に笠縫邑あり。此地名か。忍坂彦人太子の御子にも。同御名あり。更名狹田毛も地名なるへし。されど所は詳ならず。

二月。百濟人已知部投化。置倭國添上郡山村。今山村已知部之先也。  
三月。蝦夷隼人並率衆歸附。  
百濟人已知部。姓氏錄大和諸蕃に。己智は秦太子胡亥之後也とあり。先祖は秦人なるか。百濟に移り

住しなるへし。續後紀承和十年十二月。奈良己智。奈良許知。續紀和國七年十一月にも見えたり。豐繼等八人。賜姓大瀧宿禰。其先百濟人也とあり。播磨風土記。傍磨郡韓室里條に。右稱韓室者。韓室首實等上祖。家大富饒。造韓室。故號韓室。巨智里。右巨智等始祖屋。居此村。故因爲名。所以云草上者。韓人山村等上祖。巨智賀那請此地。而墾田之時。有二聚草。其根尤臬。故號草上。などみえたり。山村の事は次に云。賀那は名なるへし。部は其部屬を云なるへし。○投化は。歸化に同じ。○添上郡。按に此にかくあれども。此ほど添上下と分りたるにはあらじ。郡と云稱もいまた无き時なればなり。後より記志しものなるへし。○蝦夷隼人。清寧紀に出。○山村。倭名抄添上郡山村也。末無良これなり。大和志云。添上郡郷名山村。方廢村存。又云。已知山屬邑二とあり。萬葉集にも行幸山村といふこと見えたり。さてまた姓氏錄に。大和諸蕃。山村忌寸。已知同祖。古禮公之後也。續紀神護景雲二年二月。山村許智人足。寶龜八年七月。山村許智大足賜姓山村忌寸とあり。山村奈良。添上郡に屬せり。和銅七年十一月なる。奈良許智も。同祖なること明らけし。さてここに山村已知部とあるは。通證に。此指姓而言。自二項。舊讀非とあるか如く。山村も已知部も二姓なるへきか。日本後紀十二。右兵衛大初位下山村曰佐助。三代實錄三十六。正六位上山村曰佐得道など云人みゆ。または舊讀の如く。山村之已知部か。上に舉たしたかに定めかたし。又大和志に。添上郡有百濟已知部宅址。山と云事もあり。靈異記上。大和國添上郡山村中里。昔有直椋家長公云云。今昔物語十二に。添上郡山村の山にして。一の鹿ありて。網見の里の百姓の家の中に走り入る云々。

秋七月丙子朔己丑。遷都倭國磯城郡磯城島。仍號爲磯城島金刺宮。

己丑は十四日なり。○磯城郡磯城島。記云。天皇坐師木島大宮。治天下也。○記傳云。師木は上に出。嶋とは。凡てもと周廻に界限のありて。一區なる城を云名にて。海中には限らず。秋津島と云も。本孝安天皇の都の名にて。大和の内の地名。應神天皇の都も輕なるを。輕島明宮と云類なり。されは此も彼秋津島宮。輕島宮などの例の如く。師木の地なるを。師木島とは云なり。敏達卷に。此天皇を即磯城島天皇と見え。孝德卷にも。磯城島宮御宇天皇とあり。さて凡て天皇の宮を。大宮と申すは常なれども。御世々々の段の首には。皆坐某宮とこそ云れ。某大宮と記せる例は記中に無し。いかゞ。續紀十二に昔者輕原大宮御宇天皇云云。な但是は殊にめてたき御世にて。此宮號は。後世まで大倭の大號にさへなれるはかりなれば。殊に大宮とは標たるにやと云り。○磯城島金刺宮。宮蹟は。聖德太子傳評註曰。玉林曰。三輪山邊有郷。曰磯城島。竹原中有小社。相傳宮蹟。舊都趾要覽に。今磯城郡。上郡。三輪町大字金屋。山崎の内かなざしと云地。これ皇居の一局部の蹟。なるへし。其地荒廢すと云り。大和志に。城上郡金刺宮。古蹟在。金屋村西南初瀬川南。とあるはたかへり。また日本靈異記に。大和國山邊郡磯城島村とあるは。郡たかへり。これは三輪山邊とありしを。山邊郡と書たかへしものなるへし。

八月。高麗。百濟。新羅。任那。並遣使獻。並修貢職。召集秦人漢人等。

諸蕃投化者。安置國郡。編貫戶籍。秦人戶數惣七千五十三戶。以大藏掾爲秦伴造。

並修貢職。並上脫字あるか。假名本並字なし。集解に献並二字を削れり。考本に職を賦に作れるはわろし。○戶籍。和名抄調度部。文字集畧曰。籍。和名與簡札同。民戶之書。古以版。今黃紙。野王案。凡書於簡札。皆謂之籍也。簡札。和名不美太とあり。文板の義なり。箋注云。欽明紀。學士。戶籍。乃不元太。稱名。籍籍也。所。以籍。藏人名戶口也。即此義。按周禮大司馬。掌學士之版。注。今時。戶籍。謂之戶版。小事。謂之簡里。以版圖。注。版。戶籍。宮正爲之。版。以詩。注。版。其人。之名籍。古以版。蓋是。今黃紙。未聞。廣本。版作。版。恐非。是。按戶籍。見。欽明元年。孝德大化元年。二年。三年。白雉三年。天智九年。持統三年。四年。紀。及職員令。戶令。民部省京職式。とあり。さて秦人漢人のことは。既く雄略紀十五年十六年の下に見えたれど。やうく多くなりもて來ぬるより。諸國郡に安置し。戶籍を作り。編戶の民となし玉ひしなり。俗に人別帳へ入るなり。○大藏掾。本に掾を椽に作る。今正せり。秦大津父。前年大藏省の官人となれるを。こゝには掾と云るなり。掾は令制にては。諸國主典に云る名目なれど。此にてはたゞ屬官に云るなり。大書故に。按乃屬官通稱とあり。古本の訓に。フミヒトとよめれど。マツリコトヒトと訓むかた。あたるへし。○秦伴造。雄略紀に。聚秦民。賜於秦酒公とあるに同じく。秦氏の統領となしたまへるなり。續紀十八。秦部飯麻呂。文德實錄六。秦部總成は。秦伴より起れるなるへしと。或人云り。

九月乙亥朔己卯。幸難波。祝津宮。大伴大連金村。許勢臣稻持。物部大連。

尾輿等オキトモツカマツル從焉オキトモツカマツル。天皇問テ諸臣マチキミタチニ曰イカフヘカリイカサフモテ。幾許軍卒イカクサツマシ伐得新羅ウチヲクハシ。物部大連尾輿等オキトモツカマツル奏曰オキトモツカマツル。少許軍卒不可易征オキトモツカマツル。曩者男大迹オキトモツカマツル。天皇六年オキトモツカマツル。百濟遣使オキトモツカマツル。表請任那オキトモツカマツル。上哆唎オキトモツカマツル。下哆唎オキトモツカマツル。娑陀オキトモツカマツル。牟婁オキトモツカマツル。四縣オキトモツカマツル。大伴大連金村オキトモツカマツル。輒依表請オキトモツカマツル。許賜所求オキトモツカマツル。由是新羅怨曠積年オキトモツカマツル。不可輕爾而伐オキトモツカマツル。於是大伴金村居住吉宅オキトモツカマツル。稱疾不朝オキトモツカマツル。天皇遣青海夫人オキトモツカマツル。勾子オキトモツカマツル。慰問オキトモツカマツル。慇懃オキトモツカマツル。大連怖謝曰オキトモツカマツル。臣所疾者非餘事也オキトモツカマツル。今諸臣等謂臣滅任那オキトモツカマツル。故恐怖不朝耳オキトモツカマツル。乃以鞍馬贈使オキトモツカマツル。使厚相資敬オキトモツカマツル。青海夫人依實顯奏オキトモツカマツル。詔曰オキトモツカマツル。久竭忠誠オキトモツカマツル。莫恤衆口オキトモツカマツル。遂不爲罪オキトモツカマツル。優寵彌深オキトモツカマツル。是年也太歲庚申オキトモツカマツル。

己卯は五日なり○難波祝津宮。攝津志に。河邊郡祝津宮。古跡在ニ西難波村。今有ニ八幡小祠古梅樹一株。とあり。續紀十八。攝津國住吉郡人。祝長。天書云。元年乙卯。行ニ幸難波。庚辰。六日。進ニ幸祝津宮。遣使祠住吉神。賜ニ民爵及帛。各有差。初將征ニ新羅。とあり。此には將征ニ新羅の事は書さねども。次の詔にて。其爲に難波に幸ませること知られたり。さて難波に幸坐るは。住吉神に御祈のためなり○許勢臣稻持。通證に。疑巨勢男人大臣之子と云り○上哆唎。繼體紀にオコシタリと訓るよろし。本の訓は誤あり。

○許賜所求。此事前紀に詳に出○新羅怨曠。前紀には。新羅の怨曠みしことは見えねど。つら／＼按るに。右の四縣は。もと任那の域なるを。新羅か奪はむと企て居しか故に。それを百濟に玉ひて守らしめ玉ひしなり。其處の文に。穗積臣押山か奏に。此四縣近連百濟。遠隔日本。旦暮易通。難犬難別。今賜百濟。合爲同國。固存之策無以過此。然縱賜合國。後世猶危。况爲異場。幾年能守。とありしより。遂に百濟に賜ひしかは。新羅の企望を絶たり。それを新羅の怨曠みてありしなり○於是大伴金村。秘閣本及信友校本に。大伴下に大連の二字あり○住吉宅。攝津志云。住吉郡大伴金村第。古蹟在ニ堺北庄高洲濱界。○青海夫人勾子。本に人字を脱したり。今本旁注秘閣本中臣本考本及釋紀に據る。さて姓氏錄に。青海首。椎根津彦命之後也とあれど。此人青海氏の人とも定めかたし。たゞ其住る地名などにてもあるへし。集解に。按天皇之妃。不記納者。蓋以夫人訓オホトシ。一訓に。ヲラトレとあるは誤なり。大刀訓あやま。舒明紀にも見えたり。刀自のことは既に出○謂臣滅任那。大連か百濟の貨賂を承て。四縣を百濟に與へたるより。新羅の怨曠みて。任那を打しを。かく云るなり。こゝに滅とあれども。未全く滅ひたるにはあらず。全く滅ひたるは。下文二十三年春正月。新羅打滅任那官家。とある時の事なり○資敬は。通證に以物表敬意也とあるか如く。夫人を慇懃にもてなしたるなり。本の句讀は誤なり○久竭忠誠。通證に澁川氏曰。金村事五朝。而無私心。求諸國而立天孫。可謂古今之忠臣也とあり○太歲庚申。年代紀を考るに。梁武帝大同六年に當れり。

二年春二月。納<sup>メ</sup>五妃。元妃皇后弟曰稚綾姫皇女。是生石上皇子。次有皇后弟。曰日影皇女。此日皇后弟。明是檜隈高田天皇女。而列后妃之名。不見母妃姓與皇女名字。不知出何書。後勘者知之。是生倉皇子。

稚綾姫皇女。皇后の御弟を。宣化紀には倉稚綾姫皇女とあるによらは。こゝも倉字の脱たるか如し。故集解に。されど記には。稚綾姫。男王にまじて。倉の若江王とあり。また此御世の處にも。娶其弟小石比賣命。生御子上王柱とあり。延佳本に。上王を石上王と作るは。紀に依て私に石字を補たるなるへし。諸本共に石字なるものな。なほ次に云。石上皇子。右に云る如く。記には上王とあり。こゝに石上皇子と云るも。石は衍にて。なほ上皇子なるへし。さて御母も小石姫皇女にて。次なる日影皇女の御事なるへし。これは記傳に據て云。日影皇女。これ即小石姫皇女の。亦御名にそありけんを。誤て別に一柱としたる傳なり。かれ分注に。此日皇后弟。明是檜隈高田天皇女。而列后妃之名。不見母妃姓與皇女名字。不知出何書。後勘者知之と。分注にいぶかれり。此分注は後人の挿入なるへしと。記傳に云れたる。然ることなるへし。集解にも挿入として削れり。○倉皇子。記に日影皇女も。倉皇子も見えず。但し娶春日之日爪臣之女糠子郎女。生御子宗賀倉王と申すあり。ざるを記傳云。宗賀も倉も地名。さて此王も。小石比賣命の御腹なるか。如此紛れつるなるへしと云り。なほ此御母のこと次に云。

次妃蘇我大臣稻目宿禰女曰堅鹽媛。堅鹽。此云生七男六女。其一日大兄皇子。是爲橘豐日尊。其二曰磐隈皇女。更名夢。初侍祀於伊勢大神。後坐軒皇子茨城解。其三曰臘鳥皇子。其四曰豐御食炊屋姫尊。其五曰椀子皇子。其六曰大宅皇女。其七曰石上部皇子。其八曰山背皇子。其九曰大伴皇女。其十曰櫻井皇子。其十一曰肩野皇女。其十二曰橘本稚皇子。其十三曰舍人皇女。

次妃蘇我云々。本に妃字なし。類史にあるに據る。○堅鹽媛。倭名抄に。崔禹錫食經云。石鹽一名白鹽。又有黑鹽。今按。俗呼黑鹽爲堅鹽。日本紀私記云。堅鹽木多師是也と見え。大膳式に堅鹽一千五百顆などあり。今世に。燒鹽と云物なり。此物に由ありて。名に負坐るなるへし。神名式に。大和國城下郡岐多志太神社と云あり。推古紀に。二十年二月。改葬皇大夫人堅鹽媛於檜隈大陵云々。用明御母なり。○橘豐日尊。これ用明天皇にます。橘は地名。豐日は御稱名なるへし。三代實錄七に。大和國豐日神と云見ゆ。孝德天皇をも天萬豐日尊と申せり。○磐隈皇女。記に石上王とあり。地名なるへし。此地名を。本にイハすと訓たるは非なり。通諸陵式に。龍田苑部墓。石前皇女。在大和國平群郡。兆城東西二町。南北二町。墓戸二烟とあり。大和志に。龍田村北。俗曰御廟山とあり。○夢皇女。懷風



藻に。吉田連宜か從<sub>二</sub>觀吉野宮<sub>一</sub>の詩に。今日夢淵々。萬葉三。同七に。夢乃和太<sub>イノツツ</sub>とあれば。吉野郡の地名に因たる御名か○初侍祀於云々。十六字舊事紀に分注とせり。文も初侍<sub>三</sub>天照大神祠<sub>二</sub>後坐<sub>レ</sub>好<sub>二</sub>茨城皇<sub>一</sub>子<sub>一</sub>とありて。聊異なり。解は。解官の解なり。齋宮を下り玉ふ事なり○茨城は異母兄なり。次に出○臘鳥皇子。臘下子字脱たるなるへ。記には足取王とあり。和名抄楊氏漢語抄云。鴉子鳥。俗云阿。辨色立成云。鴉鳥。和名同上。一云胡雀。或說云。此鳥群飛。とある是なり。天武紀にも。臘子鳥蔽<sub>レ</sub>天。自<sub>二</sub>西南<sub>一</sub>飛<sub>二</sub>東北<sub>一</sub>とあり。然るに本の傍書及舊事紀には。鴉雀鳥とあり。秘閣本中臣本には臘雀とありて。鳥字なし。通證にも此字の事を。今按雀又作<sub>レ</sub>雀。雀蓋雌字。雀字海篇雀音雌。皆借音也。三才圖會曰。蠟嘴鳥似<sub>レ</sub>雀而大嘴。如<sub>二</sub>黃蠟色<sub>一</sub>。故名とあり。さらは鴉雀鳥とも本にありしなり。今本は脱たること明らかなり。此御名は。此鳥に由ありて負坐るなるへし○豊御食炊屋姫尊。推古天皇にます。記傳に如何なる由にて負坐けむ。かの厩戸皇子の御名の由の類にや有けん。と云れたれど。古代には貴き婦人にも。炊屋などの事に預り玉ふことありて。其を御名に負玉ひし事ありて。既にこの事。神代紀の注に云り。此御名もさる由などありて負坐けん。本紀には。幼曰<sub>二</sub>額田部皇女<sub>一</sub>とあり○梔子皇子。記には麻呂古王とあり。繼體御子にも同名あり。既に云り○大宅皇女。記に大宅王。大宅は地名。記傳云。御乳母の姓にてもあらむかと云り。天武紀にも同名あり○石上部皇子。これにても上なる石上皇子は。上皇子なるへくおほえたり。御名は御乳母の姓に據たり。續紀十七。十九に石上部の姓見えたり。記には伊美賀古王とあ

り○山背皇子。記に山代王。御乳母の姓か。はた地名か。天武紀にも山背姫王あり○大伴皇女。舊事紀に皇子とあれど。記に妹大伴王とあれば。男王は誤なるへし。記傳云。此は御乳母の姓と聞ゆ。淳和の大御名の事件も然なり。桓武天皇の御子たち。御名。男王女王共に。みな御乳母の姓なり。武郷云。文德實錄に。先朝之制。每<sub>二</sub>皇子生<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>乳母姓<sub>一</sub>。但し上御代々々には。其例の御名見えす。儘に其と聞ゆるは。此御世<sub>一</sub>の御子等より見えたり。次々に云ふか如し。諸陵式に。押坂内墓。大伴皇女。在<sub>二</sub>大和國城上郡<sub>一</sub>。押坂陵域内。無<sub>二</sub>守戸<sub>一</sub>とあり○櫻井皇子。記には櫻井之玄王とあり。記傳云。櫻井地名か。敏達天皇の御子にも同御名あり。書紀にはたゞ櫻井皇子とあり。故思ふに。此は書紀の方正しくて。此記は。彼敏達天皇の御子の御名より紛れて共に御同名は。ある。と云り○肩野皇女。記には麻奴王とあり。肩野も麻奴も地名か。御乳母の姓か。性氏録野臣。眞野造など見ゆ。河内國に交。野郡あり。性氏録に肩野連見ゆ。○橋本稚皇子。記に橋本之若子王とあり。地名なるへし。雄略紀に。餌香市邊。橋本之土とあり。餌香は河内國古市郡なり。記に據るに。此御名稚の下。子字落たるなるへし○舍人皇女。記に泥杼王とあり。杼泥を下上寫誤れるものなるへし。記傳云。此は御乳母の姓なるへし。天武紀に。舍人連糠虫と云人見え。性氏録にも舍人氏見ゆ。さて推古卷に。云々當麻皇子到<sub>二</sub>播磨<sub>一</sub>時。從妻舍人姫王。薨<sub>二</sub>於赤石<sub>一</sub>。依葬<sub>二</sub>赤石<sub>一</sub>。檜笠岡上<sub>一</sub>とあるは。此王か別なるか。抑此記には。男王女王共に。同く某王と記して。これ即當昔の稱。呼のまにたり。差別なし。書紀に依て。男女を分別奉るへしと云り。

次堅鹽媛同母弟曰小姉君。生四男一女。其一日茨城皇子。其二曰葛城皇子。其三曰湍部穴穗部皇女。其四曰湍部穴穗部皇子。一書云。更名天香子皇子。一書云。更名住述皇子。其五曰泊瀬部皇子。一書云。其一曰茨城皇子。其二曰湍部穴穗部皇女。其三曰湍部穴穗部皇子。其四曰葛城皇子。其五曰泊瀬部皇子。一書云。其泊瀬部皇子。帝王本紀多有古字。撰集之人屢經遷易。後人習讀。以意刊改。傳寫既多。遂致舛雜。前後失次。兄弟參差。今則考其數古今。歸其真正。一往難識者。且依一撰。而注詳其異。他皆效此。

同母弟。記には岐多志比賣命之姨とあり。稻目大臣の妹なり。此と異なり。されど上宮法王帝説にも。大后吉多斯比弟とあれば。弟の方なるへし。記は誤なるへし。○小姉君。記には小兄比賣とあり。記なるは袁延と讀むへけれど。此紀なるは。舊訓に依てヲナ子とよむへし。また法王帝説に。大后弟名乎阿尼乃彌己等爲后。とあるによらは。ヲア子とよむへし。ア子もナネも。同じこま。なるよしは既に云へり。○茨城皇子。記には馬木王とあり。記傳云。字婆良の良を省きて。字麻紀とも云なるへし。婆と麻と通ふは常なる中に。萬葉廿には。茨を即字萬良とよめり。此も御乳母の姓なるへし。姓氏錄に茨木造二氏みゆとあり。○葛城皇子。記に葛木王とあり。姓氏錄に葛城朝臣。葛木忌寸。葛木直などみゆ。敏達天皇の御子にも同御名あり。又天智天皇も。初に葛城皇子と申せり。

其外も同名あり。○湍部穴穗部皇女。湍部を本にハセツカへと訓るは。甚しき誤なり。ハシヒトと訓へし。記には間人穴太部王とあり。記傳云。間人は波志毘登と訓へし。間は借字にて。物の間を波志と土師人のよしなり。土師は。波爾志なるを。爾を省きて云とまは。志を濁りて波自と常。かくて此御名の間人は。御乳母の姓なり。姓氏錄に間人宿禰。間人連など見ゆ。丹後國竹野郡に間人郷もあり。穴太部の事は次に云へし。此御名。書紀用明卷推古卷に。穴穗部間人皇女ともあり。舒明天皇の御子にも。間人皇女と申すあり。さて此皇女は。用明天皇の太后に坐々て。聖德太子の御母に坐り。かくて崩し玉ひし事は。上宮法王帝説。其他の書にも見えて。推古天皇二十八年十二月二十日なり。諸陵式に。龍田清水墓。間人女王。在大和國平群郡。兆城東西三町。南北三町。墓戸二烟。天智天皇六年に。小市岡上陵に合葬とある。間人皇女は。舒明天皇の御名にて別なり。混ふへからず。とあり。○湍部穴穗部皇子。記には三枝部穴太部王とあり。記傳云。三枝部は御乳母の姓なり。此姓上に出。穴太部は。姉王の御名。此王の御名に。同く負坐るに就て不審きを。左右に考るに。なほ二柱の御名同地名にて。大和國にありて。大かたのころに至ては。御子たちは。皆京近き大和國の内に。住居るさまにおほゆればなり。御兄弟共。其地に住居坐るを以て。共に穴太部王とは申せるなるへし。但大和に。此地名は物に見あたらす。今も聞えず。吉野の奥に穴太はあり。此地名は。穴太部なる人等の住有し。若くは安楽天皇の穴穗宮の地を。穴穗部とも云るか。何にまれ此御名は地名とこそおほゆれ。さて書紀には湍部穴穗部皇子とあり。傳の異なるなり。此は此記の方正しかるへし。其故は御兄弟全く同じ御名なること。あるへくもあらされはなり。殊に湍部は。御乳母の姓なれば更なり。

ヒトなるを。本にハセフカヘと訓て。傍に丈部と書るは。いみじき非なり。丈部とは大く異なるをや。天武紀などにみえたる姓の源部も同じ。敏達紀用明紀に。たゞ穴穂部皇子とあるも此王なり。崇峻巻に。蘇我馬子に殺され玉へりと云り。○天香子皇子。名義詳ならず。○住迹皇子。舊事紀に住迹物部と云るあり。倭名抄攝津國住吉郡住道須無知あり。是か。詳ならず。○泊瀬部皇子。崇峻天皇の大御名なり。記に長谷部若雀命とあり。記傳云。長谷部は御乳母の姓なり。長谷部君上にみゆ。十二又姓氏錄に長谷部造もあり。若雀は。武烈天皇の大御名。若雀命と。あまり同じさまなるは。彼御名と紛へて。誤傳へたるにやあらむ。書紀にたゞ泊瀬部皇子とあるを正しかるべき。彼御名にも。泊瀬部天皇とあり。見え。とあり。さて集解云。按據例則應稱尊。謂皇子誤と云り。さる言なり。また次の一書の下の傍注に。皇子を皇女とあるは誤なり。○更名天香子。本に此下皇子二字なきは誤なるへし。集解には補たり。○帝王本紀。この注例のこゝに在ることは。詳に首巻に云り。集解にも。注例注神代上紀。此發注例一者。世歴漸近。而諸說紛錯。故發例示所。以不致譌作注也。と云り。通證に。是推古紀所謂天皇紀。而廢戸太も。其次に。今按此以下親王所。自述。謂此紀者當爲。斷と云る。古字は。古き漢字を云。古名字と見たるは誤なり。は。さる言なり。然るに信友本に此注を刪去たるは。甚しき私なり。○古字は。古き漢字を云。古名字と見たるは誤なり。○屢經遷易。集解云。按川島皇子以下十餘人。蓋各有論說。互有定本。故異同紛錯。多所遷易耳。とあり。この事も既に云り。○考覈。本に數を竅に作り。今通證集解等に依る。さて訓は孝德紀にも。檢敷をアナクリと訓り。榮花物語に大あなくりとあり。穴探の意なるへし。

次春日日抓臣女曰糠子。生春日山田皇女與橋麻呂皇子。

次春日日抓臣女。以下二十三字は。傳の紛れなるへし。まづ春日日抓云々は。抓を本に橋に誤れり。今中臣本訓みて。應神の妃なる。和珥日關使主女宮主宅媛の日關と。一とせしは。甚しき非なり。仁賢紀に。和珥臣日爪女糠君娘。生一女。是爲春日山田皇女とあり。記にも此段に。又娶春日之日爪臣之女糠子郎女。生御子春日山田郎女。次麻呂古王とあり。記傳云。此は既に廣高宮段に見えて。上の春日を。彼段には丸瀬とあれど。山田郎女は。彼天皇の御子なるに。又此に如此あるは。傳の誤なり。春日山田郎女は。安閑天皇の皇后に坐は。仁賢天皇の御子なる。さて麻呂古王も。下なる麻呂古王の。紛ひて重なるにて。誤れるなりと云り。下なる麻呂古王とは。記に右の文の次に。又娶宗賢之稱日宿禰大臣之なる麻呂古王に對して云なり。右の如くなれば。こゝの傳は誤なること明らかし。○橋麻呂皇子。記には橋と云言なし。さて此皇子も誤なること。上に云るか如し。

夏四月。安羅次早岐夷吞奚。大不孫。久取柔利。加羅上首位古殿奚。卒麻早岐。散半奚早岐兒。多羅下早岐夷他。斯二岐早岐兒。子他早岐等。與任那日本府吉備臣。往赴百濟。俱聽詔書。百濟聖明王謂任那早岐等言。日本天皇后詔者。全以復建。任那。今用何策。起建。任那。

蓋各盡忠。奉展聖懷。任那早岐等對曰。前再三廻與新羅議。而無答報。所圖之旨。更告新羅。尚無報。今宜俱遣使。往奏天皇。夫建任那者。奚在大王之意。祇承教旨。誰敢間言。然任那境接新羅。恐致卓淳等禍。卓淳等國有敗亡之禍。謂卓淳已吞加羅言。

安羅以下。加羅。卒麻。散半奚。多羅。斯二岐。子他等の國。皆任那國の別種なること。二十三年紀の下に見えたり。さて卒麻。斯二岐。子他。詳ならず。○散半奚。文献備考慶尙道に。新羅八谿縣。本草八合縣。高麗草谿縣。顯宗入。陝州。本朝草谿郡とある。此なるへし。下文に奚を下に作れり。○多羅。陝州郡なり。既出。○次早岐以下。上首位。下早岐。みな位號なり。或人云。次早岐は新羅官名にて。南史新羅傳に。其官有子貢早支。壹早支。齊早支云々。梁書には子貢早支。齊早支。謁早支と叙たり。何にまれ。子貢早支の次なるを云。下文に下早支大不孫。久取柔利と見えたり。次早支と云官は。夷吞奚一人にて。次は下早支なるへしと云り。○大不孫。久取柔利。下文五年下に。安羅。下早岐。大不孫。久取柔利とあり。安羅を本に新に作るは誤なり。そこに云り。○上首位を。假名本にはをこししゆむと訓り。○下早岐。同本に下をあるしと訓り。○子他。下文二十三年に。傍書子作古。○任那日本府。集解に日本二字を。下五年例に據て官に改めたるは私なり。下みな同じ。さて此官府は安羅國にありしこと。下にみえたり。○吉備臣調名。下文にも的臣。

吉備臣。河内直等。咸從。移那斯麻都指擔。而已などあり。さてこゝに調名字とあれども。これも下文の本注に。的臣等者。謂吉備弟君臣河内直等也とあれは。弟君臣のことなるへし。されど此人には疑はしき事あり。其本注の下に云り。○聖明王。この王繼體紀十八年に見えたり。聖明はセイメイと訓り。○任那早岐等は。上文なる七國の早岐等なり。○復建任那は。集解云。按繼體天皇二十一年詔。欲與建新羅所破南加羅。喙已吞。合任那。下文七月紀。按取新羅所折之國。南加羅。喙已吞等。還屬本貫。邊實任那。又天皇詔。勸立南加羅。喙已吞。非但數十年。而新羅一不聽命。由是觀之。謂取新羅所侵南加羅等故地。合任那。爲復建任那也とあり。○無報。秘閣本無下所字あり。○奚在。訓に據に奚は實の誤か。さて大王は聖明王なり。○卓淳等禍。集解云。按任那則新羅隣境。恐且見逼新羅。猶卓淳。喙已吞。南加羅。曾既敗亡也。言任那亦且危也。卓淳國出于神功皇后四十六年紀。とあり。南加羅は金官小加羅なるへし。慶尙道の南邊なり。○喙已吞。本に喙を喙に誤る。前紀に據て改む。吞を答に誤る。今傍書及前紀によれり。下みな同じ。

聖明王曰。昔我先祖速古王貴首王之世。安羅加羅卓淳早岐等。初遣使相通。厚結親好。以爲子弟。冀可恒隆。而今被誑新羅。使天皇忿怒。而任那憤恨。寡人之過也。我深懲悔。而遣下部中佐平麻鹵。城方甲

背。昧奴等。赴加羅。會于任那日本府。相盟。以後繫念。相續圖建。任那。旦夕無忘。今天皇詔稱。速建任那。由是欲共爾曹。謀計樹立。任那等國。宜善圖之。又於任那境。徵召新羅。問聽與不。乃俱遣使。奏聞天皇。恭承示教。儻如使人未還之際。新羅候隙。侵逼任那。我當往救。不足爲憂。然善守備。謹警無忘。別汝所導。恐致卓淳等禍。非新羅自強。故所能爲也。其隸已吞居。加羅與新羅境際。而被連年攻敗。任那無能救援。由是見亡。其南加羅。叢爾狹小。不能卒備。不知所託。由是見亡。其卓淳上下。携貳。至欲自附。內應新羅。由是見亡。因斯而觀三國之敗。良有以也。昔新羅請援於高麗。而攻擊任那與百濟。尚不克之。新羅安獨滅任那乎。今寡人與汝戮力并心。翳賴天皇。任那必起。因贈物各有差。忻忻而還。

速古王貴首王。神功紀四十九年には。肖古王貴須王とあり。姓氏録にも肖古とあり。被証新羅。集解云。按

蓋曾有百濟被証新羅。而絶安羅等之好而已とあり。この事紀に見えず。○忿怒。本に怒を怨に誤れり。今秘閣本考本集解本に依る。○下部中佐平。本に部を郡に誤れり。今考本集解本に依る。中をシタと訓るは。シウの誤なるへし。下文にしかあり。また秘閣本中をシタと訓り。下文にもしかよめ。韓語なり。隋書百濟傳に。官有二十六品。左平一品とあり。或人云。東國通鑑に。百濟古爾王二十七年。百濟置内臣佐平。掌宣納事。内頭佐平。掌庫藏事。内法佐平。掌禮儀事。衛士佐平。掌宿衛兵事。朝廷佐平。掌刑獄事。兵官佐平。掌外兵馬事とあれば。此に見えたる佐平は。兵官佐平なるへしと云り。○麻鹵。城方。甲背。昧奴。背を本に肖に誤る。今中臣本釋紀及繼體紀に依る。さて此は通證に。蓋四人名。麻鹵見繼體紀。二十年とあるよろし。集解に麻鹵按名也。繼體天皇紀に。甲背麻鹵蓋職名といひ。按麻鹵昧奴二人と云へるは誤なり。同紀十年の處に。前部木務不麻甲背とありて。甲背は名なること明らけし。○欲云云樹立任那等國。本に等字を脱したり。今本傍注中臣本等に依る。さて此段の大意を述んに。我深く過に懲たる故に。佐平の官人を加羅へ遣り。任那にある處の日本の官府へ。國々の人を呼び集め。言合せて。任那を建る筈に。盟をなして居たる上に。天皇より。此般任那を立よと詔あるからは。いよよくとく相談すへしとなり。○問聽與不。集解に。按言聽建。南加羅等不とあり。○我當往救。此處の大意は。新羅か寇を爲んか。爲まじきかを。任那の境まで人を呼て聞届け。得心せん使を。日本へ上よと云て。百濟の使者と一に日本に上ん。其使の歸らぬ内に寇を爲しなは。聖明王か心得て。任那を救むとなり

○別汝所導。本に導を導に作る。今通證に依る。集解には道に改めたり。さて別には。辭別て曰と云か  
如くなるへし。考本に却に作るは是ならず。○至欲。本傍書抄開本中臣本考本等に。至を主とあるは誤なるへし○内應  
の訓。ウチアヒ、スは誤なるへし。打合ウチアヒスなるへし。

秋七月。百濟聞安羅日本府與新羅通計。遣前部奈卒鼻利莫古。奈卒  
宣文。中部奈卒木劬味淳。紀臣奈卒彌麻沙等。紀臣奈卒者。蓋是紀臣娶韓婦所生。因留百濟爲奈卒者也。未詳其父。他皆效此也。使于安羅。召致新羅任那執事。謨建任那。別以安羅日本府河  
內直通計新羅。深責駟之。百濟本記云。加不至費直阿賢。移那斯。佐魯麻都等。未詳也。乃謂任那曰。昔我先祖  
速古王貴首王。與故旱岐等。始約和親。式爲兄弟。於是我以汝爲子  
弟。汝以我爲父兄。共事天皇。俱距強敵。安國全家。至于今日。言念先  
祖與舊旱岐和親之詞。有如皎日。自茲以降。勤修隣好。遂敦與國之恩  
踰骨肉。善始有終。寡人之所恒願。未審何緣。輕用浮辭。數歲之間。慨  
然失志。古人云。追悔無及此之謂也。上達雲際。下及泉中。誓神

乎今。改咎乎昔。一無隱匿。發露所爲。精誠通靈。深自克責。亦所宜  
取。蓋聞爲人後者。貴能負荷先軌。克昌堂構。以成勳業也。故今追  
崇先世和親之好。敬順天皇詔勅之詞。拔取新羅所折之國。南加羅。喙  
己吞等。還屬本貫。遷實任那。永作父兄。恒朝日本。此寡人之所食  
不甘味。寢不安席。悔往戒今之所勞想也。夫新羅甘言希誑。  
天下之所知也。汝等妄信。既墮人權。方今任那境接新羅。宜常設備。  
豈能弛拆。爰恐陷羅誣欺。綱弄喪國。亡家爲人繫虜。寡人念茲。  
勞想而不能自安矣。竊聞任那與新羅。運策席際。現蜂蛇恠。亦衆  
所知。且夫妖祥所以戒行。災異所以悟人。當是明天告戒。先靈  
之徵表者也。禍至追悔。滅後思興。孰云及矣。今汝遵余聽。天皇勅。可  
立任那。何患不成。若欲長存本土。永御舊民。其謨在茲。可不慎  
也。

秋七月百濟。與清云。此下聖明王の三字脱するかと云り。全文を按ずるにさもあるへし○奈卒。東國通鑑に。百濟古爾王二十七年。置<sub>三</sub>六佐平。并一品。達率二品。恩率三品。德率四品。扞率五品。奈率六品。將德七品。施德八品。因德九品。季德十品。對德十一品。文督十二品。武督十三品。佐軍十四品。振武十五品。克虞十六品。合六品以上服紫。以銀華飾冠。十一品以上服緋。十六品以上服青とあり○宣文。本旁書秘閣本及釋紀三條西本。文を父に作る○彌麻沙は。下にも三處見えたり○召致。本に致を到に作れり。今集解小寺本に依る○新羅任那執事。按にこの新は安の誤なるへし。この任那執事に告る語を思ふに。新羅執事に對ひて云る言ともきこえず○河内直。集解云。未詳。凡河内直同祖○責駟之の駟は。屬字を横に書たるものなり。なほ繼體紀二十四年の下に云り○費直。直に費字を書し事は。稱徳紀に。神護景雲元年下阿波國百姓言曰。己等姓。庚午年籍被<sub>レ</sub>記。凡直。唯籍皆着<sub>二</sub>費字。情所<sub>レ</sub>不安。於是改爲<sub>二</sub>粟凡直。寶龜四年光仁紀。阿波國勝浦郡領長<sub>レ</sub>費。人立言。庚午之年。長直籍皆着<sub>二</sub>費之字。因<sub>レ</sub>茲前部領長直救夫。披訴改註<sub>二</sub>長直とあり。稱徳紀。凡直下。考證に狩谷氏説を引て曰。姓直古或作<sub>レ</sub>費。見<sub>二</sub>寶龜四年五月紀。及法隆寺金堂二天造像記。欽明紀有<sub>二</sub>河内費。又引<sub>二</sub>百濟本紀。作<sub>二</sub>加不至費直。並假<sub>二</sub>借價直之字と也。とあるか如し。但し費直と書たるは。この他に見當らす○阿賢移那斯。佐魯麻都。二人の名なり。阿賢は文献備考慶尙道に。新羅安賢縣。本阿尸令縣。尸一作乙。高麗安定縣。顯宗入<sub>二</sub>尙州とある地の人なるへし。さて此二人の下に。語訛二字脱するか。下文例見へしと。信友云り○謂任那曰。安羅任那執事

なり○咬日。與清云。按咬は皎の誤かと云り○勤修。勤或校本に一本勤とあれど。本のまよにてよろし○骨肉は。古訓にミと訓たれとよからず。ウカラなどよむへし○上達雲際云云の大意は。上天下土に誓て。心底をのこさす。我か過を克責たらむには。取用ることありとなり○堂構は。尙書大誥の語にて。室を作るを以て喻て。父の業を構立するを云なり○所折。ヘク持統紀訓同じ。毀折也。ヘツルは其狀を云也。字鏡集運歩色葉抄等に。折をよみ。添遺抄五に。折字をヘツルとあり。○本貫は。郷籍也と注して。本の貫屬に還す事なり○永作父兄。本に永を求に作れり。中臣本考本に據る○希証の二字。出處詳ならず。訓も少しいかとなり。考へし。さてかく新羅の事を言へるにても。新羅執事に言へる詞なりとしては叶はず。安羅の執事に云りしことと見へし○弛拆は。西京賦に城尉不弛拆とあるにて。訓の意にも叶へり。本に施析に作るは誤なり。今秘閣本考本に據る。然るを或説に施當<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>所。上文可<sub>レ</sub>證。宜<sub>レ</sub>訓<sub>二</sub>閉都良禮牟夜と云るはわろし○陷羅誣欺網窳。網を本に綱に作る。考本集解に依る○任那與新羅運策。これは任那日本府の中に。新羅に内應せしものあるを云るなり○蜂蛇怪。この事いかなる事とも知へからず。通證に引たる左傳莊公に。初内蛇與<sub>二</sub>外蛇。鬪<sub>二</sub>於鄭南門中。内蛇死。とある類の事なるへきか○妖祥。本に妖を抜とあり。古體なり。さてこの妖祥を。地ノワサハヒ。災異を天ノワサハヒと訓るは。いかなるよしにか○明天告戒。天下之字脱たるなるへし。一本にはありと云り○可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>慎也。也はずとあるへし。一本には乎に作る云り。

聖明王更謂任那日本府曰。天皇詔稱。任那若滅。汝則無資。任那若興。汝則有援。今宜興建任那。使如舊日。以爲汝助。撫養黎民。謹承詔勅。悚懼填胸。誓効丹誠。冀隆任那。永事天皇。猶如往日。先慮未然。然後康樂。今日本府復能依詔。救助任那。是爲天皇所必褒讚。汝身所當賞祿。又日本卿等。久住任那之國。近接新羅之境。新羅情狀。亦是所知。毒害任那。謨防日本。其來尙矣。匪唯今年。而不敢動者。近羞百濟。遠恐天皇。誘事朝廷。僞和任那。如斯感激。任那日本府者。以未禽任那之間。僞示伏從之狀。願今候其間隙。諾其不備。一舉兵而取之。天皇詔勅。勸立南加羅。喙已吞。非但數十年。而新羅一不聽命。亦卿所知。且夫信敬天皇。爲立任那。豈若是乎。恐卿等輒信甘言。輕被謾語。滅任那國。奉辱天皇。卿其戒之。勿爲他欺。

資。紀中因字を訓り。寄所なり。萬葉に。余須可乃山跡。見管將偲。○今日本府云云は。任那日本府の人

か。新羅へ内應の意あるを戒むる也。○褒讚。本に褒を哀とあり。今集解に依る。○僞示伏從之狀。通證に此言。新羅之情狀とあり。○諾其不備。諾は誤なるへし。集解謀に作れり。其説に謀原作。諾。訓二字加可比。活版作。詰。詰多言也。今據訓改。字。謀伺也。とあり。秘閣本にも詰に作る。小寺本も詰に改む。水戸本云。○天皇詔勅。詔字の上秘閣本中臣本水戸本。以字あるよろし。

秋七月。百濟遣紀臣奈卒彌麻沙。中部奈卒已連。來奏下韓任那之政。并上表之。

秋七月。已に前に見えたり。衍なるへし。集解には。上に三年二字を補ひて云。原直書。秋七月。而係二年。二年既上書。秋七月。今照前後。二年以接四年。脱三年。明矣とあれど。みたりに補かたし。○下韓任那。集解云。按四年十一月紀曰。任那之下韓。五年十一月紀曰。於南韓置郡令城主者。即南加羅と云へれど。南韓と南加羅とは異なり。按に四年十一月に。在任那之下韓。百濟郡令城主云々とあるを。五年十一月文には。於南韓置郡令城主云々とあれは。下韓は南韓と同じ。さて其地は詳ならず。五年の下に。北敵を防護の料とあれば。任那の内にも。北に當れる地方なるへし。これを南加羅なりと云るは押當なるへし。南加羅は此時新羅に滅されたりとあるに。百濟にて郡令城主を置へきにあらす。よく考へし。



四年夏四月。百濟紀。臣奈卒彌麻沙等罷之。秋九月。百濟聖明王遣前部奈卒眞牟貴文。護德己州已婁。與物部施德麻哥牟等。來獻扶南財物。與奴二口。

護德。二年紀奈卒注に云る。固德九品とある是なり。○施德。二年紀に注す。八品なり。○扶南。晋書南蠻扶南國傳曰。扶南。西去林邑二千餘里。在南海大灣中。其境廣袤二千里。有城邑宮室。人皆醜黑。拳髮裸身。行。性質直。不爲冠盜。以耕種爲務。一歲種三歲穫。又好彫文刻鏤。食器多以銀爲之。貢賦以金銀珠香。亦有書記府庫文字。有類於胡。喪葬婚姻。略同林邑。其王本是女子。字葉柳時。有外國人混潰者。先事神。夢神賜之弓。又教載舶入海。混潰且詣神祠。得弓。遂隨賈人一汎海。至扶南外邑。葉柳率衆禦之。混潰舉弓。葉柳懼遂降之。於是混潰納以爲妻。而據其國。後胤衰微。子孫不紹。其將范尋復世王扶南。齊書曰。扶南在日南之大海西蠻中。廣袤二千四里。通鑑集覽。扶南南蠻國。詳閱。林邑扶南占城真獵一國也。五雜俎曰。夷狄諸國莫富於真獵。今按。財物中疑有扶南香。葉廷珪云。沉香出渤泥占城真獵者。謂之番沈。以真獵爲上。此方俗謂之伽羅。伽羅是黑之梵語。李時珍所謂堅黑爲上是也。又見推古二年紀。奴二口。本に奴字脱たり。本傍書秘閣本中臣本集解に據る。

冬十一月丁亥朔甲午。遣津守連詔百濟曰。在任那之下韓。百濟郡令城主。宜附日本府。并持詔書。宣曰。爾屢構表。稱當建任那。十餘年矣。表奏如此。尙未成之。且夫任那者。爲爾國之棟梁。如折棟梁。誰成屋宇。朕念在茲。爾須早建。汝若早建。任那。河內直等。自當止退。豈足云乎。是日聖明王聞。宣勅已。歷問三佐平内頭及諸臣曰。詔勅如是。當復何如。三佐平等答曰。在下韓之我郡。令城主不可出之。建國之事。宜早聽聖勅。

十一月。活板十月とあるは誤なり。○甲午は八日なり。○百濟郡令城主。下文には令を領とあり。さてこの郡令城主の事。下にをり見えたり。上に下韓任那之政とあるも即是にて。はしめ百濟國より境をこえて。任那の下韓の地に。郡令城主を置たるなるへし。其は任那を鎮するか爲なるへけれども。もとより本國の土地にあらねは。今は其を任那日本府に屬て。百濟より置たる郡令等人は。自國へ引還すへきことを。府より奏上せしものなるへし。故朝廷より其詔ありしも。彼此と申し立てよ。引還すへきまにあらねは。重ねてまた詔ひ遣し玉ふなるへし。○構表。中臣本及下文には構を抗とあり。集

解には改めたり○十餘年とあれば。繼體天皇崩御の比より。數々この事表奏せしものと見ゆ○誰成屋  
字。中臣本には誰を詎に作れり○須早建。本に早字一字衍れり。秘閣本中臣本集解等に依て刪る○河  
内直。二年紀に見えたり。さて集解に。安羅官府宰。通謀新羅者とあり。さて等とは。五年紀に謂  
移那斯麻都也とあり○内頭。官名なり既出。東國通鑑に内頭佐平掌庫藏事とあり○三佐平は。上中  
下佐平なり。下文に見ゆ。

十二月。百濟聖明王復以前詔。普示群臣曰。天皇詔勅如是。當復何如。  
上佐平沙宅已婁。中佐平木劬麻那。下佐平木尹貴。德卒鼻利莫古。德卒東  
城道天。德卒木劬味淳。德卒國雖多。奈卒燕比善那等同議曰。臣等稟性  
愚闇。都無智略。詔建任那。早須奉勅。今宜召任那執事國々。早岐等  
俱謀同計。抗表述志。又河内直。移那斯。麻都等猶住安羅。任那恐難建  
之。故亦并表乞移本處也。聖明王曰。群臣所議。甚稱寡人之心。是月  
乃遣施德高分。召任那執事與日本府執事。俱答言。過正。且而往聽  
焉。

上佐平。上を東と訓るは韓語なり。さて此官は通鑑に。百濟腆支王四年。以餘信爲上佐平。委以軍  
國政事。上佐平之職始於此とあり○沙宅已婁。沙宅は地名なるへし。推古紀十八年沙嶽部とあり。そ  
こに云へし。己婁は名なり。上文にも己州己婁あり。己州も地名なるへし○中佐平。中の訓シウ韓語な  
り。上に出。また私記に之蘇ともあれば。シソとも云るか。下又中夫人の下には。申をクと訓り。かく。さましく訓るうち。必あやまりあるへし。○下佐平。  
下を私記に於止とあり。これも韓語なり○德卒鼻利莫古。德卒第四品の官なり。前には奈卒とあり。  
此時階を進みしと見えたり○國雖多。雖を古訓にスイと訓り。雖は推なるへし。或校本には推とあり  
○高分。五年紀には高分屋とあり。

五年甲子

五年春正月。百濟國遣使。召任那執事與日本府執事。俱答言。祭神時  
到。祭了而往。是月百濟復遣使。召任那執事與日本府執事。日本府任  
那俱不遣執事。而遣微者。由是百濟不得俱謀。建任那國。二月。百  
濟遣施德馬武。施德高分屋。施德斯那奴次酒等。使于任那。謂日本府  
與任那早岐等曰。我遣紀臣奈率彌麻沙。奈卒已連。物部連奈率用歌  
多。朝謁天皇。彌麻沙等還自日本。以詔書宣曰。汝等宜共在彼日本

府。早建良圖。副朕所望。爾其戒之。勿被他誑。又津守連從日本來。百濟本記云。津守連已麻奴跪。宣詔勅而問任那之政。故將欲共日本府任那執事。議而語說不正。未詳。定任那之政。奉奏。天皇遣召二廻。尚不來到。由是不得共論圖計。任那之政。奉奏。天皇矣。今欲請留津守連。別以疾使具申情狀。遣奏天皇。當以三月十日。發遣使於日本。此使便到。天皇必須問汝。汝日本府卿。任那早岐等。各宜發使共我使人往聽。天皇所宣之詔。別謂河內直。百濟本記云。河內直。移那斯。麻都。而語說未詳。其正也。自昔迄今。唯聞汝惡。汝先祖等。百濟本記云。汝先那干陀甲背。加臘直岐甲背。亦云。那歌陀甲背。鷹歌岐彌。語說未詳。俱懷奸偽。誘說為歌可君。百濟本記云。為歌可君。岐彌。名有非岐。專信其言。不憂國難。乖背吾心。縱肆暴虐。由是見逐。職汝之由。汝等來住任那。恒行不善。任那日損。職汝之由。汝是雖微。譬猶小火燒焚山野。連延村邑。由汝行惡。當敗任那。遂使海西諸國官家。不得長奉天皇之闕。今遣奏天皇。乞移汝等。還其本處。汝亦往聞。

祭神時到。通證に謂任那國之神とあり○斯那奴次酒。下十四年紀には。上部徳卒科野次酒とあると同人なるへし。さらは斯那奴は族なるへし。なほ彼處に云。繼體紀十年には。日本新那奴阿比多とあり。○奈卒用歌多。中臣本及釋紀に歌を奇とあり。これは古歌を省きて。奇と書し一體と見えて。古書に蘇我を卷奇とも書り。此奇も哥なるへし。また下文にもさる例みえたり。さて此人三年に來れる人なるへけれど。そこにはこの物部連の事を載せず○津守連從日本來。四年十一月に發せる事見えたり○注己麻奴跪。下に留己麻奴跪。蓋是津守連也。とあり○注河內直移那斯麻都。二人なり。通證に下文爲三人とあれど。三人にはあらず。さて此兩人。前に既に本文に出たり。こゝに語說とあるはいかゞ○那干陀甲背。加臘直岐甲背。鷹歌岐彌。詳ならず○爲歌可君。何處の人とも詳ならず。又何方へ見逐しか。集解に按爲歌可君。蓋安羅若任那府宰。可疑衍と云り○職汝之由。通證に四字疑衍。蓋次行謬入于此也と云り○汝等來。秘閣本等字なし○來住。小寺本住を往に作れり○連延。本に延を近に作る。今通證に引る一本。小寺本集解に依る○還其本處。本處とは何處を云るにか。考に本處とは。河內直は安羅に置るものなりと云り。なほ次に云。

又謂日本府卿。任那早岐等曰。夫建任那之國。不假天皇之威。誰能建也。故我思欲就天皇。請將士而助任那之國。將士之糧。我當須運。

將士之數。未限若干。運糧之處。亦難自決。願居一處。俱論可不。擇從其善。將奏天皇。故頻遣召。汝猶不來。不得議也。日本府答曰。任那執事不赴召者。是由吾不遣。不得往之。吾遣奏天皇。還使宣曰。朕當以印歌臣語說未詳遣於新羅。以津守連遣於百濟。汝待聞勅。際莫自勞往新羅百濟也。宣勅如是。會聞印歌臣使於新羅。乃追遣問天皇所宣詔。曰。日本臣與任那執事。應就新羅聽天皇勅。而不宣就百濟聽命也。後津守連遂來過此。謂之曰。今余被遣於百濟者。將出在下韓之百濟郡令城主。唯聞此說。不聞任那與日本府會於百濟聽。天皇勅。故不往焉。非任那意。於是任那旱岐等曰。由使來召。便欲往參。日本府卿不肯發遣。故不往焉。大王爲建任那。觸情曉示。觀茲忻喜。難可具申。

論可不。古き訓に可不をヨシアシと訓るよろし。本の讀は誤なり○遣奏天皇の下。秘閣本中臣本使字

あり○印歌臣。上なる爲歌可君とは異なるへし。集解云。按傍注印歌爲伊賀。伊賀臣出子宣化天皇元年紀とあり○汝待聞勅。句際莫自勞往云々也。と讀へし。舊讀は誤なり。際を假名本アヒタと訓り○不宜就百濟云々。或說に宣は宜歎と云り。然るへし。さらは不宜聽命と云義にて。これまたなほ詔詞なり○將出とは。郡令城主を出して。本處に歸さむとの意なり。さて此處も舊讀は誤なり。集解はよろし○觸情。集解に引る漢書に。觸情妄行。宋書に觸情恣欲とあり。訓コ、ロノキタキタは。任情の義なり。キタ／＼は段々なり。假字本には。コ、ロノマニ／＼ともよめり○忻喜難可具申。釋秘訓に喜を恣とあり。さて此までの文意を。考云。此段は日本府卿か。詔勅を巧に偽て造りたる事なり。會聞と云からか作り言なり。新羅へ往て詔勅を聽けと云事は。勅書になき事なり。皆口上て作て云て。百濟から呼へとも行かぬとの言譯なりと云れたり。さることなり。

三月。百濟遣奈卒阿毛得文。許勢奈率歌麻。物部奈卒歌非等。上表曰。奈卒彌麻沙。奈卒己連等。至臣蕃。奉詔書。曰。爾等宜共在彼日本府。同謀善計。早建任那。爾其戒之。勿被他誑。又津守連等至臣蕃。奉勅書。問建任那。恭承來勅。不敢停時。爲欲共謀。乃遣使召日本府。百濟本記云。遣召

鳥胡跛臣。蓋與任那俱對言。新年既至。願過而往。久而不就。復遣使召。俱對言。祭時既至。願過而往。久而不就。復遣使召。而由遣微者。不得同計。夫任那之不起召者。非其意焉。是阿賢移那斯。佐魯麻都也。已見上文。奸佞之所作也。夫任那者。以安羅爲兄。唯從其意。安羅人者。以日本府爲父。唯從其意。百濟本記云。以安羅爲父。以日本府爲本也。今的臣。吉備臣。河內直等咸從移那斯。麻都指擣而已。移那斯。麻都雖是小家微者。專擅日本府之政。又制任那。障而勿遣。由是不得同計。奏答。天皇故留己麻奴跪。蓋是津守連也。別遣使。迅如飛鳥。奉奏天皇。假使一人。二人者。移那斯與麻都也。在於安羅。多行奸佞。任那難建。海西諸國。必不獲事。伏請移此二人。還其本處。勅諭日本府與任那。而圖建任那。故臣遣奈率彌麻沙。奈率已連等。副己麻奴跪。上表以聞。

阿毛得文。毛を本に亡に作る。傍書に音特とあるに依に。誤なるへし。今は秘閣本中臣本に據る。に考

一本也とあれども。得文は下文にも出。阿毛は族名か。許勢奈率歌麻。通證に。與巨勢同。此亦倭種在百濟者と云り。歌麻下文にみゆ。歌非。釋秘訓に歌を奇とあり。この事上に云り。注鳥胡跛臣。本に鳥を焉に作る。今中臣本通證一本に依る。集解に焉爲之誤とあるは非なり。與任那下。或説に恐脫。早岐二字と云り。さもあるへし。祭時。本に祭を奈に誤る。今考本集解及上文に依る。任那者。任那人者の義なり。任那聯邦の人の凡ての意なり。爲父。本に父を天に作る。今集解に引る壺本及本傍訓に依る。唯從其意。考云。任那は安羅を尊み。安羅は日本府を尊ふことなり。それに輕きものなれども。日本府の事を。移那斯麻都等と掌り。任那の早岐共をも塞て。百濟から召へとも遣はさす。それ故任那の事を相談して。天皇へ答へ奉ることもならずとの事なりと云り。さる説なり。的臣。吉備臣。河内直等。安羅日本府卿なり。使迅。秘閣本中臣本。使上疾字あり。トキと訓り。不獲事。本の讀は誤れり。舊訓にエツカマツラシと訓るよろし。還其本處。考云。本處と云か。こゝにて見れば。安羅の事とも見えず。日本へ呼玉へと云事かと云り。副己麻奴跪。通證云。遣彌麻沙已連。在二年秋七月。而不此事。五字疑衍と云り。いかにも疑はし。

於是詔曰。的臣等。等者。謂吉備弟君。河内直等也。往來新羅。非朕心也。曩者印支彌。與阿鹵旱岐在時。爲新羅所逼。而不得耕種。百濟路迥。不能救急。

由<sub>三</sub>的<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>等<sub>三</sub>往<sub>三</sub>來<sub>三</sub>新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>。方<sub>三</sub>得<sub>三</sub>耕<sub>三</sub>種<sub>三</sub>。朕<sub>三</sub>所<sub>三</sub>曾<sub>三</sub>聞<sub>三</sub>。若<sub>三</sub>已<sub>三</sub>建<sub>三</sub>任<sub>三</sub>那<sub>三</sub>。移<sub>三</sub>那<sub>三</sub>斯<sub>三</sub>。麻<sub>三</sub>都<sub>三</sub>。自然<sub>三</sub>却<sub>三</sub>退<sub>三</sub>。豈<sub>三</sub>足<sub>三</sub>云<sub>三</sub>乎<sub>三</sub>。伏<sub>三</sub>承<sub>三</sub>此<sub>三</sub>詔<sub>三</sub>。喜<sub>三</sub>懼<sub>三</sub>兼<sub>三</sub>懷<sub>三</sub>。而<sub>三</sub>新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>誑<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>。知<sub>三</sub>匪<sub>三</sub>天<sub>三</sub>勅<sub>三</sub>。新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>春<sub>三</sub>取<sub>三</sub>。喙<sub>三</sub>淳<sub>三</sub>。仍<sub>三</sub>擯<sub>三</sub>出<sub>三</sub>我<sub>三</sub>久<sub>三</sub>禮<sub>三</sub>山<sub>三</sub>戍<sub>三</sub>。而<sub>三</sub>遂<sub>三</sub>有<sub>三</sub>之<sub>三</sub>。近<sub>三</sub>安<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>處<sub>三</sub>。安<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>耕<sub>三</sub>種<sub>三</sub>。近<sub>三</sub>久<sub>三</sub>禮<sub>三</sub>山<sub>三</sub>處<sub>三</sub>。新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>耕<sub>三</sub>種<sub>三</sub>。各<sub>三</sub>自<sub>三</sub>耕<sub>三</sub>之<sub>三</sub>。不<sub>三</sub>相<sub>三</sub>侵<sub>三</sub>奪<sub>三</sub>。而<sub>三</sub>移<sub>三</sub>那<sub>三</sub>斯<sub>三</sub>。麻<sub>三</sub>都<sub>三</sub>。過<sub>三</sub>耕<sub>三</sub>他<sub>三</sub>界<sub>三</sub>。六<sub>三</sub>月<sub>三</sub>逃<sub>三</sub>去<sub>三</sub>。於<sub>三</sub>印<sub>三</sub>支<sub>三</sub>彌<sub>三</sub>後<sub>三</sub>來<sub>三</sub>許<sub>三</sub>勢<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>時<sub>三</sub>。百濟本記云。我留印支彌。之後至。既酒臣時。皆未詳。新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>無<sub>三</sub>復<sub>三</sub>侵<sub>三</sub>逼<sub>三</sub>他<sub>三</sub>境<sub>三</sub>。安<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>不<sub>三</sub>言<sub>三</sub>爲<sub>三</sub>新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>逼<sub>三</sub>。不<sub>三</sub>得<sub>三</sub>耕<sub>三</sub>種<sub>三</sub>。臣<sub>三</sub>嘗<sub>三</sub>聞<sub>三</sub>。新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>每<sub>三</sub>春<sub>三</sub>秋<sub>三</sub>。多<sub>三</sub>聚<sub>三</sub>兵<sub>三</sub>甲<sub>三</sub>。欲<sub>三</sub>襲<sub>三</sub>安<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>與<sub>三</sub>荷<sub>三</sub>山<sub>三</sub>。或<sub>三</sub>聞<sub>三</sub>。當<sub>三</sub>襲<sub>三</sub>加<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>。頃<sub>三</sub>得<sub>三</sub>書<sub>三</sub>信<sub>三</sub>。便<sub>三</sub>遣<sub>三</sub>將<sub>三</sub>士<sub>三</sub>。擁<sub>三</sub>守<sub>三</sub>任<sub>三</sub>那<sub>三</sub>。無<sub>三</sub>懈<sub>三</sub>怠<sub>三</sub>也<sub>三</sub>。頻<sub>三</sub>發<sub>三</sub>銳<sub>三</sub>兵<sub>三</sub>。應<sub>三</sub>時<sub>三</sub>往<sub>三</sub>救<sub>三</sub>。是<sub>三</sub>以<sub>三</sub>任<sub>三</sub>那<sub>三</sub>隨<sub>三</sub>序<sub>三</sub>耕<sub>三</sub>種<sub>三</sub>。新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>不<sub>三</sub>敢<sub>三</sub>侵<sub>三</sub>逼<sub>三</sub>。而<sub>三</sub>奏<sub>三</sub>百<sub>三</sub>濟<sub>三</sub>路<sub>三</sub>迥<sub>三</sub>不<sub>三</sub>能<sub>三</sub>救<sub>三</sub>急<sub>三</sub>。由<sub>三</sub>的<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>等<sub>三</sub>往<sub>三</sub>來<sub>三</sub>新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>。方<sub>三</sub>得<sub>三</sub>耕<sub>三</sub>種<sub>三</sub>。是<sub>三</sub>上<sub>三</sub>欺<sub>三</sub>天<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>。轉<sub>三</sub>成<sub>三</sub>奸<sub>三</sub>佞<sub>三</sub>也<sub>三</sub>。曉<sub>三</sub>然<sub>三</sub>若<sub>三</sub>是<sub>三</sub>尙<sub>三</sub>欺<sub>三</sub>天<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>。自<sub>三</sub>餘<sub>三</sub>虛<sub>三</sub>妄<sub>三</sub>。必<sub>三</sub>多<sub>三</sub>有<sub>三</sub>之<sub>三</sub>。的<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>等<sub>三</sub>猶<sub>三</sub>住<sub>三</sub>安<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>。任<sub>三</sub>那<sub>三</sub>之<sub>三</sub>國<sub>三</sub>恐<sub>三</sub>難<sub>三</sub>建<sub>三</sub>立<sub>三</sub>。宜<sub>三</sub>早<sub>三</sub>退<sub>三</sub>却<sub>三</sub>。臣<sub>三</sub>深<sub>三</sub>懼<sub>三</sub>之<sub>三</sub>。佐<sub>三</sub>魯<sub>三</sub>麻<sub>三</sub>都<sub>三</sub>雖<sub>三</sub>是<sub>三</sub>韓<sub>三</sub>腹<sub>三</sub>。位<sub>三</sub>居<sub>三</sub>大<sub>三</sub>連<sub>三</sub>。廁<sub>三</sub>日<sub>三</sub>本<sub>三</sub>執<sub>三</sub>事<sub>三</sub>之<sub>三</sub>間<sub>三</sub>。入<sub>三</sub>榮<sub>三</sub>班<sub>三</sub>貴<sub>三</sub>盛<sub>三</sub>之<sub>三</sub>例<sub>三</sub>。而<sub>三</sub>今

反<sub>三</sub>著<sub>三</sub>新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>。奈<sub>三</sub>麻<sub>三</sub>禮<sub>三</sub>冠<sub>三</sub>。即<sub>三</sub>身<sub>三</sub>心<sub>三</sub>歸<sub>三</sub>附<sub>三</sub>。於<sub>三</sub>他<sub>三</sub>易<sub>三</sub>照<sub>三</sub>。熟<sub>三</sub>觀<sub>三</sub>所<sub>三</sub>作<sub>三</sub>。都<sub>三</sub>無<sub>三</sub>怖<sub>三</sub>畏<sub>三</sub>。故<sub>三</sub>前<sub>三</sub>奏<sub>三</sub>惡<sub>三</sub>行<sub>三</sub>。具<sub>三</sub>錄<sub>三</sub>聞<sub>三</sub>訖<sub>三</sub>。今<sub>三</sub>猶<sub>三</sub>著<sub>三</sub>他<sub>三</sub>服<sub>三</sub>。日<sub>三</sub>赴<sub>三</sub>新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>域<sub>三</sub>。公<sub>三</sub>私<sub>三</sub>往<sub>三</sub>還<sub>三</sub>。都<sub>三</sub>無<sub>三</sub>所<sub>三</sub>憚<sub>三</sub>。夫<sub>三</sub>喙<sub>三</sub>國<sub>三</sub>之<sub>三</sub>滅<sub>三</sub>。匪<sub>三</sub>由<sub>三</sub>他<sub>三</sub>也<sub>三</sub>。喙<sub>三</sub>國<sub>三</sub>之<sub>三</sub>函<sub>三</sub>跛<sub>三</sub>旱<sub>三</sub>岐<sub>三</sub>。貳<sub>三</sub>心<sub>三</sub>加<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>國<sub>三</sub>。而<sub>三</sub>內<sub>三</sub>應<sub>三</sub>新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>。加<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>自<sub>三</sub>外<sub>三</sub>合<sub>三</sub>戰<sub>三</sub>。由<sub>三</sub>是<sub>三</sub>滅<sub>三</sub>焉<sub>三</sub>。若<sub>三</sub>使<sub>三</sub>函<sub>三</sub>跛<sub>三</sub>旱<sub>三</sub>岐<sub>三</sub>。不<sub>三</sub>爲<sub>三</sub>內<sub>三</sub>應<sub>三</sub>。喙<sub>三</sub>國<sub>三</sub>雖<sub>三</sub>小<sub>三</sub>。未<sub>三</sub>必<sub>三</sub>亡<sub>三</sub>也<sub>三</sub>。至<sub>三</sub>於<sub>三</sub>卓<sub>三</sub>淳<sub>三</sub>。亦<sub>三</sub>復<sub>三</sub>然<sub>三</sub>之<sub>三</sub>。假<sub>三</sub>使<sub>三</sub>卓<sub>三</sub>淳<sub>三</sub>國<sub>三</sub>主<sub>三</sub>。不<sub>三</sub>爲<sub>三</sub>內<sub>三</sub>應<sub>三</sub>。新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>招<sub>三</sub>寇<sub>三</sub>。豈<sub>三</sub>至<sub>三</sub>滅<sub>三</sub>乎<sub>三</sub>。歷<sub>三</sub>觀<sub>三</sub>諸<sub>三</sub>國<sub>三</sub>敗<sub>三</sub>亡<sub>三</sub>之<sub>三</sub>禍<sub>三</sub>。皆<sub>三</sub>由<sub>三</sub>內<sub>三</sub>應<sub>三</sub>貳<sub>三</sub>心<sub>三</sub>人<sub>三</sub>者<sub>三</sub>。今<sub>三</sub>麻<sub>三</sub>都<sub>三</sub>等<sub>三</sub>。腹<sub>三</sub>心<sub>三</sub>新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>。遂<sub>三</sub>着<sub>三</sub>其<sub>三</sub>服<sub>三</sub>。往<sub>三</sub>還<sub>三</sub>旦<sub>三</sub>夕<sub>三</sub>。陰<sub>三</sub>構<sub>三</sub>奸<sub>三</sub>心<sub>三</sub>。乃<sub>三</sub>恐<sub>三</sub>任<sub>三</sub>那<sub>三</sub>由<sub>三</sub>茲<sub>三</sub>永<sub>三</sub>滅<sub>三</sub>。任<sub>三</sub>那<sub>三</sub>若<sub>三</sub>滅<sub>三</sub>。臣<sub>三</sub>國<sub>三</sub>孤<sub>三</sub>危<sub>三</sub>。思<sub>三</sub>欲<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>之<sub>三</sub>。豈<sub>三</sub>復<sub>三</sub>得<sub>三</sub>耶<sub>三</sub>。伏<sub>三</sub>願<sub>三</sub>天<sub>三</sub>皇<sub>三</sub>立<sub>三</sub>鑒<sub>三</sub>遠<sub>三</sub>察<sub>三</sub>。速<sub>三</sub>移<sub>三</sub>本<sub>三</sub>處<sub>三</sub>。以<sub>三</sub>安<sub>三</sub>任<sub>三</sub>那<sub>三</sub>。

的<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>等<sub>三</sub>。上<sub>三</sub>に百<sub>三</sub>濟<sub>三</sub>本<sub>三</sub>記<sub>三</sub>云<sub>三</sub>。遣<sub>三</sub>召<sub>三</sub>烏<sub>三</sub>胡<sub>三</sub>跛<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>。蓋<sub>三</sub>是<sub>三</sub>的<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>也<sub>三</sub>とありて。日<sub>三</sub>本<sub>三</sub>府<sub>三</sub>卿<sub>三</sub>なり。さて此<sub>三</sub>の注<sub>三</sub>に。吉<sub>三</sub>備<sub>三</sub>弟<sub>三</sub>君<sub>三</sub>とあるは疑<sub>三</sub>はし。此<sub>三</sub>人<sub>三</sub>は雄<sub>三</sub>略<sub>三</sub>紀<sub>三</sub>七<sub>三</sub>年<sub>三</sub>に見<sub>三</sub>えて。そ<sub>三</sub>れより今<sub>三</sub>年<sub>三</sub>に至<sub>三</sub>りて。八<sub>三</sub>十<sub>三</sub>年<sub>三</sub>はかりな<sub>三</sub>れは。此<sub>三</sub>人<sub>三</sub>にはあるへからず。其<sub>三</sub>子<sub>三</sub>孫<sub>三</sub>な<sub>三</sub>こにてあるへし。○印<sub>三</sub>支<sub>三</sub>彌<sub>三</sub>。下<sub>三</sub>文<sub>三</sub>に今<sub>三</sub>日<sub>三</sub>本<sub>三</sub>府<sub>三</sub>印<sub>三</sub>岐<sub>三</sub>彌<sub>三</sub>。謂<sub>三</sub>在<sub>三</sub>任<sub>三</sub>那<sub>三</sub>。既<sub>三</sub>討<sub>三</sub>新<sub>三</sub>羅<sub>三</sub>。日本<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>名<sub>三</sub>也<sub>三</sub>。

更將伐我。又樂聽新羅漫語也。夫遣印支彌於任那者。本非侵害其國云々。とあるによれば。けにも日本府卿にて。任那に在しものなり。さて支を秘閣本假名本共にスと訓り。下文にはまた假字本にシと訓り。これらに據らば。支とある方宜しかるへし。○與阿爾早岐在時。通證に蓋任那早岐名とあり。在時とは任那の府に在し時なり。○救急。古訓にスクヒマタイとよめり。救ひて其國を全くすることの意なるへし。○豈足云乎。集解云。按建任那以下。四年十一月所詔。移那斯麻都。作河内直等とあり。○兼懷。水本兼を盈に作る。○新羅春取咏淳。又云。按咏蓋卓。謂卓淳。卓淳之滅。已見二二年紀。蓋至此取以爲新羅之地。照五年十一月紀。爲卓淳。明矣とあり。或説に春字衍と云る。さもありぬへし。昔字などの誤か。○久禮山成。本に成を戎に誤る。今考本集解等に從る。さてこの成は。百濟より卓淳を成りし兵士なるへし。下文に久禮山の五城とあり。○過耕他界とは。久禮山成を擴出して。咏淳地までも耕種するを云なるへし。○六月逃去。考云。六月字は半年のことなり。みなつきとよむへからす。六箇月にて耕種を止て逃去しとなり。○印支彌後來許勢臣時とは。印支彌に代りて。許勢臣の日本府の任に來りし時と云事なるへし。この臣の任に府にありしとは。新羅も侵逼すること能はさりしとなり。されどこの注に引る。百濟本記なる。我留印支彌之後云々とあるは。いかなる事にか詳ならず。○安羅不言爲新羅逼不得耕種。通證に。言新羅不侵逼。故安羅亦得耕種也と云り。○荷山。集解に引東國通鑑曰。百濟腆支王二年。駕洛國王伊尹品卒。子坐知立。卜者爲坐知筮之。得解卦。其辭曰。解

而拇。明至斯乎。坐知謝之。擯女子于荷山島とあるを見れば。加羅の屬島なるへし。○懈怠。本に怠を息に作る。今集解に依る。○韓腹。通證云。考上文。佐魯麻都。本是百濟人。故曰韓腹とあれど。百濟人とおもはれす。○大連。又云。大連謂執政事也とあり。然ることなるへし。されどマチキミと訓るは。わろし。音讀にすへし。○之例。本は之字一字衍れり。例は列と通せて書るなり。例あり。○奈麻禮冠。釋紀私記曰。按新羅國七位冠也とあり。東國通鑑曰。新羅儒理王八年。新羅設官有二十七等。十曰大奈麻。自重大奈麻。至九重奈麻。十一曰奈麻。自九重奈麻。至七重奈麻とあり。○於他易照。通證云。言於他所行。甚易照見也とあり。他をヒトと訓るは。次に他服と訓る如し。○暎國之滅。繼體紀二十一年に見ゆ。○函鼓早岐。通證に暎國王名とあり。今按に王族の人なるへし。○加羅自外合戰。加羅二字中臣本なし。○雖少。中臣本考本。少を小とあり。何れにてもよろし。○軒。日本靈異記に軒可陶彌。○安任那。以上三月表奏文なり。

冬十月。百濟使人奈卒得文。奈卒歌麻等。罷歸。百濟本記云。冬十月。奈卒得文。奈卒歌麻等。還自日本。曰。所奏河内直。移那斯。麻都等事無報勅也。十一月。百濟遣使。召日本府臣任那執事。曰。遣朝天皇。奈率得文。許勢奈率哥麻。物部奈率哥非等。還自日本。今日本府臣。及任那國執事。宜來聽勅。同議。任那。日本吉備臣。安羅下早岐大不孫。久取

柔利。加羅。上首位古殿奚。卒麻君。斯二岐君。散半奚君兒。多羅。二首位訖。乾智。子他旱岐。久嵯旱岐。仍赴百濟。

歌麻等罷歸。契冲校本。歌を奇と作り。此二人は三月來聘せるか。今歸れるなり。百濟本記文によれば。要領を得ずして歸れるか如し。河内直等か奸心の。深く皇朝までも浸潤せしものと見えたり。さて哥麻を下文に歌非とあり。又それを秘閣本には奇非とあり○安羅下早岐。本に安を新に誤れり。今秘閣本中臣本釋紀集解等に依る。通鑑にも新羅當下早岐。二年紀に安羅次早岐大不孫とあり○二首位。通證に二恐上字之謬とあり。舊訓にヲコシとあれば。上なること明らかし○子他旱岐。本に旱岐を倒せり。今秘閣本中臣本活字本釋紀ともに依る○久嵯。詳ならず。二十三年に古嵯に作れり。

於是百濟王聖明略以詔書示曰。吾遣奈卒彌麻佐。奈卒已連。奈卒用哥多等。朝於日本。詔曰。早建任那。又津守連奉勅。問成任那。故遣召之。當復何如。能建任那。請各陳謀。吉備臣任那旱岐等曰。夫建任那國。唯在大王。欲冀遵王俱奏聽勅。聖明王謂之曰。任那之國。與吾百濟自古以來。約為子弟。今日本府印岐彌。謂在任那一日。本臣名也。既討新羅。更將伐

我。又樂聽新羅虛誕謾語也。夫遣印支彌於任那者。本非侵害其國。未詳往古來今。新羅无道。食言違信。而滅卓淳。股肱之國欲快返悔。故遣召到。俱承恩詔。欲冀興繼任那之國。猶如舊日。永為兄弟。竊聞新羅安羅兩國之境。有大江水。要害之地也。吾欲據此修繕六城。謹請天皇二千兵士。每城充以五百。并我兵士。勿使作田。而逼惱者。久禮山之五城。庶自投兵降首。卓淳之國亦復當興。所請兵士。吾給衣糧。欲奏天皇。其策一也。猶於南韓。置郡令城主者。豈欲違背天皇。遮斷貢調之路。唯庶克濟多難。殲撲強敵。凡厥凶黨。誰不謀附。北敵強大。我國微弱。若不置南韓郡領城主。修理防護。不可以禦此強敵。亦不可以制新羅。故猶置之。攻逼新羅。撫存任那。若不爾者。恐見滅亡。不得朝。欲奏天皇。其策二也。又吉備臣。河内直。移那斯。麻都。猶在任那國者。天皇雖詔建。成任那。不可得也。請移此四人。各遣還其



本邑<sup>コノムラ</sup>奏<sup>ウラハス</sup>於<sup>ニ</sup>天皇<sup>ニ</sup>。其策<sup>ニ</sup>三也。宜與<sup>ニ</sup>日本<sup>臣</sup>任那<sup>旱岐</sup>等。俱奉<sup>ニ</sup>遣使<sup>ト</sup>。同奏<sup>ニ</sup>天皇<sup>ニ</sup>。乞<sup>ヒ</sup>聽<sup>ク</sup>。恩詔<sup>ヲ</sup>。於是<sup>ニ</sup>吉備臣<sup>旱岐</sup>等曰。大王<sup>所</sup>述<sup>ニ</sup>三策<sup>ト</sup>。亦協<sup>ニ</sup>愚情<sup>ト</sup>。而已<sup>ニ</sup>。今願<sup>ニ</sup>歸<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>敬<sup>ニ</sup>諮<sup>ル</sup>日本<sup>大臣</sup>。安羅王<sup>加羅王</sup>。俱遣<sup>ニ</sup>使<sup>ト</sup>。同奏<sup>ニ</sup>天皇<sup>ニ</sup>。此誠<sup>ニ</sup>千載<sup>一會</sup>之期<sup>ト</sup>。可不<sup>ニ</sup>深思<sup>ニ</sup>而熟計<sup>ニ</sup>歟。

朝於日本。二月に聘する處なり○吉備臣。日本府卿なり。されど此は疑しき由あり。下に云○印岐彌。本彌を彌に作る。今秘閣本中臣本及上文に依る○既討新羅。新羅は恐らくは。加羅の誤なるへし。本のまゝにては更に聞えず。さて此は既にこあれば。これより前の事なる事明らかし○更將伐我。本に伐を代に作り。今秘閣本考本集解等に依る。さてこの文意は。上の今と云を。この更字上に移して見るへし。既に加羅を討て其國を滅し。今更我を伐むとすととなり。我は百濟任那等を云なり○滅卓淳股肱之國云々。此一句義詳ならず。通證には滅卓淳を句にして。股肱之國欲快返悔と讀り。其義は。唇亡而齒寒。卓淳滅。則任那諸國皆危矣。言雖爲新羅股肱耳目之國。而懼其蠶食逼己。故欲快返悔也と説り。又集解には本のまゝに訓て。滅卓淳股肱之國は。按即百濟自言也。欲快返悔とよみて。按言報恨于新羅也と説り。ともに通しかたし。なほよく考へし○欲冀。按に此二字倒せるか

○大江水。通證に疑是洛東江とあり。地圖を按するに。上流にして東江といひ。また吉屯江といひ。また岐江といふ。下流は金海府の海に入る大江なり。○六城。秘閣本中臣本。六下に地字あり。此は據此地云々とありしか。錯りて入しものなるへし○每城充以五百。通證に言三千兵士充六城也○勿使作田。集解云。五年紀曰。新羅春取曝淳。仍擯出我久禮山成。近久禮山處。新羅耕種。按令新羅不得耕也とあり○逼備者。本に逼を過とあり。秘閣本中臣本集解に依る○久禮山之五城。新羅の有する所なり○降首。後漢書注に首猶服也とあり○亦復當興。句なり。卓淳も亦興復せんとなり○南韓。四年紀に下韓とあり。上に云ふ○不謀附。本のまゝにてあるへし。通證に不當作可とあるは非なり○北敵強大。本に北を此とあり。今秘閣本中臣本考本活字本等に依る。下文に。宜共任那。依前勅。戮力俱防北敵。各守所封とあり。こゝも北敵の誤なること知るへし。さて北敵とは通證に。詳考上下文。蓋指高麗也。○高麗。東。○高麗。本高句麗地。とあり。次に亦不可。以制新羅とあるに依るに。けにも高麗を指すなるへし。このとき高麗よりも。百濟任那の地を窺しこと。天書六年三月の文に見えたり○又吉備臣河内直云々。河内直はさることなれども。吉備臣はいかゞなり。通證云。此日本府卿也。然吉備臣同此議。則不宜有此言。而上文論的臣之惡。疑是記者謬的臣也と云る。さる言なるへし○奏於天皇。上例に据るに。奏上欲字を脱せしものなるへし○日本大臣。契沖本に。本下府字ありと云り。こゝは脱たるものなるへし。

十二月。越國言。於佐渡嶋北御名部之碕岸。有肅慎人。乘一船舶。而淹  
 春夏捕魚充食。彼嶋之人言非人也。亦言鬼魅。不敢近之。嶋東禹  
 武邑人。採拾椎子。爲欲熟喫。著灰裏炮。其皮甲化成一二人。飛騰火上。  
 一尺餘許。經時相鬪。邑人深以爲異。取置於庭。亦如前飛。相鬪不已。  
 有人占云。是邑人必爲魃鬼所迷惑。不久如言。被其抄掠。於是肅  
 慎人移就瀨波河浦。浦神嚴忌。人不敢近。渴飲其水。死者且半。骨積  
 於巖岫。俗呼肅慎隈也。

御名部之碕。倭名抄佐渡國羽茂郡。水湊美奈也とあり。通證に此かと云り。同國人萩野由之が佐渡國地  
 名考云。此國始は一國一郡なりしを。元正天皇養老五年に。難太郎を割て。賀母羽茂二郡を置き。凡  
 て三郡となる。これより異なることなし。續記延喜式 さて禹武邑は。後羽茂郡となりし地にて。今羽茂本  
 郷などいふ所の地名なるへし。御名部碕地詳ならず。集解通證ともに水湊郷ならんと云り。水湊は。  
 ミナヤ。ミナへと相似たれど。いかうあらん。地位は東北にあたれば。島の北といふまじきにあらず。  
 後の致を俟つ。おもふに此國滄桑の變によりて。海水横断せし地も。今は連りたれば。名も亡ひたる

なるへし。國志に。今加茂郡なる。兩片邊村ならんといふは。誤なり。次に辨すへしと云り。こゝに國志とあるは。佐渡國志なり。文化十三年の頃記し書なり。 ○肅慎。美之波世と訓む。アレハセの假字也。齊明紀も同じ。此國は漢土にては。いと古代より通ひし事みえたれど。釋紀に引る後漢書曰。挹婁古肅慎之國也。在夫餘東北千餘里。通證云。史記注曰。靺鞨古肅慎也。類聚國史。元正天皇養老四年。遣渡島津輕津司。從七位上諸君鞍男等六人於靺鞨國。觀其風俗。按唐曰。靺鞨。宋曰。女真。遼。道宗名。宗真。故改曰。女直。元明仍其稱云とあり。集解に引る乘燭談曰。女直國東北夷也。在朝鮮東北。與蝦夷地接。古謂肅慎氏是也。北魏之時曰。挹婁。又勿吉。唐時曰。靺鞨。奥州壺碑所謂去靺鞨國二千里。是宋曰。女真。遼云云曰。女直。元明仍其稱。明天啓九年。建國號曰。大清。今清是也。遼金皆女直之種也。とあるなどにて明らけし。東海談云。多賀城碑に靺鞨とあるは。肅慎國にして。今は朝鮮と一になりしなり。朝鮮と一になりしと云るは非なり。 ○彼島之人。佐渡人なり。○言非人也。通證に意以爲非人也と云れたるか如し。天書に。肅慎人泊。其形如鬼。とあるにて。島人の非人とおもへるさう聞えたり。○爲欲。水戸本に欲爲に作れり。○禹武邑。倭名抄佐渡國羽茂郡。此地の事上に云り。○椎子。倭名抄草部。椎子。本草云。椎子之比。○熟喫。熟をコナシと云るは。熱田をコナタと云るか如し。しかるに集解にコカシと訓るは。甚しき非なり。○瀨波河浦。本に波字なし。今秘閣本に據る。萩野由之が地名考云。瀨河浦。今羽茂郡に背合村あり。海に瀨せし村落なり。是なるへし。セノカハを詠りて。セナカフといひ。背合の字となりしものと見ゆ。武彙云。此説は今本瀨河れども。既に瀨波河と云る本あれば。本よりセナカハと云しなるへし。 此地に蝦夷塚といふあり。今詠りてエン塚といふ。夏秋の交。雨暗き夜に

は。一團の鬼火出て。海上を徜徉すること。古より名高し。俗にエンツカカの一ツ火といふなり。海岸に峙てる小岡なれば。これ所謂肅慎隈にやあらん。浦神嚴忌にして。其害を除き玉ひしは。度津神社。古此に在しものなるへし。度津の條參看すへし。地理に照し見て悟るべきものなり。國志には。今の加茂郡鹿の浦なり。このあたりに蝦夷塚といふものありて。近世まで。巨人の體骨を掘出せしことありと云り。いはゆる肅慎隈にやあらん。又このあたりの古き童話にも。片部鹿の浦流に。毒あるよしをうたひぬ。されは夷人の飲し水も此流にて。古この水に瘴癘の氣ありて。飲もの其毒にあたりしを。年経て後も。そのことをうたひけるにやといへり。紀文を熟讀するに。地理上さもおもはれず。且又浦神とはいかなる神にか。さまで威靈恩頼ある神の。傳はらぬもいふかし。但前輩の言ふ所なれば。併せて存すと云り○浦神。釋紀神名帳曰。佐渡國羽茂郡度津神社。大目神社。兼方按之。禹武邑者羽茂郡也。浦神若此度津神社歟とあり。此神は三才圖會に。今日渡海神社。所祭五十猛神也とあり。一宮記にも五十猛神とあり。地名考云。度津地詳ならず。度津神社は。今羽茂郡飯岡村に在れども。往古より此にありしにはあらずといへは。社他所に鎮座せしものならん。名義を按するに。ワタツは渡の津にて。着船の地をいふなり。參河飯に渡津郷あり。今加賀。能石見郡に渡津村あり。三河田に渡通津村あり。みな水津と聞ゆ。然るに飯岡は。山間の一岡なり。この名負ふべき理なし。さて此神の事を。釋紀にかの浦神にかけて。兼方按之。禹武邑者羽茂郡也。浦神若此度津神社歟といへり。集解通證。みな之に従へり。本社祭神五十猛神にして。嚴忌といふにも合へは。此社は古かの瀬河

浦にありしものなるへし。後飯岡村に遷坐し。さて後其地にて移轉せしと見ゆ。之に因て思へは。瀬河浦は。昔津濟の地なりしか故に。度津といひ。かの肅慎の夷人等も此に着しとみゆと云り○嚴忌を。イナハヤシと云は。稜威速の義なり。續紀宣命に。宇治方夜伎ともあり。同じ義なり。いちはやしと云詞。物語等にもあまたみえたり。また舊訓に。イツクシクイミテとも訓り。嚴重に忌み玉ふなり。

六年乙丑

六年春二月。遣膳臣巴提便。使于百濟。夏五月。百濟遣奈卒其悽。奈卒用歌多。施德次酒等。上表。秋九月。百濟遣中部護德菩提等。使于任那。贈吳財於日本府臣及諸旱岐。各有差。是月。百濟造丈六佛像。製願文。曰。蓋聞。造丈六佛。功德甚大。今敬造。以此功德。願天皇獲勝善之德。天皇所用彌移居國。俱蒙福祐。又願普天之下。一切衆生。皆蒙解脫。故造之矣。

遣膳臣巴提便使于百濟。天書曰。六年春二月。百濟請授兵於日本。自是前。新羅高麗共攻百濟任那。連年。故帝遣兵救二國。數度。於是今月。詔膳臣巴提使。遣百濟云々とありて。此臣を遣はし。由明かなり。按に提にヌの音あること。提字典杜奚切。又市之切。又是支切。常支切。とあり。テイ。シ。ジの音

あり。されはシを通音にスとも云しなりけり。菩提の梵語はボジと訓むを正しとす。さて天書には巴提使とありて。ハスシと訓り。荷田翁も、假當と云り。今定かたし〇其悽。本に悽を悽に作る。秘閣本に悽に作る。旁注音綾とあり。七年紀に奈卒已連に作れり〇用歌多。秘閣本釋紀に歌を奇に作る〇吳財。いかなるものにか詳ならず。假名本に。くれのたからと訓り。京極本に吳を美に作れり。それもいか〇丈六佛像。通證に引る觀佛三昧經曰。釋迦牟尼佛身長丈六。圓光七尺云云。今按。保登介即浮屠家也。鬪岡齋筆塵曰。浮屠即佛陀之轉音とあり。浮屠はさもありぬへけれども。介を家なりとはいかふなり。他に義あるべし。觀佛名義集。佛陀大論云。秦言音知過去未來現在衆生。數有常等一切諸法。菩提樹下了了覺知。故名佛陀云々。祖庭事苑。浮屠梵語佛陀。或云浮圖。或云浮都。或云浮馱。浸淫。皆五天語。今並譯爲覺。道士三破論云。秦經本云。浮屠羅什改爲佛云々。かれば佛字にホトケの義はあらねど。浮圖の音を以て。をよみたるなり。〇甚大。訓オキロは奥なり。幽深の義なり。易に探願索隱。疏に。願謂幽深難見とあり。ロは辭なり。萬葉二十に。曾伎太久毛於藝呂奈伎可毛。己伎婆久母由多氣伎可母とあり。奈伎は物をつよく云辭なり〇勝善。本に勝を膳に作る。今中臣本考本集解本傍書等に據る〇彌移居國は。官家なり。このこと神功紀に出〇一切の訓。サナカラと謂に同じ。有の盡と云か如し〇解脱の訓。ヤスラカは。義を以て訓るなり。

冬十一月。膳臣巴提便還。自百濟言。臣被遣使。妻子相逐去。行至百濟濱。日晩停宿。小兒忽亡。不知所之。其夜大雪。天曉始求。有虎

連跡。臣乃帶刀。擐甲。尋至巖岫。拔刀曰。敬受絲綸。劬勞陸海。櫛

風沐雨。藉草班荊者。爲愛其子。令紹父業也。惟汝威神。

愛子一也。今夜兒亡。追蹤覓至。不畏亡命。欲報故來。既而其虎進

前。開口欲噬。巴提便忽申左手。執其虎舌。右手刺殺。剝取皮還。

百濟濱の本注は。地名にあらぬよしをことわれるか。但しは注は擐入にもあるへし〇虎。倭名抄虎。和名止良。通證に。或曰。楚人謂虎爲於菟。見左傳。於發聲也。倭語亦猶楚語。良語助也と云り〇絲綸。禮緇衣。王言如絲。其出如綸とあり〇櫛風。字鏡梳加之良介豆留。萬十八。安佐禰我美。可伎母氣頭良受〇沐の訓は。頭を洗ふ事なり。是をゆするとよめるは。今ゆすくと云辭も是也と。和訓栞に云り。源氏にゆするのなこり。御ゆるるまわりなどあり。河海抄に沐を填たり。花鳥餘情に。泔器を由須流都岐と訓り。新撰字鏡に潘字柏字糝字などをよめり。考へし〇藉。本に籍に作る。今改め正せり〇威神。萬葉十六。韓國乃。虎云神乎。生取爾。八頭取持來〇一を。ヒトクセト訓。セはサの誤なるへし。一種の義なるへし〇執其虎舌。延喜六年覺宴。得巴提便。藤原朝臣忠房。多禮母古能。加奈之幾止支波。美遠須天天。東羅乃之多支留。那毛多智奴部之〇右手刺殺。通證曰。神名式。武藏國多摩郡有虎栢神社。蓋祭膳臣巴提便。故爲號也とあり。

是歲高麗大亂。被誅殺者衆。

百濟本記云。十二月甲午。高麗國細群與龜群戰于官門。伐鼓戰鬪。細群敗不。解兵三日。盡捕誅細群子孫。戊戌。狗鵝香岡上王也。

是歲高麗大亂云々。東國通鑑に。高句麗安原王十五年。陽原王元年春三月。高句麗實延堯。號爲安原王。太子平成立とある。即今年なり。この陽原王と云るは。高麗二十四代の王なり。○細群龜群は。當時の諺にして。其部の名に呼し所謂そありけん。○官門。中臣文考本。官を宮に作る。訓に據るに宮字の方なるへし。○狗鵝香岡上王。狗は豹の略字。こゝにては即高麗を指せり。さて釋紀秘訓に引るには。狗國香岡上王とありて。鵝字なし。中臣本考本も同じ。然るに釋紀三條西本には國字なく。また鵝字もなし。さらば狗香岡上王か。詳ならず。然るに高麗好太王碑には。十七世孫國岡土廣開土境平安好大王と云か見えたり。國字も誤とも云かたし。訓もさまたまにあれば。今。さて王をオリコケと訓るは。下文にも見えて韓語なり。王は安原王名號の事なるへけれど。かの好太王の玄孫にて。鵝香岡上の稱も由ある事なるへければ。因にかの好太王碑銘の事を。聊かこゝに云へし。其は昔政友かこの碑銘考に云。至二十七世孫。國岡土廣開土境平安好太王。十七世は。大朱留王より數へしなり。されど三國史記に記せる趣にては。瑠璃明王大朱留王より好太王まで。十八代十二世にて。十七世には合はず。史記は蓋し父子兄弟の叙次に。誤りあるものならん。國岡土廣開土境平安好太王は。下に

此の王の名を記すもの三所ありて。何れも平安の二字を略き。一所は開の字より上の開けて。詳ならねど。他の兩所は。ともに國岡上とあれば。此處に國岡土といへる。土は恐らくは上の誤ならん。欽明紀の註に。百濟本記を引きて。十二月戊戌。狗鵝香岡上王薨也。と記したるは。韓史にいへる安原王好太王の玄孫の事なれど。鵝香岡上の稱は。此に聊か由あり。好太王は。姓氏錄に難波連。高麗國好太王之後也といふ者。よく合へり。さて此の國岡上廣開土境平安好太王は。諡號の類にして。名をば談徳と云しにや。朝鮮史略に。故國壤王伊連堯。太子談徳立。是爲廣開土王。と見えたり。韓史は信し難き事多ければ。疑なきに非ず。資治通鑑に。東晉隆安四年。高句麗王安事。燕禮慢とあり。安は好太王に當れど。他に證なければ。是も亦決し難し。暫く疑を記して。後の考を待つ。通鑑紀二十五年の註に。百濟本記云。大歲辛亥三月。高麗王王安事薨。高祖も玄孫も同名なるは疑はしければ。通鑑は蓋し誤ならん。二九登祚。十八にて王位を襲きたるに。三十有九晏駕とあれば。位にあること二十二年にて。韓史にいへるに差ふことなし。永樂大王は。年號もて稱ひしなりと云り。合せ見るへし。

七年丙寅  
七年春正月甲辰朔丙午。百濟使人中部奈卒已連等罷歸。仍賜以良馬七十匹。船一十隻。夏六月壬申朔癸未。百濟遣中部奈卒掠葉禮等。獻調。秋七月。倭國今來郡言。於五年春。川原民直宮登樓。聘望。乃見良駒。

紀伊國漁者負ニハヘテ。睨影高鳴。輕超ニ母脊。就而買取。襲養兼年。及壯鴻驚龍ニ。翦ニ別輩越群。服御隨心。馳驟合度。超渡大内丘之壑。十八丈焉。川原民直宮。檜隈邑人也。

丙午は三日○己連は。上に出たる其懐なり○一十隻。隻本に雙に作る。今中臣本。通證引一本。考本釋紀等に依る○癸未は十二日なり○掠葉禮。考云。掠手篇も木篇もケイの音なし。京字なりと云り。考へし○今來郡は。高市郡の舊名なりしこと。雄略紀に已に云り○川原民直宮。川原は大和志に。高市郡川原邑屬邑一とあり。民直は。續紀文武紀二年。民忌寸比良夫下。考證云。民忌寸。姓氏錄不載。案寶龜三年四月紀云。坂上大忌寸苅田麻呂言。以檜前忌寸。任大和國高市郡司。元由者。先祖阿智使主。輕島豐明宮馭字天皇御世。率二十七縣人夫。歸化。詔賜高市郡檜前村。而居焉。凡高市郡内者。檜前忌寸及十七縣人夫。滿地而居。他姓者十而一二焉。是以天平元年十一月十五日。從五位上民忌寸袁志比中。其所由云云。又延曆四年六月紀云。詔坂上。内藏。平田。大藏。文。調。文部。谷。民。佐太。山口等忌寸十一姓。賜姓宿禰。依此。民忌寸坂上大忌寸同祖。所謂倭漢直者也。欽明紀云。川原民直檜隈邑人。天武紀民直大火。本書作民忌寸大火。亦可證。又案。姓氏錄神別有民直。蕃別有民首及民使首。皆自別姓也。と云れたるにて明らかなり。但し東大寺正倉院文書に。聖武帝御世に。出雲人民臣馬女と云るあり。これは神別にて。禮日命の裔なるへし。さて注に。宮名下に考本也字あり。

補ふへし○注紀伊國漁者負ニ贊草馬之子也。集解に。紀伊以下十二字。原爲注。蓋轉寫者。偶或脫字。因補爲ニ小書耳。と云ひて。大字に本文と爲たり。まことに然るへし。草馬は通證に。倭名抄牝馬一名驛馬。上音草。和名米萬。今按俗稱驛驛。是也とあり。集解に。爾雅釋畜曰。馬屬牝曰駘。郭璞曰。草馬名。淮南子脩務訓曰。夫馬之爲草駒之時。跳躍揚蹶。高誘曰。馬五尺以下爲駒。放在草中。故曰草駒。魏志杜畿傳曰。畜特牛草馬。下逮雞豚犬豕。ともあり○睨影高鳴。文選緒白馬賦曰。睨影高鳴。將超中折。善曰。相馬經曰。馬有睨影而視者。翰曰。睨視也。馬有視影高鳴者。良馬也。超走也○母脊。竟宴歌集本契冲本。脊を肩に作る○襲養兼年。通證に。出緒白馬賦序。注襲受。隱私也○鴻驚龍翦。別輩越群。又云。出緒白馬賦。とあり。驚を古くアカキとも。又ハヤクとも訓るを思ふに。もしくは驚字の誤にはあらぬにや○服御隨心。馳驟合度。又云。出緒白馬賦序。とあり。馳驟をウクツクと訓るは。倭訓栞に。日本紀文選等に馳驟をよみ。新撰字鏡に。蹶ハヤクまた謂をよめり。又驛をうくつき馬とよみたりとあり。或人云。ウゴツクは動つて。俗にうろつくといふに同じ。○大内丘。持統紀檜隈大内陵。諸陵式在大和國高市郡。○十八丈。延喜六年竟宴歌。三善朝臣清行。斗都惠阿末理。夜都惠遠胡遊流。多津能胡麻。幾美須佐米然婆。於伊婆傳奴弊志。天書曰。七年秋七月。倭國今來郡民直氏宮。得地龍一獻とあり。本に地を虺とあるは誤なり。今は一本による。

是歲高麗大亂。凡鬪死者二千餘人。百濟本記云。高麗以正月丙午立中夫人子爲王。年八歲。伯王有三夫人。正夫人無子。中夫人生子。其男氏危群也。小夫人生子。其男氏細群也。及伯王疾。細群危群各欲立其夫人之子。故細群死者二千餘人也。

二千餘人。本に人字脱たり。今考本に據る○注中夫人子。訓中をクと訓む。シクのシを脱せるなり。この事既に云り。集解にケと訓る。夫人オリク。崇峻紀も同じ。釋紀にはワリク。また本の傍に。子トモと訓む。下訓皆同じ。釋紀も同じ。○注伯王。伯を古訓にはコマと訓。本傍コクコ。またコク。釋紀にコケ。上のを。釋紀にコマコク。コクツリ。また古。王をオリコケ。又ワリと訓む。杜氏通典に。百濟王號於羅瑕。夏言王也。王妻號於陸。夏言妃也とあるは。高麗も百濟も同言にや○注正夫人。正訓マカリ。釋も同じ○注世子。マカリトモ。釋も同じ。但し子をヨモとよむり。○注小夫人。釋紀に小をシムト訓。音信とあり。さて右中夫人以下の訓讀は。みな韓語なり。

八年夏四月。百濟遣前部德卒眞慕宣文、奈卒歌麻等。乞救軍。仍貢下部。東城子言。代德卒汶休麻那。

德卒は第四等の官なり○奈卒歌麻。奈卒第六等なり。秘閣本歌を奇に作る。中臣本哥に作る○貢下部

八年丁卯

東城子言。十五年下に。貢德卒東城子莫古。代前番奈卒東城子言とあり。こゝは位を脱せしなるへし。さて十五年の處にも。乞救兵。仍とあれば。御軍を乞ふに附て。質などに貢る心はへもあるへし。

九年戊辰

九年春正月癸巳朔乙未。百濟使人前部德率眞慕宣文等請罷。因詔曰。所乞救軍。必當遣救。宜速報。王。夏四月壬戌朔甲子。百濟遣中部扞率掠葉禮等。奏曰。德率宣文等奉勅至臣蕃。曰。所乞救兵。應時遣送。祇承恩詔。嘉慶無限。然馬津城之役。正月辛丑。高麗率衆圍馬津城。虜謂之曰。由安羅國與日本府。招來勸罰。以事准況。寔當相似。然二廻欲審其言。遣召。而並不來。故深勞念。伏願可畏天皇。西蕃皆稱日本天皇。先爲勸當。暫停所乞救兵。待臣遣報。

乙未は三日○眞慕。本に眞を直に作る。今上文及集解に依る○甲子は三日○扞卒掠葉禮。扞を本に扞に作る。今釋紀に據る。通證云。隋書百濟傳。扞率五品。今按。上文作奈卒。蓋叙一等也とあり。考本には奈卒とあり。掠を同本に京に作る。この事上に云り○馬津城。百濟城なり。文獻備考云。馬津縣本孤山。按今禮山縣。百濟時號鳥山。斯羅改名孤山とあり。今全羅道礪山縣あり。東國通鑑百濟始祖八

年條に。築馬首城堅瓶山柵。○注正月辛丑云々の上。集解に。十五年の例に據て。一本云の三字を補ひたり。さもあるへし。さて辛丑は九日なり。○注園馬津城。集解云。按東國通鑑。梁大清二年。新羅眞聖王二年。高句麗陽原王四年。百濟聖王二十六年春正月。高麗侵百濟。麗王以滅兵六千。攻漢北獨山城。百濟王請救於新羅王。命將軍朱珍。領甲兵二千。救之。朱珍至獨山城下。與高句麗兵戰。大破之。殺獲甚多。即當是年。馬津城之役蓋此とあり。○勸野。野は訓に依に。討の誤なるへし。○以事准況塞當相似。此までの文意は。考云。日本より救兵を下さるとあるは。慶なれども。高麗の者を生虜にして。様子をさけは。安羅國日本府と。高麗の後楯になりて。百濟の城を圍ませたり。いかさまもあるへしとなりと云り。○三廻。集解に此二字言遣の間に移しおけり。○待臣遣報。或説に遺恐誤。按還字乎と云り。さることなり。

詔曰。式聞呈奏。爰覲所憂。日本府與安羅。不救隣難。亦朕所疾也。又復密使于高麗者。不可信也。朕命。即自遣之。不命何容可得。願王開襟緩帶。恬然自安。勿深疑懼。宜共任那。依前勅。戮力俱防北敵。各守所封。朕當遣送若干人。充實安羅逃亡空地。六月辛酉朔壬戌。遣

使詔于百濟曰。德率宣文取歸以後。當復何如。消息何如。朕聞。汝國爲狗賊所害。宜共任那。勵策同謀。如前防距。閏七月庚申朔辛未。百濟使人掠葉禮等罷歸。冬十月。遣二百七十人於百濟。助築城於得爾辛。

何容。與清云。容は疑爲誤と云り。○北敵は。高麗を云。已に上に云り。○安羅逃亡。安羅は此時いまた滅亡ひねは。加羅の誤にはあらさるか。○壬戌。二日なり。○取歸。考本に取を等に作れり。或説に罷誤かと云へり。○消息何如。四字通證集解ともに。衍ならむと云り。さもあるへし。○勸策。本に倒せり。今通證集解説に據て正せり。○辛未。十二日なり。○使人掠葉禮。掠を考に京に作れり。○得爾辛。詳ならず。馬津城の邊か。また百濟の都は。此時熊津州なれば。其邊にてもあるへし。いつれにても北敵の防の爲めなり。

十年己巳

十年夏六月乙酉朔辛卯。將德久貴。固德馬次文等。請罷歸。因詔曰。延那斯麻都。陰私遣使高麗者。朕當遣問虛實。所乞軍者。依願停之。

辛卯は七日なり。○將德。隋書。七品紫帶とあり。京極本には將を施に作る。○久貴。本に久を文に作る。今釋紀及下文に據る。釋秘訓に久音戸恩反とあれば。文は誤なるへし。水本云。按文貴等來。先是无



所見。蓋缺文とあり○固德。隋書に九品赤帶とあり。○馬次文。下文には次を進に作る。此二人來朝せし事。上に見えず○延那斯。上文には延を移とあり。延にもやの音あるへし。又通音か。

十一年庚午

十一年春二月辛巳朔庚寅。遣使詔于百濟。百濟本記云。三月十二日辛酉。日本使人阿比多。卒三舟。來至都下。曰。朕依將德久貴。固德馬進文等。所上表意。一一教示。如視掌中。思欲具情。冀將盡抱。大市頭歸後。如常無異。今但欲審報辭。故遣使之。又復朕聞。奈率馬武是王之股肱臣也。納上傳下。甚協王心。而為王佐。若欲國家無事。長作官家。永奉天皇。宜以馬武為大使。遣朝而已。重詔曰。朕聞。北敵強暴。故賜矢三十具。庶防一處。

庚寅。十日なり○注三舟。中臣本舟下升字あり。秘閣本并に作る。共に詳ならず○將德久貴。釋紀に施德久首とあり。本の傍書にも貴一首とあり○馬進文。上文進を次に作る。釋紀には馬字なし。進文とのみあり○思欲具情。情は疑くは狀にはあらざるか○冀將盡抱。抱正韻曰懷也とあり。通證に。將をハタと訓るは非なるへし○大市頭。未詳。考云。大市頭人の名なるへし。前には見えねど。先に日本へ來たるものなるへしと云り。されど韓人の名とも聞えず。通證には。是嘗使于百濟者也。姓氏錄

曰。大市首。出自任那國主都怒賀阿羅斯止とあり。これによらは。皇國人の彼に至れるか。歸れるを云へるにか。用明紀に二年の下にも大市造。孝德紀大化二年に大市連見えたり。なほ考へし。さらは頭造の誤などや。通證集解等に。これを謎語として解たるは。強言なるへければ。今はとらす○復朕聞。本に朕字なし。今秘閣本に據る○奈率馬武。この百濟人の事。前に見えず○大使をオミと訓るは。韓語なるへし。使主をオミと訓むこと。此に思合すへし○矢三十具。類聚三代格に。以矢五十隻為一具。延喜兵庫式。以五十隻為一具とあり。齊明紀に弓矢二具とよめり。

夏四月庚辰朔。在百濟。日本王人方欲還之。百濟本記云。四月一日。百濟王聖明謂王人曰。任那之事。奉勅堅守。延那斯麻都之事。問與不問。唯從勅之。因獻高麗奴六口。別贈王人奴一口。皆改爾林卒皮久斤下部施德灼干那等。獻狗虜十口。所禽奴也。乙未。百濟遣中部奈

日本王人。前の百濟本記には。日本使人とあり。莊六年公羊傳に。王人于突敵。衛王人者何。微者也。とあるか如く。實に實際の人にあらず。一使人を云訓なるへし。○延那斯。本に延を近に誤る。今前文及釋紀に據る○爾林所禽。本に禽を會に誤る。今考本に據る。爾林の役は。顯宗紀三年に。紀生磐宿禰跨據任那。交通高麗。將西王三韓。整脩官府。自稱神聖。用任那左魯那

奇。他甲肖等計。殺百濟適莫爾解於爾林。爾林。高麗地也。築帶山城。距守東道。斷運糧津。令軍飢困。百濟王大怒。遣領軍云々。趣于帶山。攻。於是生磐宿禰進軍逆擊云々。兵盡力竭。知事不濟。自任那歸。由是百濟國。殺佐魯那奇他甲肖等三百餘人。とある時の戦に。嘗て禽にしたる高麗の奴人なるへし。○乙未。十六日なり。○皮久斤。久をコムと訓るは上と同じ。假名日本紀には。久を文に作れり。○施德。本に施を他に作る。今は秘閣本中臣本考本釋紀に據る。

十二年春三月以麥種一千斛。賜百濟王。是歲百濟聖明王親率衆及二國兵。二國謂新羅任那也。往伐高麗。獲漢城之地。又進軍討平壤。凡六郡之地。遂復故地。

十二年辛未

一千斛。斛をサカと云は。もとよりなれど。ツカと訓るは誤なり。秘閣本にはセカとあり。或人云。麥種元より彼地になかりしにはあらし。前年熟らざりしにやと云り。○率衆及二國兵云々。東國通鑑。新羅眞興王十二年。高句麗陽原王七年。百濟聖王二十九年。新羅命柒夫等八將軍。與百濟兵。侵高麗。百濟先攻平壤。破之。居柒夫等。乘勝取竹以外高峴以內十郡。○漢城之地。東國通鑑曰。百濟始祖十四年秋七月。百濟築城漢江西北。分漢城民。通證引武備志。懲忿錄等。漢城府屬京畿道。兩朝平壤錄曰。朝鮮凡八道。京畿道即漢陽城居中とあり。○平壤。通證引唐書註。平壤高麗所都。平壤錄曰。平安道。

即平壤城。潛確類書平安道。本朝鮮故地也。括地志曰。高麗治平壤城。本漢樂浪郡王險城。即古朝鮮也。あり。東國通鑑に。高麗東川王三年。高句麗王率兵三萬。侵玄菟郡。虜獲八千人。移于平壤とあり。近古豐臣大閣の朝鮮征の時。小西行長宗義智等の此處に屯せしこと。徵忿錄等の諸書に見えたり。○遂復故地。本に遂字脱したり。今中臣本水戸本及釋紀等に據る。故地を復したるは。雄略天皇紀二十年に。高麗の爲に取られたる故地を。復したるものと見えたり。六郡は何々の地なるか。詳に知かたし。

# 日本書紀通釋卷之五十

飯田武郷謹撰

欽明天皇  
十三年壬申

十三年夏四月。箭田珠勝大兄皇子薨。五月戊辰朔乙亥。百濟加羅安羅。遣中部德卒木劬今敦。河內部阿斯比多等。奏曰。高麗與新羅。通和并勢。謀滅臣國。與任那。故謹求請救兵。先攻不意。軍之多少。隨天皇勅詔。日。今百濟王安羅王加羅王。與日本府臣等。俱遣使奏狀聞訖。亦宜共任那。并心一力。猶尙若茲。必蒙上天擁護之福。亦賴可畏天皇之靈也。冬十月。百濟聖明王更名聖王。遣西部姬氏達率怒喇斯致契等。獻釋迦佛金銅像一軀。幡蓋若干。經論若干卷。別表讚流。通禮拜功德云。是法於諸法中。最爲殊勝。難解難入。周公孔子。尙不能知。此法能生無量無邊福德果報。乃至成辨無上菩提。譬如人懷隨意寶。逐

所須用。盡依情。此妙法寶亦復然。祈願依情。無所乏。且夫遠自天竺。爰泊三韓。依教奉持。無不尊敬。由是百濟王臣明謹遣陪臣怒喇斯致契。奉傳帝國流通。畿內果佛所說我法東流。

箭田珠勝大兄皇子。元年紀に出○乙亥。八日なり○河內部。通證に蓋日本府河內直之部屬とあり○高麗與新羅通和。去年は新羅と任那ととも高麗を討しか。今年はまた新羅と高麗と和を通したりなり○猶尙若茲。通證に承上而言。舊讀非と云れたるか如し。集解も誤なり○冬十月。大日本史に此下に云。一代要記有二十三日辛酉五字とあり○西部姬氏。通證に。西部乃所掌之部曲。猶上文上中下部之類。姬氏乃所出之本姓。猶上文物部許勢之類とあり。四部は元高麗の部族より出たり。唐書東夷傳高麗條に。部。即清奴部也。後漢書東夷傳高句麗條に。有五族。有清奴部。絶奴部云々。注に。一日内。分五部。曰内部。即漢桂婁部也云々。號前部。曰四部。一名黃部云々。五日四部。一名右部。即清奴部也とあり。姬氏は怒喇斯致契の本姓なり。○達率怒喇斯致契。一人の名なり。杜氏通典。百濟條に。達率二品。統兵。以達率德率扞率爲之とあり○釋迦佛金銅像一軀。翻譯名義集。釋迦牟尼。曰撫華。此云能仁寂默。寂默故不住。生死能仁故不住。涅槃。悲智兼運立。此嘉稱とあり。通證云。延喜齋宮式忌詞。佛稱中子。蓋謂心也。倭名鈔木具部。心讀奈賀古。金銅謂下和金與銅鑄造者。元興寺丈六佛像光銘。東大寺佛前板文等。可以見。宋史曰。欽明天皇即位十一年壬申歲。始傳佛法於百濟國。當此土梁承聖元年。今按一當作三。正統記曰。自後漢明帝永平十年。至此壬申歲。經四百八十

八年。とあり○幡蓋。倭名抄調度部。幡蓋。波多岐沼加散○經論。通證云。佛經祖論劉勰曰。聖哲辨訓曰。經。述。經叙。理曰。論。○是法於諸法中云々。以下四十二字は。金光明最勝王經如來壽量品の語を取捨したるにて。彼經には是金光明最勝王經。於諸經中。最爲殊勝。難解難入。聲聞獨覺所不能知。此經生無量無邊福德果報。乃至成辨無上菩提云云○無上菩提。又云。見楞嚴經。名義集釋曰。菩提佛道名也○譬如人懷隨意寶云云。楞嚴經曰。譬如有人。於自衣中。繫如意珠。所願從心。致大饒富○天竺。後漢西域傳曰。天竺國一名身毒國。在三月氏東南數千里○陪臣の訓。イヤツコとあるに依て。記傳云。陪臣を伊夜都古と訓るも。臣の臣なる故に。又臣の意なり。伊夜は重なる意なりと云へれど。他に見えず。信かたし。一訓にハヘノマチキミとあるに依るに。この訓もハイノヤツコとありしが。ハを省きしものなるへし。ハへは本より誤なれば。ハイと云ふかた叶へり。されはこれは字音のまゝに。古くも稱しものと見えたり○怒喇斯致契。本に契字脱たり。秘閣本に據る○帝國の字。はじめて見えたり。わか大日本を古く然云りしにこそ○果佛所説我法東流。本に説を記に作る。今本書傍書一本作説とあるに據る。其所説と云は。大般若經難聞功德品に。甚深般若波羅密多。我滅度已後時後分後五百歲。於東北方向。當廣流布とあり。決疑編曰。日域當天竺三東北方。此土流布良有以也と云り。或人説に。此上恐くは推古天皇後に追作たるものを。百濟王の頂の上表ならん。ゆくりなく撰入たる社説しけれ。此表中に是法於云云とあるを見へし。抑最勝王經は。唐に翻譯せし物にて。此天皇の十三年は。梁元帝と云國王の承聖元年に當り。唐の初代より數へても。六十五六年前なるをや。是を以て此上表と云物の。偽作なることを知へしと云り。

是日。天皇聞。已。歡喜踊。躍。詔。使者云。朕從昔來。未曾得聞。如是微妙之法。然朕不自決。乃歷問群臣曰。西蕃獻佛相貌端嚴。全未曾看。可禮以不。蘇我大臣稻目宿禰奏曰。西蕃諸國一皆禮之。豊秋日本豈獨背也。物部大連尾輿。中臣連鎌子。同奏曰。我國家之王。天下者。恒以天地社稷百八十神。春夏秋冬祭拜爲事。方今改拜蕃神。恐致國神之怒。

踊躍の訓。神功紀歡喜踊躍の下に云○微妙之法。法華經方便品偈曰。甚深微妙法。難見難可了○未曾看。秘閣本看を有に作れり○豊秋日本。神代紀に大日本豊秋津洲とあり。津は助辭なり。さて此稱は。瑞穂の稻より。たゞへ云りしこと。已に神代紀に云り。瑞穂より出しならんには。豊秋とは云べからず。アキツのツは助辭ならねばなり。この事も既に云り。○中臣連鎌子。此人は中臣氏家系十七世に。鎌大夫公と云るあり。また賀麻大夫公とも書。眞人大連の子なり。これなり。さて子は此家の通稱の如くなりて世々にあり。鎌足大連も亦鎌子と云り。其外にも方子。國子。御食子等あり○同奏。考本に同を固に作れり○春夏秋冬祭拜爲事。神祇令また貞觀義式延喜式などに。四時の祭式委く載たり。これみな上古よりの祭拜の御事なり。其心はへなどの事は。上にも次々云へれば。こゝには載

せす。まことに此皇國の大道なり。事は政事にて。神を祭るを政體の大本とするよしなり。孝徳紀。先以祭鎮神祇云云。○恐致國神之怒。蕃神。靈異記に隣國客神と書き。客神は佛なりと注せり。蕃神は胡神と云も同じ。カラカミと訓へし。同じく神にはあれども。天地社稷の神には坐さす。みな夷狄の神にて。我國に由ある神にあらず。これを祀れば幸福を得るなどの事はさておきて。却りて國神の怒に觸れて。災異などありし。其尤けきものをいはず。通證にも引る光仁紀に。神祇官言。伊勢大神宮寺。先爲有祟。遷建他處。而今近神部。其祟未止。除飯野郡之外。移造便地。三代實錄に。飛鳥岡本天皇。建十市郡百濟大寺。子部大神在寺近側。舍怨屢燒堂塔。とある類。世々の史に甚多し。これみな此人等の奏言を。蔑にしたまへるか故なり。これらのこと凡庸の學者などの知ることにあらず。

天皇曰。宜付情願人稻目宿禰。試令禮拜。大臣跪受而忻悅。安置小墾田家。勲脩出世業爲因。淨捨向原家爲寺。於後國行疫氣。民致天殘。久而愈多。不能治療。物部大連尾輿。中臣連鎌子。同奏曰。昔日不須臣計。致斯病死。今不遠而復。必當有慶。宜早投棄。勲求後福。天皇曰。依奏。有司乃以佛像。流棄難波堀江。復縱火於伽藍。燒燼更

無餘。於是天無風雲。忽災大殿。

試禮令拜と詔へるは。さはかり天皇の歡喜踊躍し玉へる御心の止めかたく。迷はせ玉へるか故なり。これ已に蕃神を渡しもて來し。禍神の荒ひの。天皇の御心に浸染せしなり。○小墾田家。大和國高市郡なり。小墾田の地の事已に云り。○爲因。上に汝則無資とあり。○淨捨向原家爲寺。通證に。淨捨當訓須互。晉書何充傳。捨宅安尼とあるはさることなり。淨は清淨の義にはあらず。訓はいかゞなり。今も佛に施すものを淨財と云も。捨財と云に同きか如し。さて向原ムタハラも。ムカハラとも訓り。今定めかたきか如くなれど。扶桑略記に。榎木原家半久木也とあるハラなるへし。これも高市郡なり。此寺向原寺又廣嚴寺と云。豐浦村傍にあり。豐浦寺とも云。大和志云。廣嚴寺在高市郡豐浦村。舊作向原。又名豐浦寺。傍有井曰櫻井。又名榎葉井。とあり。さて此寺後に再興ありて。建興寺と改めけるなるへし。その故は。三代實錄四十九。元慶六年八月官符。散位從五位下宗岳朝臣木村等言。建興寺。是先祖大臣宗我稻目宿禰之所建也。本緣記。文具存灼然云々。彼等推古天皇之舊宮也。元號豐浦。故爲寺名云々。建興寺之建出自御願云々とあり。狩谷氏曰。欽明十三年紀云。稻目宿禰云々。淨捨向原家爲寺者是也。豐浦寺之名。舒明前紀始見。今其遺跡有廣嚴寺。宜合考光仁紀卷首考證とあり。法隆寺記に引元興寺緣起曰。櫻井寺今豐浦寺也。とあるに。櫻井寺とも云しなり。なほこの寺の事は樂史に云り。此寺養老年中に。寧樂京に遷して。また豐浦寺と云り。さて此寺こそ。皇國にて佛像を安置せる始にて。佛像經論の參渡れるも。

年を始とする事なれども。其は表立ての事にて。實はこれより三十年以前。即繼體天皇の十六年に。漢土の梁武帝の普通三年の事にて。即彼國より。司馬達等この人の事。下にあり。と云もの參渡來て。大和國高市郡坂田原と云所に草堂を構へ。佛像を安置して住居けるか。信する者なく。異域の神を祭るとて。みな鄙しめたりと云ること。元亨釋書に出たるを既に引り。さて寺を互羅と云は韓語也。今朝鮮語寺曰泥留。羅與留通と通證に云り。次の伽藍をもしかよめり○行疫氣。この疫氣は疱瘡なり。是を疱瘡なりと云る確證は。日本記略長徳四年七月條に。今月天下衆庶煩<sub>レ</sub>疱瘡。世號<sub>ニ</sub>之稻目瘡。又號<sub>ニ</sub>赤疱瘡。天下無<sub>レ</sub>免<sub>ニ</sub>此病<sub>一</sub>之者。とあるをみるへし○難波堀江は。仁徳紀に詳に云り。然るに古來より。此の難波堀江は。其にはあらて。大和國高市郡豐浦寺東。飛鳥川西に在。と云る説あり。この事や<sub>レ</sub>舊きものにも見えたり。正和二年の奥書ある。平氏傳雜勘文抄法隆寺古文書なりにもこの事見えて。難波堀江事。凡云<sub>ニ</sub>難波<sub>一</sub>者。以<sub>ニ</sub>攝州<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>其本所<sub>一</sub>。而今云<sub>ニ</sub>□□堀江<sub>一</sub>者。以<sub>ニ</sub>豐浦寺東佛門東。飛鳥河西入江。擬<sub>レ</sub>彼云<sub>ニ</sub>□□<sub>一</sub>也。昔ハ以外<sub>ニ</sub>廣博<sub>一</sub>而。相似海浦。故或云<sub>ニ</sub>豐浦<sub>一</sub>。云<sub>ニ</sub>難波江<sub>一</sub>也。但用<sub>ニ</sub>人力<sub>一</sub>故加<sub>ニ</sub>堀字<sub>一</sub>也。然<sub>ニ</sub>根本得<sub>ニ</sub>難波之號<sub>一</sub>事。非<sub>レ</sub>無<sub>ニ</sub>其本據<sub>一</sub>。又或傳説。難波堀江者。妙安寺南。地是也。夫池與<sub>レ</sub>江其體異也。とあり。其他の文書にも見えたれば。むげに俗説とも云かたし。不審き事なり。大和めぐりの記云。豐浦寺の東。飛鳥川の西。難波堀江也。是守屋大臣佛像をやまして玉ひし所也。今かすかにのこる。玉林抄にも見えたりと云り。なほよく考へし○伽藍。通證に。梵語題目僧伽藍摩。或云。僧伽羅摩此云<sub>ニ</sub>衆園<sub>一</sub>。園者生植之所。佛弟子居<sub>レ</sub>之。取<sub>レ</sub>生植道本衆果<sub>一</sub>之義。とあり。釋氏要覽には。招提。菩提。菩薩。皆古佛號。故寺謂<sub>ニ</sub>

之招提。或名<sub>ニ</sub>伽藍<sub>一</sub>。或名<sub>ニ</sub>道場<sub>一</sub>。其實一也。とあり○灾大殿。神怒懼るへきはさることなから。こゝは考云。岡田正利云。稻目の徒。佛法をつふされたるをあたに。放火したるならむ。この説さもあるへしと云り。

是歲。百濟棄<sub>ニ</sub>漢城<sub>一</sub>與<sub>ニ</sub>平壤<sub>一</sub>。新羅因<sub>レ</sub>此入居<sub>ニ</sub>漢城<sub>一</sub>。今新羅之牛頭方。尼彌方也。地名未詳

棄漢城與平壤。昨歲伐<sub>ニ</sub>高麗<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>獲。蓋爲<sub>ニ</sub>新羅<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>略。故棄之。と集解に云り。考にも。これは聖明王去年高麗の持分となりたるを討て。取還したるなり。棄とは守悪き故。後には捨てたるかと云り○牛頭方。尼彌方。天書云。新羅與<sub>ニ</sub>高麗<sub>一</sub>共討<sub>ニ</sub>百濟<sub>一</sub>。取<sub>ニ</sub>漢城平壤<sub>一</sub>。以<sub>ニ</sub>漢城<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>牛頭<sub>一</sub>。以<sub>ニ</sub>平壤<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>彌方<sub>一</sub>也。とあり。文獻備考云。帶方郡帶方之地。蓋在<sub>ニ</sub>四海之治<sub>一</sub>。而南與<sub>ニ</sub>百濟<sub>一</sub>隣比。東與<sub>ニ</sub>牛頭城<sub>一</sub>。北與<sub>ニ</sub>平壤<sub>一</sub>。不<sub>ニ</sub>相遠<sub>一</sub>云々。東國通鑑に。百濟始祖十八年條。王欲<sub>レ</sub>襲<sub>ニ</sub>樂浪牛頭山城<sub>一</sub>。とあるに依れば。百濟の始祖の頃より略して己か有と爲し居たりし地なり○注地名未詳の四字。後人の増入なるへし。

十四年癸酉  
四年春正月甲子朔乙亥。百濟遣<sub>ニ</sub>上部德卒科野次酒。扞<sub>ニ</sub>禮塞敦等<sub>一</sub>。乞<sub>ニ</sub>軍兵<sub>一</sub>。戊寅。百濟使人中部德率木劬今敦。河内部阿斯比多等罷歸。

乙亥。十二日なり。○科野次酒。上の五年紀に。施徳八品なり。今徳卒と斯那奴次酒とあると同人なるへきよし。既に云り。繼體紀十年。百濟遣。灼莫古將軍日本斯那奴阿比多。云云來朝。と云事見えたり。科野はシナヌと訓。氏族なり。既云。次に河内部某とある例の如し。○扞率禮塞敦。扞率第五等官なり。本に扞を杆とあり。今釋紀に據る。此二人十一月壬に歸れるよし。下文にみゆ。○戊寅。十五日なり。○中部徳率。本に徳を扞に作る。今考本釋紀及前文十三に據る。

夏五月壬戌朔戊辰。河内國言。泉郡茅淳海中有梵音。震響若雷聲。光彩晃曜。如日色。天皇心異之。遣溝邊直此但曰直不書名。蓋是傳寫誤失矣。入海求訪。是月。溝邊直入海。果見樟木浮海玲瓏。遂取而獻。天皇命畫工造佛像二軀。今吉野寺放光樟像也。

壬戌朔戊辰。本には壬戌朔二字を脱したり。さて辰下朔字あり。今考本に據る。集解にも。據層考。改として補へり。戊辰は七日なり。○河内國言。この事靈異記には。敏達天皇の御時の事と爲り。下に引く。○泉郡茅淳のことは。神武紀に委云り。さて此海は。和泉志に海亘四郡とあるか如し。○梵音は歌讚の聲なり。通證云。韻會。梵華言清淨。正言。寂靜。佛經曰。梵音海潮音。勝彼世間音。梁高僧傳曰。天竺方俗。凡是歌詠法言。皆稱爲唄。至於此土。詠經則稱爲轉讀。歌讚則號爲梵音。法苑珠林曰。魏陳思王曹子建。遊魚山。忽

聞空中梵天之音。清響哀婉。其聲動心。獨聽良久。乃摹其節。寫爲梵唄。製音傳爲後式。梵音技爲始也。とあり。○溝邊直。釋紀古本に。ミツノヘノ直と訓しはさることなり。溝をウナテと訓るより。この二字をウナテと通證集解に訓るは。甚しき非なり。されど溝邊直はものに見えず。いかなる氏人も知かたし。靈異記には大部屋栖野古連と爲り。次に全文を引く。○注此但曰直云々十五字は。後人の挿入なるへし。集解に削れり。○是月。考本に月を日に作れり。秘閣本時に作る。○畫工。職員令に。畫工司正一人。掌繪事彩色判司事。畫師四人。畫部六十人。とあり。この畫工は。佛工を指て云るなり。○吉野寺。天書曰。十四年夏五月。神樟樹浮茅淳海。河内守獻之。初造佛像。遂於毗蘇山立寺。帝王編年記曰。吉野寺注現光寺。又名檜曹寺。大和志曰。吉野郡池田莊比曾村。とあり。さて元亨釋書には。比蘇寺を聖徳太子の建立なりとし。靈異記には。敏達天皇の御世の事としたり。其文ここに擧ぐ。大花上大部屋栖野古連公者。紀伊國名草郡宇治大伴連等先祖也。天年澄情。尊三重寶。案本記曰。敏達天皇之代。和泉國海中。有樂器之音聲。如笛箏琴篋篋等聲。或如雷振動。晝鳴夜耀。指東而流。大部屋栖古連公開奏。天皇嘿然不信。更奏。皇后聞之。詔連公曰。汝往看之。奉詔往看。實如聞。有當霹靂之楠矣。還上奏之。泊乎高脚濱。今屋栖伏願應。造佛像焉。皇后詔。宜依所願也。連公奉詔大喜。告島大臣。以傳詔令。大臣々喜請。傾直水田。雕造佛并三軀像。居于豐浦堂。以諸大仰敬。然物部弓削守屋大連公。奏皇后曰。凡佛像不可置國內。猶逼棄退。皇后聞之。詔屋栖古連公曰。疾隱此佛像。連公奉

詔。使<sub>レ</sub>水田直藏<sub>ヲ</sub>乎稻中<sub>ニ</sub>矣。弓削大連公放<sub>レ</sub>火燒<sub>ニ</sub>道場。探<sub>ニ</sub>佛像。流<sub>ニ</sub>難破堀江。然徵<sub>ニ</sub>於屋栖古<sub>一</sub>言。今國家起<sub>レ</sub>災者。依<sub>ニ</sub>隣國客神像置<sub>ニ</sub>於己國內。可<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>斯客神像。速急棄<sub>ニ</sub>流乎豐國<sub>一</sub>也。客神者。佛也。固辭不<sub>レ</sub>出焉。弓削大連任<sub>レ</sub>心。起<sub>レ</sub>逆謀。傾窺<sub>レ</sub>便。爰天且嫌<sub>レ</sub>之。地復慄<sub>レ</sub>之。當<sub>ニ</sub>用明天皇世<sub>一</sub>而挫<sub>ニ</sub>弓削大連<sub>一</sub>。則出<sub>ニ</sub>佛像<sub>一</sub>以傳<sub>ニ</sub>後世<sub>一</sub>。今世安<sub>ニ</sub>置吉野比蘇寺<sub>一</sub>。而放<sub>レ</sub>光阿彌陀之像。是也。とあり。なほこの人の事を次に記して云く。皇后癸丑年春正月。即<sub>ニ</sub>位小墾田宮<sub>一</sub>。二十六年御<sub>レ</sub>宇矣。元年夏四月庚午朔己卯。立<sub>ニ</sub>厩戸皇子<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>皇太子<sub>一</sub>。即以<sub>ニ</sub>屋栖古連公<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>太子之肺脯侍者<sub>一</sub>。天皇代十三年乙丑。夏五月庚寅朔戊午。勅<sub>ニ</sub>屋栖古連公<sub>一</sub>曰。汝之功者長遠不<sub>レ</sub>忘。賜<sub>ニ</sub>大信位<sub>一</sub>。十七年己巳春二月。皇太子詔<sub>ニ</sub>連公<sub>一</sub>。而遣<sub>ニ</sub>播磨國楫保郡内二百七十丁五段餘<sub>一</sub>。水田之司<sub>一</sub>也。二十九年辛巳春二月。皇太子薨<sub>ニ</sub>于斑鳩室<sub>一</sub>。屋栖古連公爲<sub>レ</sub>其欲<sub>ニ</sub>之出家<sub>一</sub>。天皇不<sub>レ</sub>聽<sub>ニ</sub>。四八年甲申夏四月。有<sub>ニ</sub>一大僧<sub>一</sub>。執<sub>レ</sub>斧敲<sub>レ</sub>父。連公見<sub>レ</sub>之。直奏<sub>ニ</sub>之曰。僧尼檢校。應<sub>ニ</sub>中置<sub>一</sub>。止僧七人。尼五百七十九人<sub>一</sub>也。以<sub>ニ</sub>觀勒僧<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>大僧正<sub>一</sub>。以<sub>ニ</sub>大信大伴屋栖古連公<sub>一</sub>與<sub>ニ</sub>鞍部德積<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>僧都<sub>一</sub>。二十二年乙酉冬十二月八日。連公居<sub>ニ</sub>住難波<sub>一</sub>。而卒<sub>ニ</sub>之。屍有<sub>レ</sub>異而觀<sub>ニ</sub>矣。天皇勅<sub>ニ</sub>之。七日使<sub>ニ</sub>留詠<sub>一</sub>於彼忠。還<sub>ニ</sub>之三日。乃蘇<sub>ニ</sub>甦<sub>一</sub>矣。略。孝德天皇世。六年庚戌秋九月。賜<sub>ニ</sub>大花上位<sub>一</sub>也。春秋九十有餘而卒矣。とあり。

六月。遣<sub>ニ</sub>内臣<sub>一</sub>。名<sub>ニ</sub>使<sub>一</sub>於百濟。仍賜<sub>ニ</sub>良馬二疋<sub>一</sub>。同船二隻。弓五十張。箭五十具。勅云。所請軍者。隨<sub>ニ</sub>王所須<sub>一</sub>。別勅<sub>ニ</sub>醫博士<sub>一</sub>。易博士<sub>一</sub>。曆博士<sub>一</sub>等。宜<sub>ニ</sub>依

番<sub>ニ</sub>上下<sub>一</sub>。今上件色人。正當<sub>ニ</sub>相代年月<sub>一</sub>。宜<sub>ニ</sub>付<sub>一</sub>還使<sub>ニ</sub>相代<sub>一</sub>。又卜書<sub>ニ</sub>曆本<sub>一</sub>。種種藥物可<sub>ニ</sub>上送<sub>一</sub>。

内臣。姓氏錄大和皇別。内臣。孝元天皇太子彦太忍信命之後也。とあり。氏人此後見えす。類聚符宣抄に。村上帝時右馬史生内則忠と云人みゆ。是族なるへし。さて此内は武内宿禰の後なるへし。此宿禰を内臣と云しこと。神功紀に見ゆ。大日本史氏族志に。味内宿禰の後と爲たれと。別に證なし。されど祖先の名を氏とせしこと。なほいかゞあらん。定めては云かたし。○注闕名。本に闕を闕に誤れり。今正せり。○同船。倭名抄。游艇和名波之布禰。皇極紀同船母慮紀舟。とあり。通證に。船船見<sub>ニ</sub>舊唐書<sub>一</sub>。集韻船音同。或作<sub>レ</sub>艘。博雅船舟名。とあり。按に船は舟名とあれば。こゝなる同船とは同じからざるへし。此は小艇なれば。他木を交へす。一木を以て造りしより。同とは云しならん。そは皇極紀に大船與<sub>ニ</sub>同船<sub>一</sub>とあるにても。小艇なることは論なし。其を波斯布禰と云るは。和名抄に。艇乎夫禰。遊艇波之夫禰。小船也。釋名云。一二人所<sub>レ</sub>乘也。とあるか如く。橋舟また走舟の義にて。早く廻りて事を辨ふる由の名。母慮紀舟と訓むは。諸來船と云事にて。小艇は繫合<sub>ニ</sub>て榜行者<sub>一</sub>なる故に。今も一艘の舟の事を片船と云ひ。其繫合の船をは。諸船と船人とも云由なり。即其意なり。この事は。神代紀野野野手船の下に云ると合せ考へし。○二隻を。古訓にフタフナと訓るはさる言なり。又本にハタフサと訓るに依れば。二十隻の十を脱せしものにもあるへし。フサはフナの誤なり。○



醫博士。令に典藥寮。醫博士一人。掌諸藥方脈經。教授醫生等。醫生四十人。掌學諸醫療云々。六典に。習本草甲乙脈經とあるは。後の御定めなり。此時の博士のさまは。韓國にての事なれば。いかに有けん知かたし。さて此後に。持統紀五年十二月。賜醫博士務大參德自珍云々。銀人二十兩とあり。さてまた養老六年十一月に。女醫博士を置。○易博士の事。令に見えぬ。これは後に陰陽博士にて兼たり。其はれし事。禮記に見えたり。此は因に云のみ。○陰陽寮。陰陽博士一人。掌教陰陽生等とありて。孝謙紀に。陰陽生者。周易。新撰陰陽書。黃帝金匱五行大義。とあれはなり。さて漢籍には。後漢書蘇竟傳曰。平帝世。竟以明易。爲博士講書祭酒。注王莽置六經祭酒。秩上卿。每經各一人。竟爲講尙書祭酒とあり。さて明年易博士施德王道良を貢りて。代れるよし見えたり。○曆博士。令に。陰陽寮に曆博士一人。掌造曆。及教曆生等。曆生十人。掌習曆とあり。さて漢土にては。隋に曆博士一人を置り。唐も之に因て。六典に保章正一人。注至隋置曆博士一人。正九品上とあり。曆優名抄古與美。名義日讀なり。日を加と云は來經にて。年月日時の經行くことなり。かくてこの博士も。明年曆博士固德王保孫と云ものを貢りて代らしめたり。○依番上下。通證に。通鑑唐紀。得兵十三萬。分隸諸衛。更番上下。兵農之分自。此始矣。集覽。番更遞也。書叙指南。番直曰。第番上下。詳見選叙令義解とあり。○今上件色人。本に今を令に作る。釋紀に據る。通證に件與行訓意同。色人。色役之人也とあり。○宜下付還使相代。又云。上件色人。嚮來在。我國。故云爾。舊讀恐非と云り。○卜書曆本。種種藥物。上件の博士に係れる物等なり。曆本は通證に。唐書曆志。有曆本

議。本與様訓義同。古今集云。千歲乃多米之。俗語事。手本。物乃多米之相通とあり。○可上送。本に上を付とあり。今釋紀。政事要略。年中行事に引く處。文に據る。

秋七月辛酉朔甲子。幸樟勾宮。蘇我大臣稻目宿禰奉勅。遣王辰爾。數錄船賦。即以王辰爾爲船長。因賜姓爲船史。今船連之先也。

甲子。四日なり。○樟勾宮。通證に疑高市郡とあり。勾金橋宮。高市郡にあり。○王辰爾。王は姓。辰爾は名なり。此人は百濟貴須王の世に。應神天皇の勅を奉して。其宗族を擇採し。其孫辰孫王を遣して入朝せしめき。其長子太阿郎王。仁德天皇の御世に近侍となれり。太阿郎王の子亥陽君。亥陽君の子午定君は。即此辰爾の父なり。この事。次なる船史の下に委く云を見へし。○數錄船賦。船賦は傍注に船御調とあるか如し。考云。錄船賦は。異國より貢を船に積み來る。それを目錄を改め。帳簿に記すなりと云り。○船長は。船司なり。令に主船司。正一人。掌公私舟楫及舟具事とある。其正の職掌などこれなり。住吉神代記に。船木等本記云。氣息帶長足姬皇后時。誅伏熊襲二國。并新羅國。征時。大田々命神。神田々命。今云船木連の祖なり。伐取己所領山岑樹。而造三船三艘。本造船者。乘皇后并大神臣八腹。次中腹赤造船者。乘日御子等。次末造船。御子等。并大田々命。神田々命共乘。渡征。即有大幸。祈禱天神地祇。在驗大幸。還上賜。其御船今奉齋祀武内宿禰。志麻社。靜火社。伊達社三前神也。中。自卷向玉木宮大

八島知食御世。至穴戸豐浦日向宮大八島食知氣帶長足姬比古御世二世者。意彌那多命乃兒。意富彌多足尼任奉。津守宿禰於是船司津司任賜。又處々船木連被賜。但波國。粟國。伊勢國。針間國。周芳國。右五箇國。從爾時。船津官名負任奉云々。と云事あり。此古傳に據て考れば。諸國の津司船司は。津守氏船木氏の世々掌る職にして。他氏の知る所ならず。然るに欽明天皇十四年に。王辰爾を爲三船長。因賜レ姓爲三船史。今船連之先也とあるより。船木連も職掌を失ひしなりけり。主船司の攝津にありしも。住吉大神の御縁に因れることにて。右の古傳にて明らか知られたり。○船史。船連。姓氏錄右京諸蕃百濟に。船連。菅野朝臣同祖。太阿郎王三世孫。智仁君之後也。攝津諸蕃。船連。菅野朝臣同祖。太阿郎王之後也。右京菅野朝臣。百濟國都墓王十世孫。貴首王之後也とあり。右の智仁君と云る。即王辰爾の事なり。藤原幹云。按智仁即辰爾也。古音。こくに辰爾の傳を委く云へし。續紀四十。延曆九年七月。左中辨正五位上兼木工頭百濟王仁貞云々。人名圖書頭從五位上兼東宮學士左兵衛佐伊豫守津連眞道等上表言。眞道等本系出自百濟國貴須王。中輕島豐明朝御宇應神天皇。命上毛野氏遠祖荒田別。使於百濟。搜聘有識者。國主貴須王。恭奉使旨。擇採宗族。遣其孫辰孫王。一名智宗王。隨使入朝。天皇嘉焉。特加寵命。以爲皇太子之師。矣。於是始傳書籍。大闡儒風。文教之興誠在於此。難波高津朝御宇仁德天皇。以辰孫王長子太阿郎王。爲近侍。船氏王後首墓誌と云ものに。太阿郎を刀羅古に作れり。同人太阿郎王子。亥陽君子。午定君。午定君生三男。長子味沙。仲子辰爾。季麻呂。姓氏錄。午定君。體君。味沙作。辰爾。辰爾作。知仁。麻呂作。辰爾。從此而別始爲三姓。各因所職。以命氏焉。葛井。船。津連等即此也。此より以下の文。は敏達紀に引り。とあるにて。

出自いと詳かなり。さてこの辰爾の子に。那沛ナヘ故首と云るあり。其子に王後首ワケコノと云るありて。この人は敏達の御世に生れ。推古舒明二朝に仕へ。官位大仁を賜はりしこと。船氏の墓誌に見えて。其文を上武部云。伯は。船首とあれば。王後首の末なるへし。に引けり。天武紀十二年十月。船史賜姓曰連とあり。氏は文武紀に従五位下船首佐伯あり。武部云。伯は。船首とあれば。王後首の末なるへし。清和紀に河内丹比郡人左兵衛權大志船連貞直あり。外記日記に。朱雀帝時。左少史船實平。船濟江あり。一條帝時。史生船隆範あり。後冷泉帝時に。陪膳采女船朝臣滋子あり。さて又御船氏と云も。此氏より出たり。それは右に引る船連貞直。清和帝御世に御船宿禰姓を賜はりしこと。三代實錄に見えたればなり。御船氏人も其後の史にも見えたり。なほこの氏の事下にも云へし。

八月辛卯朔丁酉。百濟遣上部奈率科野新羅。下部固德汶休帶山等。上表曰。去年臣等同議遣内臣德率次酒。任那大夫等。奏海表諸彌移居之事。伏待恩詔。如春草之仰甘雨也。今年忽聞新羅與貊國通謀。云百濟與任那頻詣日本。意謂是乞軍兵。伐我國。歟。事若實者。國之敗亡。可企踵而待。庶先日本軍兵未發之間。伐取安羅。絕日本路。其謀若是。臣等聞茲深懷危懼。即遣疾使輕舟。馳表以聞。伏願天慈速

遣前軍後軍相續來救。逮于秋節。以固海表。彌移居也。若遲晚者。噬臍無及矣。所遣軍衆。來到臣國。衣糧之費。臣當充給。來到任那。亦復如是。若不堪給。臣必助充。令無乏少。別的臣敬受天勅。來撫臣蕃。夙夜乾乾。勤修庶務。由是海表諸蕃皆稱其善。謂當萬歲。肅清海表。不幸云亡。深用追痛。今任那之事。誰可修治。伏願天慈。速遣其代。以鎮任那。又復海表諸國。甚乏弓馬。自古迄今。受之天皇。以禦強敵。伏願天慈。多賜弓馬。

丁酉。七日なり。○奈率科野新羅。此科野もシナヌと訓て族とすへく。さて新羅は名なり。○下部固德汝休帶山。此二人の名を讀誤りて。新羅下部と下へ屬し。通證に新羅舉所出也と云れたるはいかゞ。上部下部いづれも百濟の部なるをや。固德本に因德とあるは誤なり。今中臣本考本等に據る。○内臣德率次酒。内臣はナイシンと訓て。これは百濟の内政を司る臣のよしなり。東國通鑑に百濟古爾王二十七年。置内臣佐平。掌宣納事とあり。上に見えたる内臣。名とは異なり。德率四等の官なり。さてこの人は。上に上部德率科野次酒とある人なり。これを考に。内臣德率とは前の紀臣奈率の類なり。

日本の人か。韓婦を娶て生たるゆゑ。日本の姓をつくなり。と云れたるは誤なるへし。科野と云るは。日本の氏族を付たるなれば。また内臣とは云へくもあらねはなり。○庶先日本軍兵。本に軍字なし。今秘閣本中臣本に據る。○其謀若是。通證に句絶とあるよろし。集解に本の訓に依りたるは非なり。○別別表奏なり。前にも此文法あり。○的臣云云。的臣は前に任那へ遣されし人なり。されど此人。先には善からざる者の如く云るに。こゝにかくあるは。前後齟齬せり。いかゞ。○乾々。通證に。伊登那牟痛嘗也。猶足嘗之訓。與營作義通とあるはいかゞ。イトナムは暇無むなり。ナムは其狀を云辭なり。○速遣。本に速を連に作る。今秘閣本。中臣本。通證に引る一本等に依る。○弓馬は。弓と馬なり。軍防令に。便弓馬者爲騎兵。義解謂弓步射也。馬騎射也。とあるとは異なり。

冬十月庚寅朔己酉。百濟王子餘昌。明王子威。悉發國中兵。向高麗國。築百合野塞。眠食軍士。是夕觀覽。鉅野墳腴。平原瀾迤。人跡罕見。犬聲蔑聞。俄而儻忽之際。聞鼓吹之聲。餘昌乃大驚。打鼓相應。通夜固守。凌晨起見。曠野之中。覆如青山。旌旗充滿。會明有着頸鎧者一騎。挿鏡者一二騎。珥豹尾者一騎。并五騎。連轡到來。問曰。少兒等言。

於吾野中客人有在。何得不迎禮也。今欲早知。與吾可以禮問。答者姓名年位。餘昌對曰。姓是同姓。位是扞率。年二十九矣。百濟反問。亦如前法。而對答焉。遂乃立標而合戰。於是百濟以鉞。刺墮高麗勇士於馬。斬首。仍刺舉頭於鉞末。還入示衆。高麗軍將憤怒益甚。是時百濟歡叫之聲。可裂天地。復其偏將。打鼓疾鬪。追却高麗王於東聖山上。

己酉。二十日なり。○王子餘昌。姓扶餘名昌なるか故に。餘昌と云る也。北史齊世祖紀。以百濟王餘昌。爲使持節侍中驃騎大將軍。とあり。さて注に威徳の威を盛に作るは誤なり。今本書傍書及考本に據る。○百合野。未詳。○眠食は。猶寢食也とあるか如く。休ませ食事をさせたる也。下にも見ゆ。○鉞野。オホノと訓へし。鉞巨と同じ。二字文選上林賦に出つ。○墳腴。本に腴を腹に誤。今秘閣本考本集解に依る。通證に。字俱母知。倭名鈔羅鼠和名字古呂毛知。養勳訓無久女久。義皆通。腹當作腴。沃地也。藉田賦沃野墳腴。とあり。○彌逆。本に逆を迨に誤。今中臣本等に依る。○俄而儻忽之際。本に忽を忽に誤。今正せり。さて通證に而爾之訛とあるは。中々にわろし。本のまゝにてあるへし。○凌晨。本に凌を凌に作る。

誤なり。今集解に依て改む。○頸鏡。本に頸を頸に誤。今改む。この物のことは釋紀に。兼方案之。頸鏡者俗號。與多利加氣之物也。とあれど。いかなる製なるものと云ふこと知られず。軍器考九。頸鏡といふもの。右の物は其制異なりしにや。欽明天皇御時。頸鏡といふもの。見えしを。與多利加氣といふ物なり。釋日本紀に注せり。とあり。説文に鉞銀頸鏡也とあるに依るに。後に云志己呂と云ものならむか。また此二字をアカノヘノカフト。またアカヘノヨロヒ釋にミカヘノヨロヒとありと訓るも。いかなる義にか詳ならず。なほよくたつぬへし。○挿鏡。釋紀に。説文曰。鏡小鉞也。軍法卒長執鏡とあり。通證に。楊升菴曰。鉞鏡今銅鏡也とあり。玉篇に。鏡女交切。似鈴無舌などありて。この物も詳ならず。圖書式佛器中に。鏡四口と見え。裏背令義解に。鏡者如鈴。無舌有柄。執鳴之とあり。和名抄に鉞一名鏡。俗云常。古とあるは。鉞鏡の字音なり。俗にトヲと云物なるへし。近衛式には。征鼓をトヲと訓り。或人云。訓クスミ。クスビ。とあるも。義さたかならず。さて挿とは。考に腰に附る事ならんと云るも。いかゝあらん。また本注に鏡字未詳の四字あり。釋紀に。私記曰。愚按此四字之注。早可削棄。委解見別私記。とあれど。別私記といふものなければ知かたし。かにかくに摺入なるへし。○珥豹尾者。本に豹を狗に作り。今釋紀考本集解に依る。釋紀に説文曰似虎圍文とあり。さて豹尾を飾としたる事は。集解に云。北史勿吉國傳曰。男子衣猪衣裳。頭挿虎豹尾。按舊唐書高麗傳。高麗人頭著折風。士人挿二鳥羽。蓋挿豹尾爲飾者也。とあるにて知られたり。さて豹の訓通證に。私記曰。豹奈賀豆可美。荒井氏謂。中津神也。陰陽家有二豹尾神。其位在二中宮。陶弘景説豹則尾爲貴とあり。なほよく考へし。珥は字典に珥挿也とあり。さて推古紀に。大仁小仁用二豹尾とあれは。其處に云へし。○早知與の下。秘閣本中臣本德字あれど行な

るへし○可以禮問答者姓名年位。義通えかたし。活字本に答を客に作る。されど下文に對答の字あれは。なほ答字にてもあるへきか。されど。さても義通かたきに據て。猶按ふるに。者は其字の誤にあらざるか。可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>禮問<sub>ニ</sub>答其姓名年位<sub>一</sub>などありしにや。なほよく考へし○姓是同姓。百濟と高麗とは同族なること既に云り。通典に後魏時百濟王上表曰。臣與<sub>ニ</sub>高麗<sub>一</sub>先出<sub>ニ</sub>夫餘<sub>一</sub>とあり○位是扞率。本に扞を杆に作る。今考本集解に據る。扞率は五品と通典にあり。今餘昌此位にてありしなり○反問亦如前法。これ彼國古代戰陣の禮なるへし。同下に秘閣本反字あるは行なるへし。○立標。字典に標旌旗也とも。清異錄。梁祖建<sub>ニ</sub>火龍標<sub>一</sub>ともあるか如く。こゝも互に旌旗を立て。合戦しなるへし。考にも。標とは備の標幟なり。今云馬印の類なるへしと云り○偏將は。百濟偏師の將なり○高麗王。通鑑に王親將。上文所謂着<sub>ニ</sub>頸鎧<sub>一</sub>者一騎。蓋是也。と云り。さる言なるへし○東聖山。未詳。

十五年甲戌

十五年春正月戊子朔甲午。立<sub>ニ</sub>皇子淳中倉太珠敷尊<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>皇太子<sub>一</sub>。丙申。百濟遣<sub>ニ</sub>中部木劬施德文次<sub>一</sub>。前部施德曰佐分屋等於筑紫。諮<sub>ニ</sub>内臣佐伯連等<sub>一</sub>曰。德率次酒。扞率塞敦等。以<sub>ニ</sub>去年閏月四日<sub>一</sub>到來云。臣等<sub>内臣也。</sub>謂<sub>ニ</sub>以<sub>一</sub>今年正月到。如此<sub>レ</sub>導而未審。來不也。又軍數幾何。願聞<sub>ニ</sub>若干<sub>一</sub>。預<sub>ニ</sub>治<sub>一</sub>

營壁<sub>一</sub>。別<sub>ニ</sub>諮<sub>一</sub>方<sub>ニ</sub>奉<sub>一</sub>聞<sub>ニ</sub>可畏天皇之詔<sub>一</sub>。來<sub>ニ</sub>詔筑紫<sub>一</sub>。看<sub>ニ</sub>送賜軍<sub>一</sub>。聞<sub>ニ</sub>之歡喜無<sub>一</sub>能<sub>ニ</sub>比者<sub>一</sub>。此年之役。甚危<sub>ニ</sub>於前<sub>一</sub>。願<sub>ニ</sub>遣<sub>一</sub>賜軍<sub>ニ</sub>使<sub>一</sub>。逮<sub>ニ</sub>正月<sub>一</sub>。於是<sub>ニ</sub>内臣奉<sub>一</sub>勅<sub>ニ</sub>而答報<sub>一</sub>曰。即<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>遣<sub>一</sub>助軍數一千。馬一百疋。船四十隻。

甲午。七日なり○丙申。九日なり○中部木劬。木劬繼體紀に出。姓なり○曰佐分屋。曰佐は族。分屋は名なり。姓氏錄蕃別に。百濟に木曰佐。調曰佐。漢に下曰佐。また百濟に上曰佐などあり。これらも族に依て其姓を玉へるものなるへし。其は茨田勝。後部高など云る姓の類なるへし。さてまた譯をも曰佐と云は。此族の譯語の業を仕へしによれるにやあらん。それより轉りては。姓氏錄に山城皇別に。曰佐。紀朝臣同祖。武内宿禰之後とあるなどは。皇國人の譯語の業爲しより負るなり。また國造本紀に。大隅國造。纏向日代朝御世。治<sub>コトムケレ</sub>平隼人同祖初小。仁德帝代者。伏布爲<sub>ニ</sub>曰佐<sub>一</sub>賜<sub>ニ</sub>國造<sub>一</sub>とある曰佐は長<sub>コト</sub>て。譯語の方にはあらず○内臣。此内臣は。さきに遣<sub>ニ</sub>内臣<sub>一</sub>名<sub>一</sub>使<sub>ニ</sub>於百濟<sub>一</sub>とある其人なり○佐伯連。佐伯の事は上に往々云り。此氏は大伴氏同祖なり。天武紀十三年十二月。佐伯連賜<sub>レ</sub>姓曰<sub>ニ</sub>宿禰<sub>一</sub>とあり。通釋六十八卷。天武紀十三年十二月の注。參考すべし。姓氏錄左京に。佐伯宿禰。大伴宿禰同祖。道臣命七世孫。室屋大連公之後也とあり。此人も名を闕たり。さて此二人は。集解に。按<sub>ニ</sub>救<sub>一</sub>百濟<sub>ニ</sub>軍將出在<sub>一</sub>筑紫<sub>ニ</sub>と云り○去年閏月は。十一月なり。閏。時日記にうるふ。月。古今六帖にもあり。○到來云は。日本より歸り來りて云なり。さて此人等は。去年正月に。百濟よ

り軍兵を乞に來れる事。上に見えたり○臣等を。本にオノラと訓るは。オミラの誤なり。古訓にマチキミタチとよめる方よろし○奉聞。本に聞奉に作る。今考本に依る。本に聞を上につけて。方聞と訓るは誤なり○來詣。本に來を未に誤る。今中臣本考本集解等に依る○令遣。遣を本に遣に作るは誤なり。今秘閣本通證集解等に依る。次の遣も同じ。

二月。百濟遣下部扞率將軍三貴。上部奈率物部鳥等。乞救兵。仍貢德率東城子莫古。代前番奈率東城子言。五經博士王柳貴。代固德馬丁安。僧曇惠等九人。代僧道深等七人。別奉勅。貢易博士施德王道良。曆博士固德王保孫。醫博士奈率王有悽陀。採藥師施德潘量豐。固德丁有陀。樂人施德三斤。季德己麻次。季德進奴。對德進陀。皆依請代之。三月丁亥朔。百濟使人中部木劬施德文次等罷歸。

遣下部扞率。遣を本に遣に作る。今秘閣本に據て改。考本の一本に扞を奈に作る○物部鳥。物部は紀臣奈率などの類にて。日本人の種族なり。鳥を釋紀古本秘閣等に音革とあるは。もと革なるか鳥に誤れるか。或説に鳥は鳥にて。鶴の偏を略さしものなりと云り。いかゞあらん○東城子言は。八年四月に貢

せし人なり○王有悽陀。本に悽を悽に作る。今釋紀に據る○採藥師。職員令。典藥寮。藥園師二人。掌下知藥性色目。種採藥園諸草。及教藥園生。義解謂。寒温爲性。形狀爲色。名稱爲目などあり○樂人。令雅樂寮。百濟樂師四人。樂生二十人。さて採藥師も樂人も。此度はじめて渡るよしなれども。皆依請代之とあるを見れば。此より前にも貢せしものなるへし○施德三斤。本に施を脱せり。今中臣本考本釋紀に依る○季德は。隋書百濟傳に。季德十品青帶とあり○對德。又云。對德十一品黃帶とあり。

夏五月丙戌朔戊子。内臣率舟師詣于百濟。冬十二月。百濟遣下部扞率汶斯干奴。上表曰。百濟王臣明。及在安羅諸倭臣等。任那諸國旱岐等奏。以斯羅無道。不畏天皇。與狛同心。欲殘滅海北彌移居。臣等共議。遣有至臣等。仰乞軍士。征伐斯羅。而天皇遣有至臣。帥軍以六月。至來。臣等深用歡喜。以十二月九日。遣攻新羅。臣先遣東方領物部莫哥武連。領其方軍士。攻函山城。有至臣所將來民。筑紫物部莫奇委沙奇。能射火箭。蒙天皇威靈。以月九日酉時。焚城拔之。故遣單使馳船奏聞。

戊子。三日なり。○下部扞率。考本一本に扞を奈に作る。○及在安羅。通證に。及字與ニ早岐等ニ應。舊讀非とあり。○斯羅。東國通鑑。新羅智證王四年條に。新羅始定ニ國號ニ云々。或稱ニ斯羅。或稱ニ斯盧。或稱ニ新羅とあり。梁書隋書にも見えたり。○海北彌移居。本に北を比に誤る。今正せり。さてこゝは海表と云か如し。たゞに北海の意のみにはあらず。○臣等。秘閣本明等とあり。臣下にありし字なるへし。○遣有至臣等。假名本に作ニ内臣と釋紀に見えたれと疑はし。上に見えたる内臣は。皇國の御使なり。遣ニ有至臣と云へきにあらず。また集解に。按十四年紀所載内臣。德卒次酒即此とあれども。上にも云る如く。内臣は百濟の職名なれば。ウチノオミと云へきよしなし。かにかくに疑はしきに就て按ふに。此五字は衍文にて。次文の天皇遣ニ有至臣の四字。こゝに紛れ入しものなるへし。本の左傍に圈點を施したるも。もとは撥入のなかりし本もありしによりて。印したるものと見えたり。○天皇遣有至臣。集解云。正月紀所載。内臣佐伯連即此とある。さることなり。上の衍文に因るに。臣下に等字脱たるものなるへし。○帥軍。本に帥を帥に誤。今正せり。○東方領は。百濟の東方領主なるへし。前に郡領と云事みえたり。○莫哥。秘閣本哥を奇に作る。○函山城。新羅の城なり。文献備考。慶尙道新羅冠山縣。本冠文縣。一云冠縣。又高思葛伊城。高麗聞慶郡。初爲ニ聞喜。顯宗入ニ尙州。本朝聞慶縣とある地なるへし。東國通鑑。新羅與ニ高麗通好。故百濟王怨之。親率ニ步騎。來攻ニ管山城とあり。應神紀に東韓者甘羅城云々と云こと見えたれど。それとは異なるへし。東韓は百濟の地なり。○筑紫物部。筑紫を釋紀秘訓に竹斯とあり。谷森善臣云。下

文にも竹斯とあれば。こゝも竹斯とある方正しきなるへし。此間の文は。百濟の奏狀を。其儘に取のせたるものなるへくおもはるればなり。と云り。さることなり。○物部莫奇委沙奇。舊事紀に筑紫聞物部。筑紫贊田物部あり。雄略紀に筑紫聞物部大斧手あり。莫奇委沙奇は。韓語に訛りしものと見えて。義詳ならず。○火箭。軍器考に。火箭は古よりありけんもしらす。國史に見えたることは。欽明紀十五年内臣をして。百濟を助けて新羅を伐たせ玉ひし時。筑紫物部莫奇委沙奇といふもの。よく火箭を射たりし。彼物部の姓名を。其國の文字の音をもてうつしたれば。我朝にしてはいかに云けん人なるをも。又其箭制もしられず。はるかに世をへたてよ。源義仲の法住寺殿を攻參らせし時。今井四郎兼平鳴鏑の中に火を入れて射たりしに。其矢御所の棟にたちたりけるか。折ふし風はけしく。火もえあかりて。官兵忽にやふれき。これはたゞ鳴鏑に入れて射たるなれば。異朝の火柘榴箭ケツキリヤクセンの類に似たれど。其比はいまた火藥など用る事はしれるにはあらず。今は銃砲の制に倣ひ。藥を用ゐて。或は箭飛て火もえ出るやうにも。或は多くの箭一度に飛去らんやうにもしたるものも出來ぬ。異朝にはそれらの制ことに多かりと云り。○月九日。中臣本に月上此字あり。然るへし。○單使は。神代に頓使とあると同じかるへし。副使のなきを云なり。

別奏。若但斯羅者。有至臣所將軍士亦可足矣。今狛與斯羅同心戮

力。難可成功。伏願速遣竹斯島上諸軍士。來助臣國。又助任那。則事可成。又奏。臣別遣軍士萬人。助任那。并以奏聞。今事方急。單船遺奏。但奉好錦一疋。氍毹一領。斧二百口。及所獲城民。男一。女五。輕薄追用。悚懼。

竹斯島。即筑紫洲なり。續紀に竹志。北史に竹斯國とあり。○島上。本に上をタテと訓るは。義解かたし。ウへとかホトリとか訓へし。○單船。本に單を草に作る。今中臣本。通證引一本。小寺本等に依る。即單使の船にて。副船等のなきなり。漢籍にも單船と云事見えたり。考本に早船とありて。ハヤフ子と訓れど。なほ單の方なるへし。○氍毹。中臣本釋紀に氍を毳に作れり。後漢西域傳に。天竺國有細布好氍毹。注埤蒼曰。毛席也とあり。釋紀私記曰。案假名本作織氍。氍玉篇云。之延切。毛爲席とあり。倭名抄調度部。坐臥具氍。野王案。氍。謂延反。毛席。然毛爲席也。毛。下總本讀作織。按說文。氍。氍毛也。孫氏依之。作織非是。職員令義解亦云。氍。又見。謂然毛爲氍。者上。釋名。氍。毛相着。然也。今俗毛氍。即非。非織成者。也。とあり。此說もさる言なれども。然るのみにあらず。織れるもあれば。織に作るも。頗に誤とも云かたし。名義もなほ織氍なるへし。さて阿理は於理と通へり。通證にも。古事記萬葉集等。有阿理岐奴。袖中抄云。織絹也と云り。萬葉古義云。欽明天カモとよみて。天武天皇紀の氍をオリカモとよめるにてさるへし。さて加毛をも皮なからにも用れば。織れるをオリカモと云るなり。既く袖中抄にも。ありさねは織。絹なりと云り。本居氏玉露問に。ありさねは鮮なる衣なり。アリとはあさやかなるを云と云り。いかちあらん

と云。さて一領をヒトキと訓るは。一匹なるへし。されど義は詳ならず。壬生忠見集。霧たちでもみちの木の木もかりたちて。のこれるは。伊久伎とか見む。是も綿幾匹と云か如くなれども。其伎はいかなる義とも知かたし。皇極紀に繡袍三領とも訓り。○追用。悚懼。考云。指上たれども。跡にて恐多きと云謙の辭なり。と云り。さてこれまで表文なり。通證に今按此下疑有脱簡と云り。

餘昌謀伐新羅。耆老諫曰。天未與。懼禍及。餘昌曰。老矣何怯也。我事大國。有何懼也。遂入新羅國。築久陀牟羅塞。其父明王憂慮。餘昌長苦行陣。久廢眠食。父慈多闕。子孝希成。乃自往迎。慰勞。新羅聞。明王親來。悉發國中兵。斷道擊破。是時新羅謂佐知村飼馬奴苦都。更名曰。苦都賤奴也。明王名主也。今使賤奴殺名主。冀傳後世。莫忘於口。已而苦都乃獲明王。再拜曰。請斬王首。明王對曰。王頭不合受。奴手。苦都曰。我國法違背所盟。雖曰國王。當受奴手。一本云。明王乘三。胡床。明王仰天。大息涕泣。許諾曰。寡人每念。常痛入骨髓。顧計不可苟活。乃延首受斬。苦都斬首而殺。堀坎而埋。一本云。新羅葬埋明王。頭骨。而以禮送。餘骨於百濟。今新羅王埋明王骨於北廳。



階下名此  
應日都堂。

老矣の上。者字ありしか脱たりしなるへし○大國。北史倭傳曰。新羅百濟皆以倭爲大國○久陀牟羅。未詳○慰勞。句絶なり。餘昌を慰勞ひしなり。本の訓は誤なり○村をスキリと訓は誤なるへし。假名本にスキノと訓るよろし。村をスキと云は韓語にて。處々に見えたり○已而。本に己卯に作るは誤なり。今は考本に。一本にかくありと云るに據る。前に月を記さずして。己卯と云へきよしなし。上に冬十二月とあるは。此段の事にはあらず。然るに。通證に二十七日とあるも杜撰なり○不合受は。通證に。宜訓于久陪加良須と云るよろし。中臣本。合を合に作るはよからず○違背所盟。通證に。嘗百濟與新羅結盟故云とあり○寡人每念常痛云々。これは新羅のをりく盟約に違背するを。痛憤しをるを云なり。さる無道なる國なれば。今道理を述たりとて。聞入るへきにあらずこの言なり○入骨髓。本に入を人に誤。今秘閣本中臣本考本に依る○願。本に願に作る。今集解に依る○注葬埋。本に埋を理に作る。今通證に引る一本考本等に依る。釋紀に葬を留に作るも誤なり○北廳。倭名抄四聲字苑云。廳延賓屋也。人衙也。和名萬豆利古止止乃。とあり。古訓にマツリコトヤとよめるもよろし。ヤは屋なり。殿と云に同じ○都堂。廳屋など云に同じかるへし。杜氏通典曰。唐龍朔二年。改尙書省爲中臺。神龍初。復爲尙書省都堂。などあり。倍此時の事を。東國通鑑に云。梁承聖三年。新羅眞興王十五

年。高勾麗陽原王十年。百濟聖王二十二年。百濟王明禮。帥兵侵新羅。軍主金武力擊殺之。先是百濟欲與新羅合兵。謀伐高勾麗。新羅王曰。國之興亡在天。若天未厭高勾麗。則我何敢望。乃通高勾麗。高勾麗感其言。與新羅通好。故百濟王怨之。親率步騎來攻管山城。軍主角于干德伊凌耽知等。逆戰失利。武力以所領新州兵赴戰。裨將高干都力。擊殺百濟王。諸軍乘勝大克之。斬佐平四人。士卒二萬九千六百匹馬無返者。百濟諡王曰聖。子昌立。又曰徐居正等按。聖王初立。能斷大事。國人稱聖。逮至末年。與新羅謀伐高勾麗。不得其志。背舊好。發忿兵。遂死鋒鏑。眞所謂一朝之忿亡其身者也。

餘昌遂見圍繞。欲出不得。士卒惶駭不知所圖。有能射人筑紫國造。進而彎弓占擬。射落新羅騎卒最勇壯者。發箭之利通所乘鞍前。後橋及其被甲領冑也。復續發箭如雨。彌屬不懈。射却圍軍。由是餘昌及諸將等得從間道逃歸。餘昌讚國造射却圍軍。尊而名曰鞍橋君。於是新羅將等具知百濟疲盡。遂欲謀滅無餘。有一將云。不可。日本天皇以任那事。屢責吾國。况復謀滅百濟官家。必招後患。

故止之。

惶駭。本に惶を遑に作る。今考本集解に依る。訓にアハテとあるは假字たかへり。アワテなり。萬葉古義云。阿和豆は。日本紀欽明紀に遑駭。遑字は惶の誤寫か。また雄略紀駭。惋。また漢籍文選に瞻などありて。みなおそれをのよく意ある時にいふ言にて。即字鏡に惶恐をよめるも。其意なるをや。俗言にアワテルと云も。さる意にこそあれ。唯さわきさほふどは。意味異なりと云り○筑紫國造。國造本紀。筑紫國造。志賀高穴穗朝御世。阿陪臣同祖。大彥命五世孫。田道命。定賜國造とあり。孝元紀に出○占擬。サシマカナヒの訓神武紀に云り。一の訓サシマチキは誤なり。招く意と見へからず○鞍前後橋。鞍橋の事は既に雄略紀九年に云り。訓は釋紀古本點に。マヘツクラホ子。シツクラホ子と訓るよろし。本の訓は誤あり。然るに通證に。釋點麻倍部久。及其被甲領胃。本の訓誤なり。及ヒソノ云々と訓へし。胃を本に會に誤れり。今中臣本考本に。一本胃とあるに據る。會とあるに依て。集解に左傳昭十一年傳曰。衣有綸帶。また通證に。遊川氏訓比伎阿波世と云るも非なり。みな胃の誤なりしことを知らざるより。さる説をたてたるなり。○彌屬。秘閣本。屬を屬に。中臣本に勵に作る。古訓にハケミテと訓るも。さる本によれるなり。されど本のまゝにてあるへし。屬を矢を差すことに云るは。字典に屬注也ともありて。酒を注ぐ事にも云るなどに同じ○注鞍橋此云矩羅賦。と云る義詳ならず。かゝる訓注あるに拘らず。本の一訓にクラホ子ノ君と訓るは。賦は誤か。定めかたし。考本には貳に

作れり。本に賦に作るは。本より誤なれば。今正せり。或人云。橋は柱などのチにて。鞍橋を射貫たるを讀たるなりと云り。此説によらは。鞍橋にクラホ子。クラチの兩名ありしものなるへし○謀滅無餘。謀滅二字こゝにては少しいかゝなり。古訓にハカリホロホシテとよめるは。字のまゝなれど。なほあるへし。次なるはよろし。こゝはもしくは。討字などの誤にはあらしか。

十六年乙亥

十六年春二月。百濟王子餘昌。遣王子惠。王子惠者。威德王之弟也。奏曰。聖明王爲賊見殺。十五年。爲新羅處殺。故今奏之。天皇聞而傷恨。迺遣使者。迎津慰問。於是許勢臣問王子惠曰。爲當欲留此間。爲當欲向本郷。惠答曰。依憑天皇之德。冀報考王之讎。若垂哀憐。多賜兵革。雪垢復讎。臣之願也。臣之去留。敢不唯命是從。俄而蘇我臣問訊曰。聖王妙達天道地理。名流四表八方。意謂永安寧。統領海西蕃國。千年萬歲奉事天皇。豈圖一旦眇然昇遐。與水無歸。即安立室。何痛之酷。何悲之哀。凡在含情。誰不傷悼。當復何咎。致茲禍也。今復何術。用鎮國家。惠報答之曰。臣稟性

愚蒙。不知大計。何況禍福所倚。國家存亡者乎。

王子の訓。オムシとあるは誤なるへし。古訓にセシムとあり○王子惠。東國通鑑。隋開皇十八年。百濟威德王四十五年。惠王元年。冬十二月百濟王昌薨。諡曰威德。第二子季明立。二年薨。諡曰惠長。とあり○處殺。秘閣本及通證に引る一本に。處を所とあるよろし○迎津。考に難波の津へ迎ふるなるへし○爲當をモシと訓るは。此字義にもあらず。義訓にもあらず。此は次の爲當をハタと訓るより。マタハタと云か如き意はへあるより。これをモシと訓るなり。次にハタの義を説をみて知へし○爲當をハタと訓に付て。守部。將。爲當。當の説あれは此に載す。云く。此語は海へたなど云。へたの通音にて。其邊の意なり。されは彼へたと云語も。恒に川はた。池のはた。などやうに。はたともいへり。そは古く此はたと云に。將字當字等を用來しも。其事に當り。邊付て將云云。云云と云意なればなり。彼ほどく其ほどりに臨み近づきて。是は危ふき方なり。今このはたは。將に其方へ懸かんとする意なり。故に十六卷に。萬葉一に。みよしのはたやはた。むなきをどると。川に流るな。などやうに重ねいへる類は。即て殆ど云にいと相近く聞ゆるなり。山のあらしの寒けきに。爲當也。こよひも我ひとりねん。この歌にそへたるやは歎息にて。將にこよひも我ひとりねんとするか。歎きたる意あり。これに爲當也と書たるも。爲當云云と云意を以て用たる字なり。將字を用たるは。十六卷に將見ある類なり。然るに昔より此意を知る人なく。當はいつも多の假字とのみ心得をる故に。爲字をしひて誤とし來れと。欽明紀に爲當と書て波多と訓たれば。誤字ならさることいちし

ろし。されは集中當一字を書たるは。元よりしかりしも有へく。又上に爲字を脱したるもあるへし。又六卷に破當とありといひたれど。今みれば破字なし。もし一本などにあらは。日谷八君破。當不相將有と上につきて助辭なり。と云れたるは詳なり。爲當の義右の説にて明らけし○眇然。眇は渺の誤なるへし○即安玄室。通證云。即猶即世之即也。玄室見三列仙傳。貞觀政要注。玄廬墓之別名とあり。さてヤスミは。神代下卷に。是焉遊息とある遊息。ここの安字の義なり。この事はそこに既に云り○傷悼。本に悼を憫とある誤なり。今考本集解に依る○術。通證に婆介與化同義とあり。されど波介と云事。いかなる義とも知かたし。古言ともおもはれねど。皇極紀にも學取其術とあり。

蘇我卿曰。昔在天皇大泊瀨之世。汝國爲高麗所逼。危甚累卵。於是天皇命神祇伯。敬受策於神祇。祝者廼託神語。報曰。屈請建邦之神。往救將亡之主。必當國家謚靖。人物又安。由是請神往救。所以社稷安寧。原夫建邦神者。天地剖判之代。草木言語之時。自天降來。造立國家之神也。頃聞汝國輟而不祀。方今悛悔前過。修理神宮。奉祭神靈。國可昌盛。汝當莫忘。

蘇我卿。考云。この蘇我卿は稻目宿禰か。こゝろもとなし。佛に詣ふ稻目宿禰なれば。かく神道を尊みて怠らぬか。福の本と云事は述らるまし。外の所には蘇我大臣とあり。こゝには蘇我卿とあるも。別人故の事ならむ。前書に出しには蘇我臣とあり。しかれば別人なり。大臣をば臣とはかゝぬなりと云り。さもあるへし。○爲高麗所逼。この事雄略二十年紀に出。○策を。タ、マと訓る義詳ならず。古語ならむか知かたし。通證は甚しき非なり。假名本にはハカリコトと訓り。さらはこゝもなし。○屈請。通證に。枉屈招請也。請訓。麻世。敏達紀舒明紀亦同とあり。マセは令坐の義なり。一の訓に申テとよめるも義は同じ。○建邦之神。次に自天降來。造立國家之神也とあるに付て。通證に。今按此專指素戔嗚尊也。事見神代紀。兼方以爲大己貴命。不是と云るは。まことにさることなり。神代に。素戔嗚尊其御子五十猛命を帥ひて。新羅國に天降りまじし時の事にて。其處に委く云り。大己貴命の海外に亘りまじしは。此よりは遙に後の事なれば。建邦之神とは云へからず。さて通證に。或曰。此謂檀君也。東國通鑑曰。當初無君長。有神人。降檀木下。國人立爲君。是爲檀君。國號朝鮮。中略朝鮮賦曰云々。後入九月山。不知所終。國人世立唐祀之者。以其初開國也。今唐在箕子祠。東有木主。題曰朝鮮始祖檀君位。と云るに付て考るに。日本春秋に。東國通鑑所稱。東方神降檀樹下。是謂檀君。治世三千年。政衰。殷箕代王於朝鮮。云云。伊檀君曾。彼所稱檀君是也。此土稱曰新羅明神。又曰韓神。とあり。此説捨かたし。まことに檀君は太祈にて。素戔嗚尊の御子五十猛神に坐すへし。降檀木下などは。字に附て云る説なれば。信かたし。

素戔嗚尊。其子檀君を率て。萬國を經歷し玉ひ。朝鮮に始く止りて。邦を造りまし。其後木種を齎して本邦に渡り。大八洲に繁植せしめられぬ。故此神を木神とも。有功之神とも申せる事。神代紀に見えたれば。彼國にては。此神を旨と始祖には祀りしなるへし。されは素戔嗚尊五十猛命を。建邦之神と申すへきなり。允當れる考なりけり。○又安。本に又を又に誤る。今正せり。○天地剖判之代。草木言語之時云々。剖本に割に作る。今集解に據る。彼素戔嗚尊の天降玉ひし時は。天地剖判の始にはあらざれども。其は皇國にてこそあれ。外國は此時。いまた天地開けしまゝにて。人類とても未少なかりければ。けに草木言語の時なりけむ。其時に當りて。此神等ならては。いかにして國家を造立し玉はむ。まことに貴き古傳なりけり。○脩理神宮奉祭神靈云々。此を以て見る時は。朝鮮の古代に在ては。其始祖の神靈を。嚴に祭りしさま知られたり。然るに今其らの事を。古實に基けてさとし教へし言。まことに貴し。已に玉勝間にも此言を稱へて。此言何の國何れの時にもわたりて。いと長きさとしなりと云はれたりき。○昌盛。本に昌を昌に誤る。今正せり。次なる餘昌の昌も同じ。

秋七月己卯朔壬午。遣蘇我大臣稻目宿禰。穗積磐弓臣等。使于吉備五郡。置白猪屯倉。八月。百濟餘昌謂臣等曰。少子今願奉爲考王。出家脩道。諸臣百姓報言。今君王欲得出家脩道者。且奉教也。嗟夫。

前慮不定。後有大患。誰之過歟。夫百濟國者。高麗新羅之所爭欲滅。自始開國。迄于是歲。今此國宗。將授何國。要須道理。分明應教。縱使能用耆老之言。豈至於此。請俊前過。無勞出俗。如欲果願。須度國民。餘昌對曰。諾。即就圖於臣下。臣下遂用相議。爲度百人。多造幡蓋。種種功德云云。

壬午。四日なり。○白猪屯倉。倭名抄備前備中備後に白猪郡郷なし。稱德紀天平神護二年十二月。美作國人從八位下白猪臣大足。賜姓大庭臣。神護景雲二年五月。美作國大庭郡人。外正八位下白猪臣證人等四人。賜姓大庭臣。と云事見えたり。同紀和銅六年に。割備前國六郡。始置美作國。と見えたり。美作國に白猪と云處ありしなるへし。其國をよくたつぬへし。吉備五郡も未詳ならず。○謂臣等。秘閣本中臣本に。臣上諸字あるよろし。○少子。少は小に通はせて書る。此紀に例あり。但小に作れる本もあり。○國宗。通證に。國之宗廟也。説文曰。宗尊祖廟也。とあり。○要須道理分明應教とは。出家してすむ事ならず。必其譯の道理を。分明に云きかせて教へよとなり。○功德。本に功を切に誤る。今正せり。さて此下に云云二字本にあり。假名本になし。削るへし。信友本にも。この二字恐衍と云り。

十七年丙子

十七年春正月。百濟王子惠請罷。仍賜兵仗良馬甚多。亦頻賞祿。衆所欽歎。於是遣阿倍臣佐伯連播磨直。率筑紫國舟師衛送達國。別遣筑紫火君。率勇士一千。衛送彌氏。因令守津路要害之地焉。

衆所欽歎。通證に。言天皇頻加賞賜。故衆羨歎其優待也。舊讀非。と云れたるか如し。集解も本のまゝに讀たり。非なり。○播磨直。景行紀播磨別の下に出。此氏は。續紀神龜二年十一月。典鑄正正六位上播磨直弟兄。授從五位下。弟兄初賚柑子。從唐國來。とあり。○筑紫火君。火本に大に誤る。今諸本に依て正せり。記に神八井耳命者火君之祖とあり。火は即ち筑紫の肥國なり。記傳云。肥後風土記に。肥君等祖健緒組とあるは。即此氏の祖なるへし。欽明紀十七年に筑紫火君見ゆ。國造本紀に。火國造。瑞籬朝。大分國造同祖。志貴多奈彥命兒。暹男江命。定賜國造。大分國造同祖とあれ。姓氏錄右京皇別。火多朝臣同祖。また大和國皇別。肥直。多朝臣同祖。神八井耳命後也。とあり。景行紀に。火國別。又火國。とあり。東大寺正倉院文書に。郡名は。聖武帝時。薩摩主帳肥君廣龍と云人見えたり。此も氏人なり。○注筑紫君兒火中君弟は詳ならず。筑紫火君兒中君とありしか。轉倒せしにもやあらむ。火を秘閣本假名本には大と作り。假名もオホと訓り。誤なるへし。○彌氏。詳ならず。

秋七月甲戌朔己卯。遣蘇我大臣稻目宿禰等於備前兒島郡。置屯倉。以葛城山田直瑞子爲田令。田令。此云。陀豆歌毗。冬十月。遣蘇我大臣稻目宿禰等於倭國高市郡。置韓人大身狹屯倉。言韓人者。高麗人小身狹屯倉。紀國置海部屯倉。一本云。以處處韓人爲大身狹屯倉。田部。高麗人爲小身狹屯倉。田部。是即以韓人高麗人爲田部。故因爲屯倉之號也。

己卯は六日なり。○葛城山田直。葛城氏の事は。次の二十二年紀に云。山田直物に見えず。大和志。忍海郡に山田村あり。忍海も葛上下郡のうちなり。また倭名抄。大和國葛下郡山直郷あり。大日本史氏族志に。此氏のこと洵たり。○田令は。屯田首なり。令と云るは。京より首に差されて。其地に至れるより云る名なり。三代實錄。仁和元年九月に。備前國津高郡人田使首と云るかあるは。此氏の裔か。○韓人大身狹屯倉。韓人の事は。次に云。身狹は大和國高市郡の地にて既に出。今三編村と云處なり。さて其を大身狹小身狹と云は。大長谷小長谷など云如く。地名を分て二に云るに付て云事か。又は集解に。按稱大小者。蓋以屯倉大小名之。とある意にもあるへし。さて韓人は。注に言韓人者百濟也とあるか如く。歸化の百濟人を田部として。立たる屯倉なるか故に。即て其屯倉の名と爲しなり。さて高麗人に對へて云は。百濟人大身狹屯倉としも云へきを。韓人と云よしは。記の應神段に。百濟池と云るかありて。それを紀には。領諸韓人等作池。因以名池。號韓人池とあり。そこなる記傳云。これに論あり。記に百濟池とあるは。もし

その地名にはあらて。たゞ池名ならば。新羅人を役て聖れは。新羅池とこそつくへきを。百濟池としも云る故は。紀に韓人池とあると合せて思ふに。百濟は殊に親く仕奉りし國なればにや。諸の韓國の中にも。取わきて彼國を。韓人と云事あり。欽明卷十七年の處に。韓人大身狹屯倉。高麗人小身狹屯倉とありて。言韓人者。百濟也と注し。また一本に云々。韓人高麗人云々。これ高麗に對て百濟を韓人と云り。然は韓人と云と。百濟と云と同意なる故に。もとは韓人池なるを。百濟池とも云るか。もし然らば。始に名けたる意は。書紀の如く諸の韓人にても。記の如く新羅人にても。韓人とは云へければ。同じことなるを。其名を後に百濟のことにて取て。百濟の池とも云るにや。又は韓人を役てつくれるに依て。本の名は韓人池なるを。百濟の地にあるを以て。百濟池とも云るにや。下と云れたり。今此説に依て心得たらんには。この韓人も。昔より百濟人を。旨と韓人と云來し習慣によれるものとすへし。又按るに。韓人と云る稱は。もと三韓人を總て云名にて。三韓は。馬韓。濟韓。神長韓にて。新羅百濟任那等の舊名なり。百濟も其韓人の一なり。然て高麗は三韓の地にあらず。もとより北方に遙に放りたる國なれば。其國人を。もとより韓人とは云はさりしなり。しか見る時は。こゝなる韓人は。百濟人にはあれど。高麗人に對へて云稱にて。三韓人の舊稱によれるにもやあらむ。なほよく考へし。○海部屯倉。倭名抄紀伊國海部郡阿末これなり。○注以處々韓人爲大身屯倉は。處々に散け居れる百濟人を集めて。田部の戸となしなり。田部のことは上にも云へれど。なほ下の三十年の下に見えたり。

十八年丁丑

十八年春三月庚子朔。百濟王子餘昌嗣立。是爲威德王。

餘昌嗣立。此に至て空位三年なりしは。事故ありし事なるへし。通證に云る説は儒見なり。

二十一年庚辰

二十一年秋九月。新羅遣彌至已知奈末。獻調賦。饗賜邁常。奈末喜歡而罷。曰。調賦使者。國家之所貴重。而私議之所輕賤。行李者。百姓之所懸命。而選用之所卑下。王政之弊。未必不由此也。請差良家子爲使者。不可以卑賤爲使。

新羅。東國通鑑曰。陳文帝天嘉元年。新羅眞興王二十一年。これは本紀にては二十年にあたりり。彌至已知奈末。本に末を未に作。今改む。次も同じ。東國通鑑曰。新羅儒理王九年。設官有十七等。十一曰奈麻。又曰。法興王九年。新羅始制百官公服。大奈麻奈麻青衣。○國家之所貴重云云。考云。此方から賈賦の使者と云へは。輕き事にせらるゝと云事なり。日本にては貴重し玉ふに。三韓にては賤略に思ふなりと云り。○行李。集解云。僖三十年傳曰。行李之往來。杜預注。行李使人。疏昭十三年傳曰。行李之命。杜云。行李使人。李理字異。爲注則同。都不解李字。周語行李以節逆之。賈逵云。理吏也。小行人也。孔晁註。國語。其本亦作李字。注云。行李行人之官也。然則兩字通用。本多作理。順之爲吏。故爲行人使人。

也。○差良家子。萬十六。官許曾。指豆毛遺米云々。差は軍防令。凡差兵士と見えたる差なり。匡謬正俗に。科發士馬。謂之爲差と見ゆ。官符語なりと谷川氏云り。○不可以卑賤爲使。此一段の文。調賦使者以下。未必不由此也と云まての數句。魏志文を取られたり。但し調賦使を刑法に作り。行李を獄吏に作れるか異なるなり。似たる言様にそ有けん。かゝる文紀中に多し。

二十二年辛巳

二十二年。新羅遣久禮叱及伐干。貢調賦。司賓饗遇。禮數減常。及伐干忿恨而罷。是歲。復遣奴氏大舍。獻前調賦。於難波大郡。次序諸蕃。掌客額田部連。葛城直等。使列于百濟之下。而引導。大舍怒還。不入館舍。乘船歸至穴門。於是脩治穴門館。大舍問曰。爲誰客造。工匠河内馬飼首押勝欺給曰。遣問西方無禮。使者之所停宿處也。大舍還國。告其所言。故新羅築城於阿羅波斯山。以備日本。

久禮叱及伐干。釋紀に。久禮叱新羅使。弘仁私記曰。人名。及伐干。弘仁私記曰。冠名とあり。東國通鑑曰。新羅儒理王九年。設官十七等。九曰級伐。○司賓。唐書百官志。司賓。典賓。掌賓。各二人。などあり。和名抄に玄蕃寮を。保字之萬良比止乃豆加佐とよめり。○大舍。東國通鑑に。十二日大舍。○獻前調賦。これ

を見れば。前には調賦の物を退け玉へるならんか。然るにまた其物を持来て。再び献りしなるへし○  
 難波大郡。攝津志に。東生郡高津宮古蹟。大坂安國寺坂北有二小祠。此一名難波宮。又大宮。又大郡宮。又  
 忍照宮。とあり。されど此説いかゝあらん。但し古の鴻臚館。東生郡にありと云へは。今玉造の南。真田山。其遺蹟なりと云ふ。  
 此時も其邊にて。蕃客をは饗せしものなるへし。さるは東生郡なることは決かるべきなり。舒明紀二年。是歲改  
隋。理難波大郡及三韓館。ともあり。敏達紀に。小郡西畔丘前と云事も見えたり。小郡は今の西郡なりと云り。なほそこに云  
 へし○掌客。周禮また六典に出つ。延喜治部式。凡蕃客入朝者。差掌客二人。註掌二在京雜事。とあり○  
 葛城直。此氏の事。神武紀葛城國造の下に云り。高御魂命五世孫。劔根命の後にて。忌寸姓あり。連姓  
 あり。直姓あり。姓氏録に見えたり。天武紀十二年九月。葛城直賜姓曰連。同十三年六月。葛城連。賜  
姓曰忌寸。なとあり。稱徳紀。天平神護元年三月。外從五位下葛木。吐登大林等。賜姓曰連。とあり。吐登は首な  
り。されど權紀に據に。此姓は難種にして。一系にはあらず。此こと既に神武紀に云り。清和紀に。攝津  
 國豊島郡人。左史生葛木直貞岑。改貫二右京。とあり○館舍。ムロツヤは。ムロツミヤか○穴門館。近藤  
 清石云。通證に。穴門館。倭名鈔。豊浦郡室津無呂。といへるは非なり。室津は豊浦郡の西邊にて。穴門  
 にあらず。穴門は既に上に云へるが如く。豊浦郡の南邊の名なり。さて穴門館は。後の長門館にて。  
 長門館は本朝無題詩七に載する。釋蓮禪が於長門壇浦逗留重賦六韻に。落潮停棹暫容與。臨海館長門  
 也。邊望眇焉。渡口繫舟秋浪咽。山腰訪寺暮雲屯。と見えて。倭名抄居處部に。臨海樓。在長門。壇浦のちかきわ  
國。とある。この館のことなり。壇浦のちかきわ  
 たりなることはいちぢるし。されど舊址詳ならず。長門國志に。臨海館は。自註に長門館名也とあるを以て。欽明紀の穴  
門館の遺蹟なること明かなり。又此臨海館の。國府松崎に在りしと云

○阿羅波斯山。未詳。釋に阿を何に作れり。但し一本には阿とあり○備日本。備を本に脩に誤る。  
 今正す。

二十三年  
壬午

二十三年春正月。新羅打滅任那官家。一本云。二十一年。任那滅焉。惣言任那。別言加羅國。安羅國。斯二岐國。多羅國。卒麻國。古陵  
國。子他國。散半下國。乞  
凌。國。稔禮國。合十國。

打滅任那官家。東國通鑑。新羅眞興王二十三年。秋九月新羅滅大加耶。時加耶叛。王命伊凌異斯夫討  
 之。以二斯多舍一爲副。斯多舍者。奈密王七世孫。年十六。爲二國仙一。其徒千餘人。至レ是請從軍。王以二年  
 幼一不許。固請許之。至二加耶一。領二麾下五千騎一。先入二梅檀門一。立二白旗一。城中驚懼。於是異斯夫引兵臨  
 之。遂滅二其國一。以二其地一爲二大伽耶郡一。文獻備考。大伽耶國。自始祖伊珍阿威王。一云。内珍朱智  
至道設智王。凡十六世五百二十年。眞興王二十三  
 年。伽椰叛。王命二異斯夫一討平之。輿地志曰。大伽椰今高靈縣。縣南一里。有二宮闕遺址一。傍有二石井一云々。  
 隋書東夷傳曰。新羅其先附二庸於百濟一。後因二百濟征高麗一。高麗人不レ堪二戎役一。相率歸之。遂致二強盛一。因  
 襲二百濟一。附二庸於迦羅國一。とあり。集解に。按所謂大伽耶。迦羅。並任那所レ都處也。と云り○注二十一年  
 任那滅焉。右の通鑑備考の文。本紀と合へれば。二十一年は誤なるへし○注古倭。上文に久倭とあり

○日本書紀通釋卷之五十



○子他。上文にも子他とあれば。傍注に古とあるは誤なるへし○散半下。上文に下を奚とあり○乞准國。未詳。備考全羅道に。百濟居知山縣。新羅安波縣。高麗長山縣。鐵冶縣。民嘗因倭寇。入寓于此島。因爲縣とあり。地圖に今順天府の沿海に古突山あり。もしくは是か○稔禮國。詳ならず。

夏六月。詔曰。新羅西羌小醜。逆天無狀。違我恩義。破我官家。毒害我黎民。誅殘我郡縣。我氣長足姬尊。靈聖聰明。周行天下。劬勞群庶。饗育萬民。哀新羅所窮見歸。全新羅王將戮之首。授新羅要害之地。崇新羅非次之榮。我氣長足姬尊。於新羅何薄。我百姓。於新羅何怨。而新羅長戟強弩。凌蹙任那。距牙鉤爪。殘虐含靈。劓肝斷趾。不厭其快。曝骨焚屍。不謂其酷。任那族姓百姓。以還。窮刀極俎。既屠且膾。豈有卒士之賓。謂爲王臣。乍食人之禾。飲人之水。熟忍聞此。而不悼心。况乎太子大臣。處跌蓐之親。泣血銜冤之寄。當蕃屏之任。摩頂至踵之恩。世受前朝之德。身當後代之位。而不能瀝

膽抽膈。共誅奸逆。雪天地之痛酷。報君父之仇讎。則死有恨。臣子之道不成。

哀新羅所窮見歸。かくさまによむへし。齊明紀文に。百濟國窮來歸我とあるに同じ。本の訓は非なり。さて通證に。据下句。則疑新羅下脱之字とあり○凌蹙。蹙本に威に作。今中臣本水戸本集解に依る○距牙鉤爪。通證に。距與巨。鉤與勾通。淮南子作勾爪居牙。吳都賦作鉤爪鋸牙。注猛獸爪如鉤。戟牙如刀鋸也。とあり。集解には距を鋸に改めたり○百姓以還。通證に。言諸侯及萬民也とあり。以還は以下の義なるへし。梁書には。皇枝襁抱已上。總功以還。窮刀云々とあり○卒士之賓。通證に賓與濱通用。舊讀非とあり。集解には濱に改めたり○乍。通證に。乍訓奈我良。又讀都々。韻會倉頡篇。乍兩辭也とあり。集解には梁書に依て削れり○熟。集解に孰に改めたり。梁書には此字なくて。忍聞此痛に作れり○悼心。本に悼を憚に作。今考本集解に依る○太子大臣は。考云。任那太子なり。大臣も同じと云り○跌蓐。繼體紀に出。これは太子に係て云○銜冤之寄。本に之字を脱。今中臣本水戸本集解に依る。また秘閣本中臣本に。冤を怨と作り。梁書には哀とあり。さて寄にて句なり○蕃屏は。大臣に係て云

是月。或有譖馬飼首歌依。曰。歌依之妻。逢臣讚岐。鞍韉有異。既而熟視。皇后御鞍也。即收廷尉。鞫問極切。馬飼首歌依。乃揚言誓曰。虛也。非實。若是實者。必被天災。遂因苦問。伏地而死。死未經時。急災於殿。廷尉收縛其子守石與名瀨冰。守石。名瀨。冰皆名也。將投火中。曰。非吾手。投以祝手。投咒訖欲投火。守石之母祈請曰。投兒火裏。大災果臻。請付祝人。使作神奴。乃依母請。許沒神奴。

譖。本に譖に誤れり。今考本集解に依る。○逢臣讚岐。逢臣は氏。讚岐は名なり。女にてかく記せる例は。下文にて坂本臣女甘美媛などあり。讚岐は地名に依れる名なるへし。倭名抄大和國廣瀨郡散吉。式同郡讚岐神社。逢臣は姓氏錄には見えぬ。天武紀に逢臣志摩あり。○鞍韉。倭名抄調度部鞍馬具。鞍和名久良。馬鞍也。韉和名之太久良。鞍韉也。韉韉之短也。とあり。通證云。杜詩雪沒錦鞍韉。鞍與韉自二項。舊讀非。說文韉馬鞍具也。倭名云。之太久良。見拾遺集。延喜式。有毛韉。鞞文。鞞等。新井氏曰。今云切付也。拾芥鈔曰。三位以上竹約切付。四位約。五位虎。六位羣鹿。飾鈔四位以上約。五位以下虎皮。元明紀曰。靈龜元年。禁文武百寮六位以下。用虎豹羆皮金銀飾。鞍具并橫刀帶端。但朝會日用者許之。婦女依父

夫蔭。服用亦聽之とあり。さて鞍與韉二項にはあれども。讀には假名本にもクラとのみあり。韉もクラの具なれば也。○既而熟視。既を本に熟に作。通證に疑既字之誤寫と云り。集解には改めたり。今もそれに依る。秘閣本には熟而二字なし。○皇后御鞍。訓オソヒは。服御をミソツモノと訓るに同じく。御裝の義なるへし。さて古代女も馬に乘しことは。通證に。以鞍馬贈青海夫人。見本紀元年。婦女乘馬法。見天武紀。則古者皇后亦御之也と云り。○收廷尉。釋紀に收を付に作る。或校本に收下付字あるよし見えたり。通證云。廷尉訓人屋司。漢百官志曰。廷尉秦官聽獄。必質於朝廷。故曰廷尉とあり。さて人屋の事は。神功紀に圜圖。また檻。仁賢紀に獄。天武紀に囚獄などあれど。其司りし官の事は。此にはじめて見えたり。この廷尉。即囚獄の官にて。令に囚獄司正一人。掌禁囚罪人徒役功程。及配決事。佑一人。大令史一人。少令司一人。物部四十人。掌主當罪人決罰事。物部丁二十人。とあり。さて右の囚獄をば。上古には如何なる人か掌りしと云ふに。これは物部連か。あつかり掌りしものにて。其部下なる物部を率ゐて。罪人をは主當したるなり。これらの事は既に雄略紀に云おけり。○名瀨冰。本に名を中に作る。今中臣本及本注に據る。中もナと讀む字なれば。わろきにはあらされど。こゝはなほ名なるへし。○將投火中注。投火爲刑蓋古之制也。火刑の事は既に神功紀に。新羅の使者を檻中に入れ。以火焚而殺と云事もありて。當時の刑なるへけれど。念ふに火刑は慘酷の刑にて。吾上古などにあるへくもおもはれず。これは韓國にて。古く行ひし刑なるを。襲津彦か新羅人を囚へて。其邊の海

なる。鉏海水門にて焚殺すとあれば。其國の習慣によりて。行ひし刑なるへくおもはるゝに付て。よく考るに。こゝに將<sup>レ</sup>投<sup>レ</sup>火中<sup>一</sup>とあるは。所謂盟神探湯のさまにて。上古の一種のわざありて。神祇に質<sup>ク</sup>しよなるへし。其證には。次に咒曰非<sup>レ</sup>吾手投<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>祝手<sup>一</sup>投。咒訖欲<sup>レ</sup>投<sup>レ</sup>火。守石之母祈請曰云々とあるなど。刑とはきこえず。人を刑するに。咒文などを要すへきにあらす。而るに注に。投<sup>レ</sup>火爲<sup>レ</sup>刑蓋古之制也とは。この文を全く刑と見誤りたる人の注せる。私記の文と見えたり。また此時に。未苦問せられて。身の死せしにもせよ。全く罪に落ちさる者の子迄を。火刑に行ふもいかふなり。上古にはかゝる事あまたあれば。よく考ふへき事なり○咒曰。咒をカシリ。ホサキと訓る義。已に云り。共に禱る義なり。考に罪人を火中に投するに。祝部に咒を爲<sup>ス</sup>るか古制と見えたり。此咒は廷尉かすることにてはなしと云り。次に云○非我手投以祝手投。本に以祝手投の四字脱たり。今秘閣本に依る。これにて上下の意明かに知られたり。その義は。非<sup>レ</sup>我手投<sup>一</sup>とは。廷尉の手以て投るにはあれど。是は公の御制にて。祝の手して投るなりとの義にして。此所謂咒なり○大災果臻。大を秘閣本考本引一本及小寺本には。天とあり。假名本には火とあり。通説には大當<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>天とあり春秋には大災と云ふ事ありて。杜預注に。來告以<sup>レ</sup>大。故書<sup>レ</sup>天火<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>災とあり○祝人は。通證に神社の祝部也とあるか如くなるへし。この祝人に托して。咒のわざを爲せたるなるへし○神奴は。神社に僕使する戸の民なり。又神賤とも云り。續紀二十一に。常陸國鹿島神奴二百十人。便爲<sup>レ</sup>神戶<sup>一</sup>とあるなどなり。又姓にても云り。同十八に。攝津國

住吉郡人神奴意支奈是なり。姓氏錄攝津神別。神奴連。天兒屋根命十一世孫。雷大臣命之後也とあり。是は松尾社家系圖に。雷大臣命の子眞根子命。其子御身足尼命。其子大田彦命。其子酒人命。其子神奴子命とありて。兒屋根命十七世の裔なり。又神八子命ともいふ。此人の名を以氏名と爲たるものなり。伯家五代記をみしかは。攝津國武庫郡西宮社人に。神奴連氏あり。さて今守石の母か。吾兒を神奴と作むと請は。いかなる義ならん知かたし○許没。通證に。許謂<sup>レ</sup>聽<sup>レ</sup>母請<sup>一</sup>没没<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>神奴<sup>一</sup>也。舊讀非。とあり。さて神奴に没入する時は。良民の籍を脱して。永く神社の民戸となることなるへし。

秋七月己巳朔。新羅遣<sup>レ</sup>使<sup>一</sup>獻<sup>レ</sup>調賦<sup>一</sup>。其使人知<sup>レ</sup>新羅滅<sup>レ</sup>任那<sup>一</sup>。恥<sup>レ</sup>背<sup>レ</sup>國恩<sup>一</sup>。不敢<sup>レ</sup>請<sup>レ</sup>罷<sup>一</sup>。遂留<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>歸<sup>一</sup>本土。例同<sup>レ</sup>國家百姓<sup>一</sup>。今河内國更荒郡鷓鴣野邑新羅人之先也。

更荒郡鷓鴣野邑。倭名抄河内國讚良郡これなり。さて持統天皇の御少名。鷓野讚良皇女と申す。天皇此地に産生ませるなり。さて此地の新羅人。他に考なし。姓氏錄河内諸蕃に。伏丸。新羅國人燕奴利使主之後也。また和泉諸蕃。日根造。新羅國人億斯富使主之後也などあり。

是月。遣<sup>レ</sup>大將軍紀男麻呂宿禰<sup>一</sup>。將<sup>レ</sup>兵出<sup>レ</sup>哆唎<sup>一</sup>。副將河邊臣瓊岳出<sup>レ</sup>居曾<sup>一</sup>。

山<sup>ト</sup>而欲<sup>テ</sup>問<sup>フ</sup>新羅攻<sup>ニ</sup>任那<sup>ノ</sup>之狀<sup>ヲ</sup>。遂<sup>ニ</sup>到<sup>リ</sup>任那<sup>ニ</sup>。以<sup>テ</sup>薦集部首登弼<sup>ヲ</sup>遣<sup>テ</sup>於百濟<sup>ニ</sup>。約<sup>シ</sup>東軍<sup>ヲ</sup>計<sup>ス</sup>。登弼仍<sup>シテ</sup>宿妻家<sup>ニ</sup>落<sup>シ</sup>印<sup>シ</sup>書<sup>シ</sup>弓箭<sup>ヲ</sup>於路<sup>ニ</sup>。新羅具知<sup>テ</sup>軍計<sup>ヲ</sup>。卒起<sup>シ</sup>大兵<sup>ヲ</sup>。尋<sup>テ</sup>屬<sup>シ</sup>敗亡<sup>ス</sup>。乞<sup>テ</sup>降<sup>リ</sup>歸<sup>リ</sup>附<sup>ス</sup>。紀男麻呂宿禰取<sup>リ</sup>勝旋<sup>シ</sup>師<sup>ヲ</sup>。入<sup>リ</sup>百濟<sup>ニ</sup>營<sup>ス</sup>。令<sup>テ</sup>軍中<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>。夫勝<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>忘<sup>ル</sup>敗<sup>ヲ</sup>。安<sup>ク</sup>必<sup>ニ</sup>慮<sup>ル</sup>危<sup>ヲ</sup>。古<sup>ノ</sup>之善教<sup>也</sup>。今處<sup>ニ</sup>疆畔<sup>ニ</sup>。豺狼<sup>交</sup>接<sup>ス</sup>。而可<sup>ク</sup>輕<sup>ク</sup>忽<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>フ</sup>變難<sup>ヲ</sup>哉<sup>。況復平安之世。刀劍不離於身。蓋君子之武備。不可以已。宜深警戒。務崇斯令。士卒皆委心而服事焉。</sup>

紀男麻呂宿禰。崇峻前紀及四年紀に出。秘閣本。宿禰下臣字あり。○哆唎。繼體紀六年任那國上哆唎下哆唎とあり。○河邊臣。古事紀に。蘇我石河宿禰者川邊臣之祖也とあり。川邊は記傳云。此地名諸國に多かれは。何れとも定めかたし。和名抄に攝津國河邊加波乃倫郡これならんか。其餘畿内には。山城國葛野郡。大和國十市郡などにも。此郷はあるなり。さて此氏人。書紀に彼此見えたり。天武紀に。十三年十一月。川邊臣賜<sup>レ</sup>姓曰<sup>ク</sup>朝臣。姓氏錄右京皇別。川邊朝臣。武内宿禰四世孫。宗我宿禰之後也。此宗我宿禰と云は。蘇我石川宿禰とは別なり。とあり。文武紀。河内石川郡人。河邊朝臣乙麻呂と云人も見えたり。○出居曾山。文献備考全羅道。百濟古沙夫里郡。新羅古阜郡。高麗同。本朝同とあり。按に此時大將軍紀宿禰は。任那の哆唎よりすゝみ。

副將河邊臣は。百濟の古沙夫里より出て。別れて新羅の境に打入しなるへし。○薦集部首。詳ならず。姓氏錄大和未定雜姓。薦集造。天津彦根命之後。天武紀十二年九月。薦集造賜姓曰<sup>ク</sup>連とあるは。同族なりや。異姓なりや。知かたし。○宿妻家とは。下に河邊臣瓊岳等及其隨婦とあるに同じく。これも隨婦と見えたり。軍中隨婦の事。已に神武紀に云り。○起大兵。此下恐脫文あらんか。○尋。秘閣本即を作る。○安必慮危。本に必を心とあり。今釋紀秘閣本中臣本等に據る。此段吳志吳主傳に因て。文をなせるにも必とあり。○今處疆畔。吳志に處下身字あり。こゝも脫たるなるへし。或本には有と云り。○不可以已。本に可字なし。今考本集解等に依る。吳志にも此字あればなり。○崇斯令とは。戰を忘れすと云の命令を。大切に重みし崇めよとなり。

河邊臣瓊岳獨進轉鬪。所向皆拔。新羅更舉白旗。投兵降首。河邊臣瓊岳元不曉兵。對舉白旗。空爾獨進。新羅鬪將曰。將軍河邊臣今欲降矣。乃進軍逆戰。盡銳。遂攻破之。前鋒所傷甚衆。倭國造手彦自知難救。棄軍遁逃。新羅鬪將手持鈎戟。追至城。運戟擊之。手彦因騎駿馬。超渡城。僅以身免。鬪將臨城。而歎曰。久須尼自利。此新羅語也。未詳也。

於是河邊臣遂引兵退。急營於野。於是士卒盡相欺蔑。莫有遵承。鬪將自就營中。悉生虜河邊臣瓊岳等。及其隨婦。于時父子夫婦。不能相恤。鬪將問河邊臣曰。汝命與婦孰與尤愛。答曰。何愛一女。以取禍乎。如何不遇命也。遂許爲妾。鬪將遂於露地。奸其婦女。婦女後還。河邊臣欲就談之。婦人甚以慚恨。而不隨曰。昔君輕賣妾身。今何面目以相遇。遂不肯言。是婦人者。坂本臣女。曰甘美媛。

所向皆拔。句なり○元不曉兵。これ句なり。兵對とつゞけ讀は非なり○對舉白旗。對をば此句に屬てよむへし。考云。新羅の軍法。降參せんとする時。素旆を舉る事。神后紀にもあり。河邊臣かそれを知らずして。大に敗れ虜にせられしなりと云り○空爾獨進。本に爾を示に作る。今中臣本釋紀等に依る。考本には手に作れり○妾。和名抄に妾非正嫡。和名乎無奈女。安康紀に苜菜をよみ。字鏡集類聚名義抄にヲウナメと注せるは。音便讀なり○婦女後還は。囚を免されて。共に皇國へ還りしなるへし○欲就談之。中臣本に談を議に作れり。

同時所虜。調吉士伊企儺。爲人勇烈。終不降服。新羅鬪將拔刀欲斬。

逼而脫禪。追令以尻臀向日本。大號叫曰。日本將齧我臆腫。即號叫曰。新羅王啗我臆腫。雖被苦逼。尙如前叫。由是見殺。其子舅子亦抱其父而死。伊企儺辭旨難奪。皆如此。由此特爲諸將帥所痛惜。其妻大葉子亦並見禽。愴然而歌曰。柯羅俱爾能。基能陪爾能。於譜磨故幡。比例甫囉須母。耶魔等陸武岐底。或有和曰。柯羅俱爾能。基能陪爾能。於譜磨故幡。比例甫囉須彌喻。那爾婆陸武岐底。

尻臀。倭名抄。尻和名之利。醫俗云井佐良比。辨色立成云。后片。之利無多。とありて。シリタフラの訓なし。新撰字鏡。醫尻不佐。又尻臀尻太牟良。字鏡集后シリタフラ。也。とあり。とあるに依らは。之利無多は。之利多無の倒せるにもあるへし。さて次なる臆腫も。字書に尻臀也とあり○大葉子。倭名抄。車前子和名於保波古とあり。草を名とせるなり○愴然歌曰。解云。諸將の愴しみて。うたへるなりと云り。此事次に云○柯羅俱爾能。韓國之なり○基能倍爾能致底。立城上ととなり○於譜磨故幡。大葉子者なり○比例甫囉須母。領巾振爲毛なり。囉須は敬語。母は助語なり○耶魔等陸武岐底は。向日本てなり。陸。釋紀に備とあり。一首の意は解云。萬葉卷五に。松浦佐用姬か。佐提彦か別をかなしめる歌の序

に。遙望離去之船。悵然斷肝。黯然銷魂。遂脫領巾。磨之。傍者莫不流涕。因號此山曰領巾振之嶺也。といへる類にて。大葉子が大倭のかたを戀つゝ。領巾ふらすこと。吾邦人の彼にあるか。傍よりかなしみてよめるなりと云れたるは。さることにて。なほ守部か説に。此に愴然歌曰とあれど。こは大葉子か自よめる歌にはあらず。一首の表をつら／＼考ふるに。此大葉子も夫伊企儺の如く。高き臺の上に載せられて。向日本。日本將云々といへど通られけるに。是も然はいはずして。領巾振て日本方を拜みけるを。日本軍士等遙に見て。其猛き心を稱へてよみしなるへし。さなくては。城上に立しと云詞。かなひかたし。さても伊企儺主を始として。其子其妻に至るまで。三人ともに。さしも健く深く。命すてける事實つへし。稱へし。後世の鳥居氏の最期は。此伊企儺主の勇烈に。かつ／＼似たれど。其妻子の及はさりしは。古今のたかひなるへしと云れたる。まことにしか見えたり。或有和曰。此は和へたる歌には非ず。右歌の或云の歌にて。聊唱へかへたるものなり。○柯羅俱爾能如上。其能陪備陀々志。城上に立しなり。たゞしは多知の延言なり。○於諸磨故幡如上。比禮甫羅須彌喻。領巾振爲所見也。ふらすの解上注の如し。○那爾婆陞武岐底。向難波てなり。解云。はじめ難波より船出せしなれば。難波の方へむきてとは云るなり。釋紀に向日本方。振領巾。慕故郷也と云り。その心なり。と云れたるか如し。通説に。難波舟所泊。思郷之心。於是切矣。と云れたるも。さることにて。彼安部仲麻呂。天原振一郷の名なれば。異國より向難波。なと云へきにあらす。もし日本の陣所の名かとも思へど。任那の地名めかすと云れたるは。却りて非なり。

八月。天皇遣大將軍大伴連狹手彦。領兵數萬。伐于高麗。狹手彦乃用百濟計。打破高麗。其王踰牆而逃。狹手彦遂乘勝以入宮。盡得珍寶貨賂。七織帳。鐵屋還來。舊本云。鐵屋在高麗西高樓。上織帳張於高麗王內寢。以七織帳奉獻於天皇。以甲二領。金飭刀二口。銅鏤鍾三口。五色幡二竿。美女媛媛名也。并其從女吾田子。送於蘇我稻目宿禰大臣。於是大臣遂納二女。以爲妻。居輕曲殿。鐵屋在長安寺。是寺不知在何國。一本云。十一年大伴狹手彦連。共百濟國。驅却高麗王陽香。於比津留都。

大伴連狹手彦の事。宣化二紀に出。○伐于高麗。三代實錄云。貞觀三年八月十九日。左京人散位外從五位下伴大田宿禰常雄。賜伴宿禰。先是正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男等奏言。常雄款僞。謹稽家牒。伴大田宿禰同祖。金村大連公第三男。狹手彦之後也。狹手彦。宣化天皇世。奉使任那。征新羅。復任那。兼助百濟。欽明天皇時。百濟以高麗之寇。遣使乞救。狹手彦復爲大將軍。伐高麗。其王踰牆而逃。乘勝入宮。盡得珍寶貨賂。以獻之。珠敷天皇世。還來。獻高麗之囚。今山城國狗人は是也。狹手彦再使海外。征伐兩國。盡力絕域。復立二國。身尊當時。功流後代。とある。此時の事なり。さて此時の高麗王は。第二十五世陽城王又平原王。か四年なり。此度高麗を伐玉ふは。新羅と一になりて。任那

を伐亡したるか故の事なるへし○七織帳。通證に引る魏略西戎傳曰。絳地金織帳。初學記曰。七綵帳。七綵芙蓉之羽帳。などあるか如く。絳地に七綵を織出し帳なるへし○鐵屋。同書に以鐵所造之屋とあり。集解に。按今寺中所在置舍利等。小寶塔之類。と云り○注高樓。秘閣本高字なし○銅鑊鍾。釋紀に鍾を鐘とあり。古書には通用たり。チリハメは。通證に塵食とあれど。なほ散食なるへし。金銀等を散らし食めたる義なるへし○媛を。ヨメと訓るは誤なるへし。ヒメと訓へし○輕曲殿は。高市郡なり。懿德紀に。遷都於輕地。是謂曲峽宮とあり。そこに云り。或人云。按に畏も天皇には。七織帳のみ献て。稻目には數種を贈りしこと思へは。當時稻目か跋扈思ひやるへしと云り。さる言なり○注長安寺。集解云。按皇圓略記曰。但以鐵屋置長安寺。注長安寺在近江國。栗太郡多化郎寺是也とあり。此寺今詳栗太志にも見えず。通證曰。姓氏錄曰。和樂使主。出自吳國王照淵孫智聰也。欽明御世。隨使大伴佐尼比古。持内外典樂書。明堂圖等。百六十四卷。佛像一軀。伎樂調度一具等。入朝。男善那使主。孝德御世。依獻牛乳。賜姓和樂使主。奉度本方書一百三十卷。明堂圖一卷。藥白一。及伎樂一具。今在大寺也。今按。大寺皇極紀所謂百濟大寺。天武紀謂之大官大寺。在高市郡。疑長安寺亦此也。とあるによらは。大安寺の舊名の如し。なほよく考へし○注十一年云々。高麗王陽香。集解云。按十上疑脫。二十一年。當高句麗平原王陽成二年。と云り。さることなり。さて陽香陽成は。韓音を通して云るなり○比津留都。未詳。

冬十一月。新羅遣使献。并貢調賦。使人悉知國家。憤。新羅滅。任那。不敢請罷。恐致刑戮。不歸本土。例同百姓。今攝津國三嶋郡埴廬新羅人之祖先也。

遣使。献は別途の献物なり。本の訓は誤れり○并貢調賦。年々定例の調賦なり○憤をムツカリと云るは。心のうちに憤イキトホなり。小兒の啼をむつかると云も。心に憤るより。其さまの外にあらはるゝを云にて。同じかるへし○埴廬。本に廬を慮とあり。今中臣本に依る。和名抄攝津國島上郡土室あり。

二十六年夏五月。高麗人頭霧唎耶陞等。投化於筑紫。置山背國。今畝原。奈羅。山村高麗人之先祖也。二十八年。郡國大水。飢。或人相食。轉傍郡穀。以相救。

置山背國。三代實錄に。狹手彦献高麗之囚。今山城國狛人は是也。倭名抄相樂郡大狛。下狛。之毛都古末。催馬樂歌に。山城のこまのわたりのうりつくり云々。守部か入綾云。行囊抄南遊下に。椿井村。林村。上狛村とついで云ふ。狛村は自路左方行程十余町に在。或は狛の大里村とも云。此邊狛郷也。木津渡

二十六年  
乙酉

二十八年  
丁亥

に近し。名所なり。昔熟瓜の名物を出したる所なり云々。或紀行云。狛の里は木津川のわたりのこなたより。南の山際にあるを見やりて。歌とはいひけれと。行く道遠し。日もたけぬといへは。木津川をわたる。萬葉に狛山になくほどきす泉川。わたりを遠みこゝにかよはず。已上行とあり○畝原。不詳○奈羅。倭名抄久世郡那羅○山村。姓氏錄。山城皇別。曰佐。注曰。山代國相樂郡山村○郡國。或説に郡は群の誤かと云れと。漢書元帝紀に。初元元年九月。關東郡國十一大水飢。或人相食。轉○傍郡錢穀。以相救とあれば。誤にはあらず。但し郡國上脱字ありしにもあるへし。さて人相食は。元帝紀の文をとりて。甚しく記しよものと見えたり○以相救。大日本史に。按公事根源云。毎年五月賑給。始○于欽明帝。蓋據レ此爲レ説也。と云り。

三十年己丑

三十年春正月辛卯朔。詔曰。量置田部。其來尙矣。年甫十餘。脱籍免課者衆。宜遣膽津。檢定白猪田部丁籍。夏四月。膽津檢閱白猪田部丁者。依詔定籍。果成田部。天皇嘉膽津定籍之功。賜姓爲白猪史。尋拜田令。爲瑞子之副。見上  
田部のこと。始て景行紀に出○年甫十餘。戸令に。男女十六以下爲小。二十以下爲中。男二十一爲丁。

六十一爲老とあるは。令の御定なれども。此御代の頃にも。さる御定はありしを。年を偽りて課を免れしもの衆かりしなり○脱籍免課。史學指南に。率土黔庶皆有籍書。若全家並不附籍。謂之脱戸。戸有數口。止報一二。規免課役。謂之漏口。○注膽津者王辰爾之甥也。續紀延曆九年七月。百濟王仁貞等の上表に依るに。午定君生三男。長子味沙。仲子辰爾。季子麻侶。從此而別爲三姓。各因所職。以命氏焉。萬井。船津連等。即是也云々とあり。味沙は萬井氏祖。辰爾は船氏の祖。麻侶は津氏の祖なり。膽津は味沙の子なるへし。其故は。續紀養老四年に。白猪史氏を改めて。萬井連と賜へるよし見えたりはなり。此文次紀に引り。見合すへし○白猪田部。白猪屯倉の田部なり。十六年の條に見ゆ○丁者。二字にてヨホロと訓へし。通證に者をテヘレハと訓るはあらず○田戸は。田部の戸なり。脱籍者を檢定て。戸數に充るなり。或人云。此田戸と田部とを別て云ときは。田部は屯倉の田を作る人を云。田戸は田部等か住む家を云り。釋紀に私記曰。案假名本。作田部之戸とあるか如しと云り○功を本に切に誤る。今正せり○白猪史。姓氏錄には載せされと。氏人は。天武紀白猪史實然。續紀文武四年白猪史骨と同人なるへし。大寶元年正月白猪史阿麻留。養老三年壬七月白猪史廣氏などあり。養老四年五月。改白猪史氏。賜萬井連姓とあり。二十六に白猪臣大足。二十七に白猪臣證人等みえたるは別なり。延曆十年正月。萬井連船津連と同じく。姓宿禰を賜へること見えたり。なほ延曆九年。王仁貞等か上表等見合すへし○田令を。訓にタツカサとあるは誤なり。十七年の下に訓注あり○爲瑞子之副。秘閣本に副下也字あり。



三十一年春三月甲申朔。蘇我大臣稻目宿禰薨。夏四月甲申朔乙酉。幸泊瀨柴籬宮。越人江淳臣裙代詣京奏曰。高麗使人辛苦風浪。迷失浦津。任水漂流。忽到着岸。郡司隱匿。故臣顯奏。詔曰。朕承帝業。若干年。高麗迷路。始到越岸。雖苦漂溺。尚全性命。豈非微猷廣被。至德魏魏。仁化傍通。洪恩蕩蕩者哉。有司宜於山城國相樂郡起館淨治。厚相資養。

稻目宿禰薨。宣化元年大臣となりて。此年まで三十五年になれり。記傳云。一代要記に年六十五とあり。さて駿河風土記に。益頭郡鳥羽陵。天國排開廣庭天皇二十七年庚寅二月。蘇我稻目薨逝。以三夢之兆。藏骸於茲。其骸似鳥羽色。故號之。また富士郡懸畑神社。所祭蘇我稻目也。今京になりてのなりとあり。○乙酉。二日なり。○泊瀨柴籬宮。城上郡なり。宮趾詳ならず。○江淳臣。江淳はもと越前國なりしか。三代格弘仁十四年二月戊子。太政官謹奏。割越前國江沼加賀二郡。爲加賀國。事。准中。とありて。後に加賀國の郡となれり。倭名抄。加賀國江沼郡。國造本紀に。江沼國造。柴垣朝御世。蘇我臣同祖。武内宿禰四世孫。志波勝足尼。定賜國造。○粟田寬云。志波勝足尼は見あたらず。國造越前國坂北郡は。江沼郡に

構れる地にて。柴神社(坂井郡)あるは。由。姓氏錄大和皇別に。江沼臣。石川同氏。建内宿禰男。若子宿禰之後也。まありて聞ゆれど。いかなる神にかと云り。た記に。若子宿禰。江野間。財とあるを。延住か。臣之祖とあり。栗田寬云。若子宿禰は。三國々。造若長足尼と同人なるへく。三國國造。志賀命穴穗朝御世。宗我臣祖。彦。其條に四世孫とあるは。三世孫なるべく思はる。由ありて聞ゆれは。志波勝足尼は。若長足尼の子にやあらんと云り。氏人は。欽明紀江淳臣裙代。續紀三十五。女孺正八位下江沼臣麻蘇比。日本紀略大同五年四月。散位外從五位下江沼臣小並。東大寺正倉院文書。越前國天平二年正稅帳に。江沼郡主政。外大初位下勳十二等江沼臣大海。主帳外少初位。勳十二等江沼臣入鹿。また同國天平四年郡稻帳。江沼郡々司。大領正八位下勳十二等江沼臣武良止。清和紀江沼臣河子。除目大成抄。長德二年に。山城權大目。江沼宿禰富基。宿禰姓になりしは。何の御世なりけむ。主殿權少屬。江沼宿禰安氏など云人見えたり。外記日記。一條帝時。大膳少屬江沼延明。朝野群載。鳥羽帝時。加賀權掌江淳成安。法。郡司は。信友云。越國の郡司なり。上文に越人云々とありと云り。下文に據に。こゝに道君二字あるへし。○若干年。本に千を千に誤れり。今訂せり。秘閣本中臣本に。千下十字あるも誤なり。○高麗迷路。高麗下。使人なとの字あるへし。高麗は咸鏡道の海岸より。道路を皇國にとりしものなれば。北海に着するなり。○魏々。魏々に同じと通證に云り。集解には改めて引たり。

是月。乘輿至自泊瀨柴籬宮。遣東漢氏直糠兒。葛城直難波。迎召高

麗使人。五月。遣膳臣傾子於越。饗高麗使。高麗使。傾子。此云。大使審知膳臣是皇  
華使。乃謂道君曰。汝非天皇。果如我疑。汝既伏拜膳臣。倍復足  
知百姓。而前詐余。取調入己。宜速還之。莫煩飾語。膳臣聞之。使  
人探索其調。具爲與之。還京復命。

東漢氏直隸兒。東漢直。雄略紀七年下に出。こゝは氏字誤なるへし。細井貞雄か性氏  
訓は大和なり。西漢の西をカフチと訓るに對へたるなり。此事も既に云り。○高城直。二十二年紀に出  
○注傾子此云舸拖部古。本に拖を施に誤る。今中臣本に據る。考本には。秘閣本に部を舞に作るは。訓に  
據に然もあるへし。但し舞を假名に用ひし事。此紀に他に見えず。さてこの分注。本文傾子の下に在へ  
し。集解に越字下に書たり。○大使は。高麗の正使なり。さてこの大使をオミと訓るにて。韓土の使の  
稱を。しか云ること知られたり。○道君の上。集解に越郡司三字あり。據釋所引私記假名本補。と云  
り。さて此氏は。通證に。記曰。大彥命遣高志道。孝元紀曰。大彥命越國造祖。續紀越前國加賀郡少領道  
公勝石などあり。舸氏錄右京皇別。道公。大彥命孫。彦屋主田心命之後也。とあり。天智紀。越道君女伊羅  
都賣。宮人。文武紀。道公首名。桓武紀に曾祖妣道氏故賜朝臣。とあり。續後紀に道首名孫廣持。及左京

人道公安野。改賜姓當道臣。二代實錄陽成紀。元慶三年三月に。佐渡雜太團。權校尉道公宗雄。光孝紀に  
加賀加賀郡節婦道今古あり。除目大成鈔。村上帝時。筑前權掾道公冬樹あり。朝野群載に正六位上道公  
方行あり。さて道は地名に據れり。和名抄加賀國石川郡鄉名味知。式同郡味知神社。越中國射水郡道  
神社などあり。然るに。本に道君をミチノウシとよめるに就て。記傳に云。記に十二道などある道とは。詔案て言向にまかる國を云な  
り。この道。君は。其上に越國郡司とあるものをさして云るなり。當時未だ郡司と云號はあましかれば。其實は京  
より遣しおかれたる司なるへし。ミチノウシとよめる。古意によくかなへり。神代  
卷なる。三女神在。海北道中。云々。道主と申すと同意なり。と云れしは非なり。○汝非天皇。村田春海云。皇下使字脱す  
かと云り。さる言なり。○果如我疑。句なり。本の訓は非なり。○探索。本に探を採に作る。今中臣本通  
證に引一本に據る。○具爲與之。私記に案假名本作。令返與之。

秋七月壬子朔。高麗使到于近江。是月。遣許勢臣猿與吉士赤鳩。發自  
難波津。控引船於狹狹波山。而裝飾船。乃往迎於近江北山。遂引入山  
背高械館。則遣東漢坂上直子麻呂。錦部首大石。以爲守護。更饗高麗  
使者於相樂館。

許勢臣猿。通證引一書曰。猿少受業船史辰爾。後從百濟博士王柳貴而學。王柳貴見欽明十五年紀。と  
あり。○吉士赤鳩。吉士の事は。多吳吉師。神功。の下に云り。もと新羅國の官より出て。藩國に仕奉れる

人の稱にも用られたるなり。此より前にも繼體紀に吉士老あり。又此より次々の紀にもあまたあり。控引船於狹々波山。狹々波山は近江國志賀郡なり。神功紀に出。さて船を山より引越たる例は。記垂仁段に。自山多和引越御船。逃上行とあり。これは御船に乗ながら引越たるなり。また萬葉に。阿之我里乃。安伎奈乃夜麻爾。比古布禰乃。引船とあるは。山にて造りし船を引出すなり。播磨風土記佐用郡條。引船山近江天皇之世。道守臣爲此國之宰。造官船於此山。令引下。故曰引船。古の船は。みな大木を穿抜たる船なりければ。引出すにも便ありしなるへし。然るに通證に。文選西都賦なる。泛舟山東。控引淮湖とあるを引て。經山城國淀河伏見宇治。而引至于勢多大津也。神武紀戊午年二月下宜併考とあるは非なり。淀河伏見宇治は。いかにもあれ。勢多大津まで。舟の浜上るへき川路はあることなし。神武紀なるとは事異なり。思まかふへからす。○迎於近江北山は。湖水に泛へて裝飾りしなり。さて通證に。北山與越前接界也とあるか如し。○引入山背高城館。釋に。私記曰。案假名本作高麗斐館とあるによるに。本は麗字を脱しなるへし。山城志に。相樂郡高城館古蹟在二上粕村とあり。さてこゝに引入たるは。上に引る垂仁記の如く。人を乗なから。狹々波山を控引て。山背に至れるなり。通證に此言還至淀河。横折廻廻山背川也とある。廻廻山背川也と云るは。さもあるへけれど。近江より宇治川を下りしものと見たるなるへければ。これも非なり。○東漢坂上直。姓氏錄右京諸蕃に。坂上大宿禰。出自後漢靈帝男延王也となり。東漢直都賀使主の族なり。坂上系圖に。按坂上系圖に。姓氏詩の文を引たる。

な今本になし。其説詳なり。古本なりと。大日本史氏族志に云り。都賀三子を生り。山木。志努。爾波伎と云。子孫分れて數十氏となる。志努の後坂上氏最著るとあり。坂上は地名なり。大和添上に坂上と云地名。諸陵式に見えたれば。此地に由ある姓氏なるへし。此氏大宿禰。宿禰。大忌寸。忌寸。續紀。姓氏錄に見えたり。氏人にては。天武紀に坂上直國麻呂。同姓熊毛。老。みな壬申亂に功あり。十一年五月。倭漢直賜姓曰連。此時坂上直も連となりしなるへし。十三年舉族據坂上系圖更に忌寸を賜はる。廢帝紀。老の孫大和守坂上忌寸犬養あり。其子苅田麻呂。天平寶字中に特に大忌寸を賜はる。桓武帝時上表して。忌寸を改めて。更に宿禰を賜る。これより坂上。内藏。平田。大藏。文。調。文部。谷。民。佐太。山口等。十姓。忌寸。みな改めて宿禰となる。苅田麻呂子大宿禰田村麻呂。陸奥田村莊に生る。坂上系圖。兼倉大草紙。田村麻呂第三子淨野。陸奥出羽按察使となり。内野を生む。陸奥に居る。其孫古哲田村氏と稱す。淨野八世孫範政。中原氏を冒す。朝野群載。中原系圖。明法博士と爲り。子孫職を世々にせり。淨野弟治部大輔正野。五世孫正任。攝津豐島郡吳庭に居る。其後莊屋。村治等氏あり。正野弟滋野。陸奥安達郡に居る。世々豪族たり。坂上黨と號す。滋野弟右近衛將監廣雄。其後裔紀伊に居る。生地。相賀等族あり。其他上總に武射氏あり。下總に匝瑳氏あり。越後に沼垂氏あり。みな坂上氏の族なり。坂上系圖○錦部首。仁德紀四十一年の下に出。

三十二年春三月戊申朔壬子。遣坂田耳子郎君。使於新羅。問任那滅

三十二年  
辛卯

由。是月。高麗獻物并表。未得呈奏。經歴數旬。占待良日。

壬子。五日なり。○坂田耳子郎君。坂田公。繼體紀元年に出。この人次卷には。坂田耳子王とあり。こゝに郎君とある。郎字疑はし。衍なるへし。さて君は公と一なるへし。○問任那滅由。契沖本に。問下滅任那。由乎と云り。さることなり。集解に。言任那之滅有。何所。因從也。と説れたるはいかふなり。

夏四月戊寅朔壬辰。天皇寢疾不豫。皇太子向外不在。驛馬召到。引入臥内。執其手。詔曰。朕疾甚。以後事屬汝。汝須打新羅。封建任那。更造夫婦。惟如舊日。死無恨之。是月。天皇遂崩于内寢。時年若干。五月。殯于河内古市。秋八月丙子朔。新羅遣弔使未叱子失消等。奉哀於殯。是月。未叱子失消等罷。九月。葬于檜隈坂合陵。

壬辰。十五日なり。○引入臥内。漢書注に。臥内天子臥處とあり。○封建任那。僖二十四年傳に。封建親戚。以蕃屏周。とある義に同じ。後世封建と云名目あるも。これより出たれど。こゝとは義かはれり。○更造夫婦。文選東都賦に。天地革命。四海之内。更造夫婦とあり。任那の民。再ひ土を安くし。業を

樂むこと。夫婦の睦まじきか如く。相和するを云。上文に。欲冀與繼任那之國。猶如舊日。永如兄弟。

とある。如兄弟と云に同じ。通證に夫婦人倫之始。故舉言之。と云れたるは。夫婦字に泥みたる解にて非なり。この夫婦を心得かてにして。官家の誤かと思れし説もあり。非なり。○是月。皇年代略記には此日に作れり。集解には改めたり。○天皇

下。秘閣本有寢字。○時年若干。大日本史天皇崩下に。本書享年闕。一代要記皇年代略記。並曰六十二。皇代紀曰六十二。神皇正統記曰八十一。未レ知孰是とあり。廣中抄。紹運錄。正統記。等にも六十三とあり。但正統記は甚異なり。

父天皇の御年にも合はず。○河内古市。郡名なり。跡は詳ならず。○弔使未叱子失消。本に弔を予に。子を号に誤れり。子は傍注并に天書に依る。次も同じ。考本には失とあり。これも子を脱したるなり。さてこの人。次紀に失消奈末

とあり。○檜隈坂合陵。諸陵式に。檜隈坂合陵。磯城島金刺宮御宇欽明天皇。在大和國高市郡。兆城東西四町。南北四町。陵戸五烟。とあり。此御陵大和國志に。在高市郡平田村。俗呼梅山。傍有翁仲二軀。扶

桑路記。此陵注に。高四丈方四町とあり。記傳云。荒木田久老云。此御陵は。岡より平田村へ行く間。道の北方なり。陵上は。この物を載れり。さて又一は法師に似たる形。一は猿に似たり。四皆高さ四尺ばかりあり。あやしき物なりと云り。この石人の圖。今はくさ

科之。建大柱於土山上。時倭漢坂上直樹柱勝之大高。故時人號之。曰大柱直也。とあり。

日本書紀第十九終

秘閣本中臣本終字無し。(本に、紀の下に卷字なきは例に違へり。脱したるなるべし。)

日本書紀通釋卷之五十一

飯田武郷謹撰

日本書紀卷第二十一

淳中倉太珠敷天皇 敏達天皇

漢書京房傳曰。淮南王。上親弟敏達好政。

淳中倉太珠敷天皇。天國排開廣庭天皇第二子也。母曰石姬皇后。石姬皇  
廣國押盾天皇女也。天皇不信佛法而愛文史。二十九年。立爲皇太子。三十一年四  
月。天國排開廣庭天皇崩。

淳中倉太珠敷天皇。此御名法王帝說に。奴那久良布刀多麻斯支天皇に作り。法隆寺曼陀羅銘文に。蘇  
奈久羅乃布等多麻斯支乃彌己等と。乃の助字を加たり。御名義は既に云り○石姬皇后の下に。石姬皇  
后云々十四字の分注あるは。此あたり前後の御卷の例にたかへれば。後人の携入なるへし○文史を。  
フムヒトと訓るは誤なり。通證に。文書史籍也。非史氏之謂とある意にて。漢土聖賢の史籍を愛好み

敏達天皇  
紀

玉ふよしなり。漢書東方朔傳に。年十二學。書。三冬文史足用とあり。○二十九年立爲皇太子。欽明紀には。十五年立爲皇太子とあり。紹運錄にも。ことと異なり。

元年壬辰

元年夏四月壬申朔甲戌。皇太子即天皇位。尊皇后曰皇太后。是月宮于百濟大井。以物部弓削守屋大連爲大連。如故。以蘇我馬子宿禰爲大臣。

甲戌は三日なり○即天皇位。大日本史即位下に云。皇年代畧記云。年三十五。按本書享年欽。故不書とあり○皇后の上。母字あるへし○宮于百濟大井。倭名抄河内國錦部郡百濟。河内志郷名。百濟今廢。村里大井とあり。皇極紀に。翹岐將其妻子。移於百濟大井家。乃遣人葬兒於石川とあり。石川も郡名なり。考云。按此帝の御宮に。大井宮と云名なし。連部考等に見えず。然れば母皇后の宮なるへしと云れたるは信られず。○弓削守屋大連。舊事紀に。饒速日命十三世孫。尾與連公。目大連の子。荒山子。十四世孫大市御狩連公弟。物部守屋大連公。亦曰弓削大連。池邊雙槻宮御宇天皇御世爲大連。奉齋神宮とあり。公卿補任にも尾與之子也とあり。通證云。式河内國若江郡弓削神社二座。今一座在東弓削村。一座在志紀郡西弓削村。倭名抄若江郡弓削由とあり○如故。こゝにかくあれども。前紀に載せず。公卿補任には。初任未詳とあり。舊事紀に據れば。爲大連は。用明御世の如し。されどこれに大伴金村大連の見えされは。既に欽明御世に。薨られしなるへし。一代要記に。欽明天皇二年

薨とありと記傳に云り○蘇我馬子宿禰は。稻目大臣の子なり○爲大臣。扶桑略記云。壬辰年即此年なり。四月三日甲戌。馬子任大臣。註年二十二歲。大臣稻目男とあり。舊事紀に此下に。物部大市御狩爲大連とあり。

五月壬寅朔。天皇問皇子與大臣曰。高麗使人今何在。大臣奉對曰。在於相樂館。天皇聞之。傷惻極甚。愀然而歎曰。悲哉此使人等。名既奏聞於先考天皇矣。乃遣群臣相樂館。檢錄所獻調物。令送京師。丙辰。天皇執高麗表疏。授於大臣。召聚諸史。令讀解之。是時諸史於三日內。皆不能讀。爰有船史祖王辰爾。能奉讀釋。由是天皇與大臣俱爲讚美。曰。勤乎辰爾。懿哉辰爾。汝若不愛於學。誰能讀解。宜從今始。近侍殿中。既而詔東西諸史曰。汝等所習之業。何故不就。汝等雖衆。不及辰爾。又高麗上表疏。書于烏羽。字隨羽黑。既無識者。辰爾乃蒸羽於飯氣。以帛印羽悉寫其字。朝廷悉異之。

皇子與大臣。春海云。皇子は彦人皇子。竹田皇子を指かと云り。さてこゝに大連のことを脱せるなるへし。○愀然は。集韻に容色變也。荀子注に憂懼貌ともあるを。訓にミ心ノユキテと訓れたるはいかゞ。心の行くは。嬉む時の事なるをや。もしくはミ心ノウコキテの誤か。○丙辰は十五日。○不能讀は。鳥羽に書る故にはあらて。漢文を故に讀釋難く。書まさらはしたるなるへし。○勤乎。イソシキカナを。一にイサヲシキカナとあるにて。此語もと功を稱て云ことなる事。知られたり。此は他より。其人の功を賞する辭なり。勤むる我身より云ふ事にはあらず。後世は多く誤り用ひたり。○近侍殿中。歸化人などを近侍せしめ玉ふことは。此までなかりしを。從今始とあれば。この辰爾を始なりけらし。○東西諸史。神祇令に。東西文部。義解謂。東漢文直。西漢文首。又學令に。大學生取五位以上子孫。及東西史部子。爲之。義解謂。居在皇城左右。故曰東西也。前代以來奕世繼業。或爲史官。或爲博士。因以賜姓。總謂之史也とあり。皇城左右とは。左は大和國に在る史を云。右は河内國に在るを云故に。これをヤマトカフチと云るなり。この事既にも云おけり。さて東は阿知使主か後。西は王仁か後なることも既に云り。○又高麗云々。漢文の讀解かたく書たるか故に。又云々と云るなり。かくまで表疏の法にたかへる事をしたるも。みな皇國の智識の度を。伺奉らむとの態なること。彼鐵楯鐵的を奉りしに同じきしれわさなり。後に出來たる。かの蟻通明神の七曲玉の古事なども。かゝる事より世に云ならはしけん。これを以て思ふにも。高麗國の既くより。文物智識の開けたりしとは知らるゝなり。○鳥羽は。吳語に。右軍皆玄裳玄旗黑甲。鳥羽の矐望之如

黒とあり。字典に矐矐矢也。玉篇結。矐於矢也とも。又韻會通作矐。三輔黃圖。吹飛具矐。樂以射。鳥鷹。註箭有矐。矐即矐也ともあれば。和訓栞。いゆる矐矐をいふ。射くるめるなり。或はいくるとも。矐はたゞの羽にはあらて。矐を矢に具したるなり。右を以て考るに。こゝに鳥羽とあるは。鳥羽を以て織たる緞にて。布帛の至て黒く。其文のわかたきを云なるへし。表疏を鳥羽に書へき由もなく。また書りとも。さるものを以て奉れりとも。朝廷にて納玉ふへきよしもなきを思へし。されは其織たる質にて。鳥羽と書たるなるへきを。まことの鳥羽と思ひたる説は。みな非事なるへし。さて前紀に引る。延暦九年七月。百濟王仁眞。津連眞道等か上表の續に。遣于他田朝御宇敏達天皇御宇。高麗國遣使。上鳥羽之表。群臣諸司莫之能讀。而辰爾進取其表。能讀巧寫。詳奏表文。天皇嘉其篤學。深加賞歎。詔曰。勤乎懿哉。汝若不愛學。誰能解讀。宜從今始近侍殿中。既而又詔東西諸史。曰。汝雖乘不及辰爾。斯並國史家牒詳載其事。伏惟皇朝則天布化云々。眞道等先祖委質聖朝。年代深遠。家傳文雅之業。族掌西岸之職。眞道等生逢昌運。預沐天恩。伏望改換連姓。蒙賜朝臣。於是勅因居賜菅野朝臣とあり。さて上にも云る。船氏王後首墓誌に云。此墓誌は。河内國安宿郡松岡山に在り。往年邱陵崩れて銅牌出づ。即船氏王後の墓なり。銅牌長九寸七分。濶二寸二分。厚五厘許。重五十五錢。面背鐫文。今傳へて。古市郡古市村西林寺に藏せり。さて此墓誌を考證したるもの一册あり。京人藤原幹なり。また寺井次吉郎記一册あり。其地圖及古墳をも詳かに記したり。惟船氏故王後首者。是船氏中祖。王智仁首兒。那沛故首之子也。生下於平婆陁宮。治天下天皇之世。奉上於等由羅宮。治天下天皇之朝。於阿須迦宮。治天下之朝。天皇照見其才異。仕有有功勳。勅賜官位大仁。品

爲大三殞亡於阿須迦天皇之末。歲次辛丑十二月三日庚寅。故戊辰年十二月。殞葬於松岡山上。其二婦安理故能刀自同墓。其大兄刀羅古首之墓。並作墓也。即爲下安保萬代之靈基。牢固永劫之寶地也。とあり。右の文に王智仁とあるは。即王辰爾なり。姓氏錄にも。智仁君に作れり。但し此紀には。姓を史とあるを。墓誌にみな首とあり。後に首の姓となりしものなるへし。さて此紀には漏たれど。王辰爾の子を。那沛故首といひ。其子を王後首といふ。乎婆隨朝敏及ひ等由羅推阿須迦舒二朝に仕へて。大仁の位を賜はれり。この王後首を。推古紀十六年の下なる。王平の事なりとして。平は乎の誤なり。さてまた王智仁を中祖と云るは。大祖辰と。考證に云れしはたかへり。さる本ある事なし。別人と見てあらむに妨なし。王辰爾を中祖と云るは。大祖辰孫王に對して云る稱なりと。考證に云り。安理故能刀自は。智仁の妻名。大兄刀羅古首は。古昔王子を稱して大兄と云。韓人亦然り。大兄刀羅古は。辰孫王子太阿郎王なり。刀羅古太阿郎と俗音近し。並作とは。太阿郎王墓は中方にあり。王後墓は寅にあり。故に並作墓と云なりと。これも考證に云り。右の考證に據て。粟田寛か云。寛按に。日本後紀卷八云。延暦十八年三月丁巳。正四位下行左大辨兼右衛士督。皇太子學士。伊勢守野野朝臣眞道等言。已等先祖。葛井。船。津三氏墓地。在河内國丹比郡野中寺以南。名曰寺山。子孫相守。累世不替。而今機夫成。市。探伐家樹。先願顯魂。未失所歸。伏請依舊令禁許之。とある此文を。自幹か引出ざるは。後紀の未世に顯はれざりし時なる故なり。國圖を照るに。今丹南郡藤井寺あり。藤井寺の南に野中村あり。此に據は。此寺を野中寺と云けん。猶細圖を以て考へば。松岡山などに依て。知らるべき事なるへし。河内志云。野中寺在丹南郡野上村。圖を按に。野上村は野中の西南にあり。藤井寺は其西北に在。なと云れたり。なほこゝに貞幹か附考。京人寺井次吉郎か記をも出すへけれど。あまりなかなかしければ引かず。本書に據て地圖并に古墳のありさまをも見るへし。いと委しき考なり。この古墳の今世に知られたるにても。王辰爾か當時の功を思ふへし○字をナとある例は。允恭紀に欲知姓カヘキナ字。顯宗紀改字キナなど多かり。世

にかなと云るは。假字の略。此假名に對て本字に書たるを眞字と云。

六月。高麗大使謂副使等曰。磯城島天皇時。汝等違吾所議。被欺於他。妄分國調。輒與微者。豈非汝等過歟。其若我國王聞。必誅汝等。副使等自相謂之曰。若吾等至國時。大使顯導吾過。是不祥事也。思欲偷殺而斷其口。是夕謀泄。大使知之。裝束衣帶。獨自潛行。立館中庭。不知所計。時有賊一人。以杖出來。打大使頭而退。次有賊一人。直向大使。打頭與手而退。大使尙嘿然立地。而拭面血。更有賊一人。執刀急來。刺大使腹而退。是時大使恐伏地拜。後有賊一人。既殺而去。明日。領客東漢坂上直子麻呂等。推問其由。副使等乃作矯詐曰。天皇賜妻於大使。大使違勅不受。無禮茲甚。是以臣等爲天皇殺焉。有司以禮收葬。秋七月。高麗使人罷歸。是年也太歲壬辰。

大使を。オホツカヒと訓るは妨なし。オホキミとあるは。オホミの誤なるへし。オミをオホミとも云



り。この事既に云り○輒與微者。この事前紀三十一年に見えたり○賊は。高麗より從來し人等を云○  
領客。延喜治部式に。凡蕃客入朝者。差領客使二人。註掌在路雜事○以禮收葬は。大使の格式にて  
葬たるなり○是年也。本に也字なし。今考本に據て補○太歲壬辰。年代紀を考るに。是年陳孝宣帝大  
建四年に當れり。

二年癸巳

二年夏五月丙寅朔戊辰。高麗使人泊于越海之岸。破船溺死者衆。朝廷  
猜頻迷路。不饗放還。仍勅吉備海部直難波。送高麗使。秋七月乙丑  
朔。於越海岸。難波與高麗使等相議。以送使難波船人大鳥首磐日狹。  
丘首間狹。令乘高麗使船。以高麗二人。令乘送使船。如此互乘。以備  
奸志。俱時發船至數里許。送使難波乃恐畏波浪。執高麗二人。擲入於  
海。八月甲午朔丁未。送使難波還來。復命曰。海裏鯨魚大集。遮囓船與  
檣。難波等恐魚吞船。不得入海。天皇聞之。識其謾語。駭使於官。  
不放還國。

戊辰。三日○吉備海部直。雄略紀七年に云り○相議。本に議を識に誤れり。今中臣本考本等に據て改  
○大鳥首磐日狹。大鳥首は姓氏。磐日狹は名なり。諸注は。さて大鳥首系詳ならず。和名抄周防國大鳥  
郡あり。また備中國淺口郡郷名に。大鳥見えたれば。其等によれる姓なるへし○丘首間狹。丘首は姓  
氏。間狹は名なり。但し丘首も詳ならず。姓氏錄右京諸蕃に。岡連市往公同祖云々。市往公。百濟國明  
王之後也とあり。丘首。岡連。同種にやあらむ。考ふへし○備奸志とは。高麗の使を。海へ投棄むとの  
奸志の設に。豫め備へしなり○丁未。十四日なり○大集。本に集を有に作る。今活字本に據て改○駭  
使於官。没して官奴と爲るなり。令に大藏宮内省等。及諸司に。駭使丁の目あり。

三年甲午

三年夏五月庚申朔甲子。高麗使人泊于越海之岸。秋七月己未朔戊寅。  
高麗使人入京奏曰。臣等去年相逐。送使罷歸於國。臣等先至臣蕃。臣  
蕃即准使人之禮。禮饗大鳥首磐日狹等。高麗國王。別以厚禮禮之。既  
而送使之船至今未到。故更謹遣使人并磐日狹等。請聞送使不來之  
意。天皇聞。即數難波罪。曰。欺誑朝廷。一也。溺殺隣使。二也。以茲大  
罪。不合放還。以斷其罪。冬十月戊子朔丙申。遣蘇我馬子大臣於吉備

國。増益白猪屯倉與田部。即以田部名籍。授于白猪史膽津。戊戌。詔船史王辰爾弟牛賜姓爲津史。十一月。新羅遣使進調。

甲子。五日なり。○戊寅。二十日なり。○磐日狹等。本に狹字脱したり。今京極本及信友校本に引る古本に據て補へり。次も同じ。○送使不來。本に送を臣に誤れり。今考本に據て改。通説にも臣當し作送とあり。然るに集解に臣使とあるに據て。按臣使前年所は非なり。○丙申。九日なり。○田部。この事前紀三十年に出。○膽津。本に膽を贖に誤れり。今訂す。○戊戌。十一日なり。○王辰爾。本に王を壬に誤れり。今訂す。○弟牛。桓武紀に牛を麻呂とあり。姓氏錄右京諸蕃。中料宿禰。菅野朝臣同祖。鹽君孫宇志之後也とあり。また右京。津宿禰。菅野朝臣同祖。鹽君男番侶君之後也とあり。鹽君は午定君なること上に云り。さて牛は宇志と同じ。別人にあらず。こゝには辰爾。弟とあるを。姓氏錄には鹽君孫とあるは異なり。貞幹云。牛は牟の誤にて。番侶。二音牟と近しと云り。さてはこゝなるは番侶にて。宇志とは別人と見たるにか。いかゞあらん。諸本に牛を牟と作りしかなければ。此説信かたし。なほよく考へし。○津史。續紀によるに。午定君の季子麻呂を。津氏の祖とあり。上に引り。姓氏錄の文。津宿禰とも已に引り。さて津史氏は。孝謙帝時。外從五位下津史秋主等三十餘人言。船津。葛井三氏一宗。今二氏既賜連姓。臣等未嘗恩澤。乃改賜連。桓武帝時。對馬守津連吉道等。賜宿禰。同姓少外記巨都雄等。因居地。賜姓中料宿禰とあり。姓氏錄中料宿禰。菅野朝臣同祖。鹽君孫宇志之後也とあり。類史に中料朝

四年乙未

四年春正月丙辰朔甲子。立息長眞手王女廣姫。爲皇后。是生一男二女。其一曰押坂彥人大兄皇子。其二曰菟道磯津貝皇女。臣もあり。また津臣もあり。賢明紀同族なり。に出。

甲子。九日。○息長眞手王。繼體紀に既に出。○廣姫。記に比呂比賣命とあり。記傳云。稱名なるへしとあり。下文十一月薨とあり。○押坂彥人大兄皇子。記に忍坂日子人太子とあり。記傳云。太子は美古能美許登と訓へきこと上に云るか如し。忍坂は居坐る地なるへし。此地土に出。日子人は稱名にて。景行天皇の御子にも。日子人大兄王と申す坐り。此御名も書紀には彦人大兄皇子とあり。御名義彼處に云り。孝德卷に。皇祖大兄也。彼天皇の大御祖父に坐なり。さて此王太子に立坐りし事は。書紀に見えされとも。用明卷にも太子彥人皇子とあり。舒明天皇の大御父王に坐ませは。彼御世にや追尊て。太子とは申奉給ひけむ。諸陵式に。成相墓。押坂彥人大兄皇子。在大和國廣瀨郡。兆域東西十五町。南北二十町。守戸五畑。かくこよなくいかなる故にか。地形によれることばや。大和志に。在平尾村。稱王子塚。隣比相村。墓小塚六。姓氏錄未定に。御原真人。淳中倉太珠敷天皇々子。彥人大兄王之後也とあり。○更名麻呂古皇子。記も同じ。秘閣本皇子の下也字あり。○逆登皇女。記に坂騰王とあり。記傳云。東大寺なる古文書の中に。大和國添上郡酒登莊と云見えたり。此地名なるへし。○菟道磯

津貝皇女。記に宇遲王とあり。記傳云。御乳母の姓なるへし。姓氏錄に宇治宿禰又宇遲部あり。下文七年三月。以菟道皇女。侍伊勢祠。即奸池邊皇子。事顯而解とあり。さて此御名。五年の下にも。豊御食炊屋姫尊の生坐る皇女に。其一曰菟道貝銷皇女。更名菟道磯津貝皇女。是嫁於東宮聖德とあり。記にも同じく。娶妹豊御食炊屋比賣命。生御子靜貝王。亦名貝銷王とあるに附て。記傳云。此磯津貝と申す御名は。傳の紛れの誤なるへし。その故は五年下に。菟道貝銷皇女。亦名菟道磯津貝皇女とあるを。御兄弟の中に。かく全く同じ御名はあるへくもあらざればなり。右は此記も同じ。されは誤に非ず。此の御名も。此記に宇遲王と見え。書紀にも七年の處には。たゞ菟道皇女とあれば。磯津貝は彼と紛れて誤れるなり。共に菟道と申せるからなりと云り。さる事なるへし。

是月。立一夫人。春日臣仲君女。曰老女子夫人。更名藥君娘也生三男一女。其一曰難波皇子。其二曰春日皇子。其三曰桑田皇女。其四曰大派皇子。次采女。伊勢大鹿首小熊女。曰菟名子夫人。生太姬皇女。更名櫻井皇女與糠手姫皇女。更名田村皇女

春日臣仲君。春日臣は。紀に天押帶日子命者。春日臣小野臣之祖とあり。雄略紀春日小野臣の下に云

ることゝも。考合すへし。記には春日中若子とあり。記傳云。此春日は地名と聞えたるに。書紀には春日臣とあれば。なほ姓か。中若子は書紀に仲君とあれば。若字は君を誤れるか。なほ何れにても穩にも聞えぬ名なりと云り。○老女子夫人。本に子を君と作り。今秘閣本中臣本兼永本文明本。類史帝王系圖等に據て改む。記にも老女子郎女とあり。記傳云。老女は意美那と訓へきこと。既に云るか如し。續紀十三に。紀朝臣意美那。家原音那。など云人名も見ゆ。書紀に此の名を。老女君夫人とある君字。類史には子とあれば。君字は子を誤れるなるへし。此に因て見れば父名の君字も。子を誤れるにもあるへし。仲子と云名例あり。又更名の藥君の君も子の誤か。又記には郎女とあるを。夫人と書れたるは。例の漢文さまなりと云り。○藥君娘也。君の訓コとあれば。右の記傳の説。まことにさもあるへし。さて也は衍なるへし。集解に子に改めたるはさかしらなり。○難波皇子。記に難波王とあり。記傳云。御乳母の姓なり。姓氏錄に。難波忌寸難波難波連などあり。此王崇峻紀にも見ゆ。さて姓氏錄に。路真人。守山真人。甘南備真人。飛多真人。英多真人。大宅真人。成相真人など。此王の後と見えたり。又橘朝臣も此王の後なり。姓氏錄に。橘朝臣。甘南備真人同祖。敏達天皇皇子。難波皇子男。謂從二位聖德太子。治部卿從四位下美努王。美努王娶從四位下藤原大養宿禰東人女。正一位藤原大養宿禰三千代太夫人。生左大臣諸兄。中宮大夫佐爲宿禰。贈從二位半瀧女王。云々。和銅元年十一月己卯大嘗會。二十五年癸未曲宴。賜橘宿禰姓於太夫人。天平八年十二月丙子詔。參議從三位行左大將葛城王賜橘宿禰諸兄とあり。續紀十二。天平八年十一月丙戌云々。壬辰云々。考へし。十八に右大臣正一位橘宿禰諸兄。朝臣姓とあり。又萬葉六の三十二葉考へし。とあり。○春日皇子。記には桑田王。次春日王とあり。記傳云。春日王地名なるへし。此二柱の次第。書紀と異なり。此王崇峻紀に出。さて姓氏錄に。香山真人。出自諡敏達皇子春日王也。春日真人。敏達天皇々子。春日王之後也。高

額真人。春日真人同祖。春日王後也。とあり ○大派皇子。記に大俣王。又云。御乳母の姓か。地名か。詳ならず。なほよく考へし。玉穗宮段に同名見え。下にも同名の人女王ありあり。舒明紀に八年秋七月大派王云々。皇極紀にも見ゆ。姓氏錄に茨田真人。敏達天皇孫。大俣王之後也。孫とは誤なるへしとあり ○桑田皇女。姓に桑田真人あり ○伊勢大鹿首。記傳云。神名帳に伊勢國河曲郡大鹿三宅神社あり。此地より出たる姓なり。續紀十七詔に伊勢大鹿首云々。又二十三。三十四に大鹿皇子出と云人見えたるは。同姓か異姓か 姓氏錄に未定大鹿首。津速魂命三世孫。天兒屋根之後也。大神宮雜事記に。治曆三年の處に。河曲神戶預。大鹿武則云々。東鑑に。伊勢國に大鹿俊光。大鹿兼重。大鹿國思など云人見えたり。 なほ類聚符宣鈔に。一條帝時。文殿使部大鹿善忠友忠あり。小右記に。後一條帝時。大鹿致俊あり。除目大成鈔に。白河帝時。伊勢大掾大賀宿禰國親。同姓權少掾則俊あり。同族なり ○小熊。名義未考へす。記には大鹿首之女小熊子郎女とありて。父名なし ○菟名子夫人。記には此名なし。記傳云。久麻と宇那と唱への似たるから。何方にまれ紛れたるなるへしとあり。夫人字は。例の漢文さまに造りて書れたるなるへし。 ○太姫皇女。記に布斗比賣命とあり。記傳云。布斗稱名なり。命とあるめつらしとあり ○櫻井皇女。地名か。御乳母の姓か。欽明皇子にも同名あり。但男王なり ○糠手姫皇女。記には實王。亦名糠代比賣王とあり。實王は。紀に同御名ありて。既に云り。 記傳云。奴加と云こと。男女の名に多くあるは。如何なる義にかあらむ。未思得す。誤は借字なりとあり ○田村皇女。此皇女記には御子の序次の處に見えずして。下に日子人太子の妃の處に。庶妹田村王。亦名糠代比賣命と出せり。記傳云。田村は地名なるへし。其故は此生坐る御名も。田村皇子舒明天皇と書紀にあれば。御母の居坐る地に。其

御子も居坐るものとおなじければなり。さて其は姓氏錄吉田に。奈良京田村里續紀十八に。藤原朝臣仲麻呂三十七に田村後宮などあるも此地なり。大和志云田村第。在。派上郡田中村。見。東南院要錄。とある地なるへし。諸陵式に。押坂墓。田村皇女。在。大和國城上郡。舒明天皇陵内。無。守戸。書紀皇極卷に。二年九月吉備。島皇祖母命薨とあるを。此田村皇女なりと云説あるは。祖母の字に就て誤れるなり。祖母は親母の義にて。皇極天皇の大御母なり。と云り。さて天智紀三年六月。島皇祖母命薨とある。即此皇女なり。釋紀に引る帝王系圖に。しかみえたり。これを記傳に誤なりと云れたるは。却て誤なり。

二月丙戌朔壬辰。朔馬子宿禰大臣。還于京師。復命屯倉之事。二月乙卯朔乙丑。百濟遣使進調。多益恒歲。天皇以新羅未建。任那。詔皇子與大臣曰。莫懈於任那之事。夏四月乙酉朔庚寅。遣吉士金子。使於新羅。吉士木蓮子使於任那。吉士譯語彥使於百濟。六月。新羅遣使進調。多益常例。并進多々羅。須奈羅。和陀。發鬼。四邑之調。是歲。命卜者。占海部王家地。與絲井王家地。卜便襲吉。遂營宮於譯語田。是謂幸玉宮。冬十一月。皇后廣姬薨。

丙戌朔壬辰。本に壬辰朔とあるは誤なり。今集解に據て改む。壬辰は七日なり ○三月乙卯朔乙丑。本